

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (12)

鹿児島県立国分高等学校屋体建替えに伴う発掘調査報告書

もと お さと
本 御 内 遺 跡

(舞 鶴 城 跡)

1994年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、鹿児島県立国分高等学校屋体の建替えに先立って、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した本御内遺跡の発掘調査報告書です。

本御内遺跡の所在する国分平野は、古代から大隅の国の中心であり、国府・国分寺もおかれていたところですが、近世になっても島津義久が隠居した後舞鶴城を築くなど大隅地方の中心地であることに代わりはありませんでした。

本御内遺跡は、この舞鶴城跡の一画に有り、当初は「舞鶴城跡」として調査をしていましたが、調査が進むにつれて他の時期の遺構・遺物の出土が多くなったことから「本御内遺跡」に名称をかえました。

また、国分寺跡にも近いことから、同時期の瓦、土師器等の遺物や古墳時代の遺構・遺物も多量に出土したほか、弥生時代の竪穴住居跡などの遺構と瀬戸内・東九州系の土器と一緒に後漢鏡の破鏡が出土し、注目を集めたところですが。

今回の調査では、以上のような成果があり、今までの知見に新たな資料を付け加えることができました。本報告書が、大隅地方の原始・古代史の解明の一助となり、併せて県民の皆様の文化財保護意識の高揚に役立てば幸甚です。

最後になりましたが、この発掘調査にご協力いただきました県立国分高等学校・加治木土木事務所や国分市教育委員会および地元の皆様に心から感謝いたします。

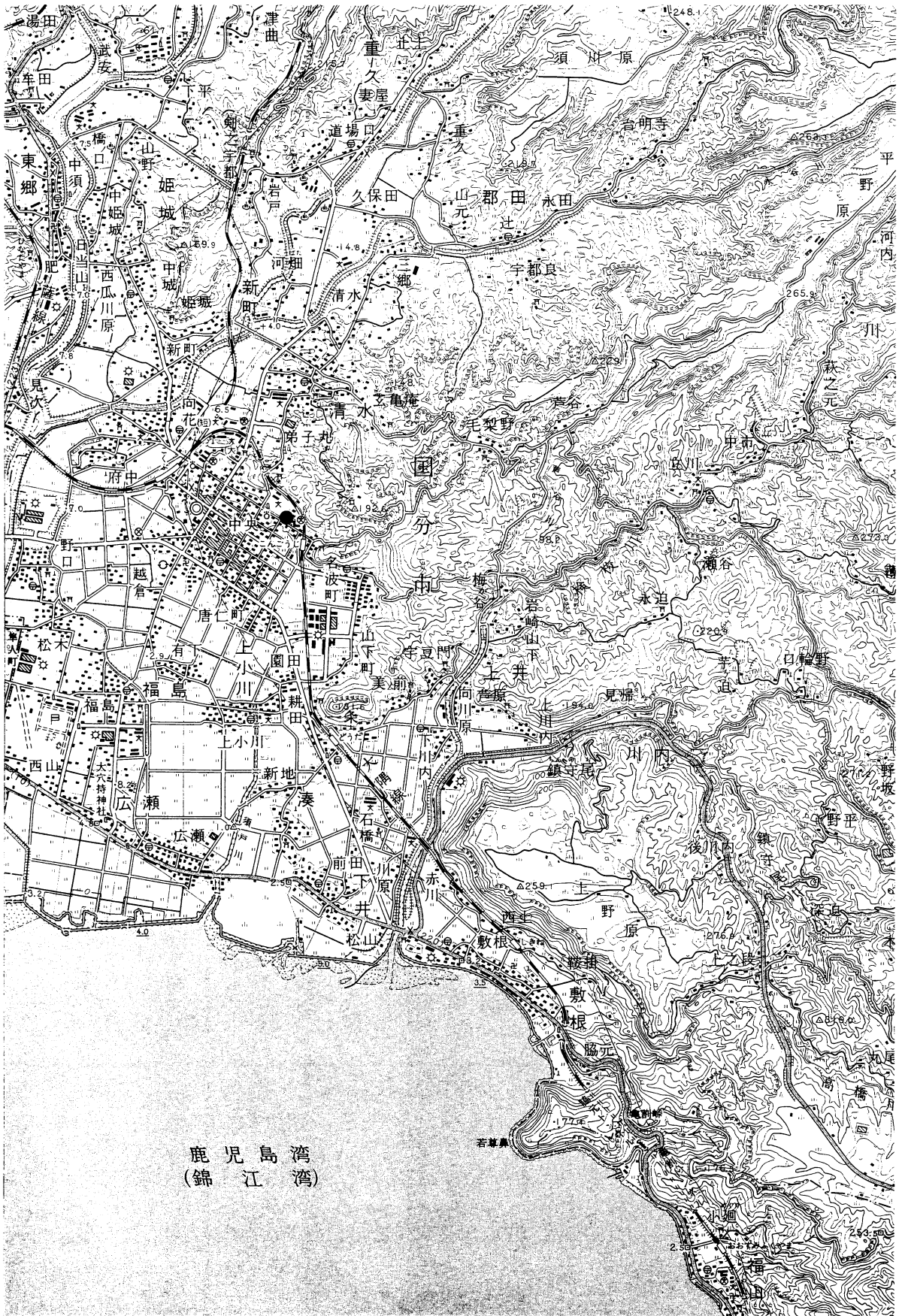
平成6年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 大久保 忠 昭

報告書抄録

ふりがな	もとおさといせき (まいづるじょうあと)							
書名	本御内遺跡 (舞鶴城跡)							
副書名	鹿児島県立国分高等学校体育館建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	12							
編著者名	富田逸郎・関 明恵							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252 TEL 0995-65-8787							
発行年月日	1994年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° , ”	° , ”		m ²	
もとおさといせき 本御内遺跡	かごしまけん 鹿児島県 国分市 中央2丁目 1番地	46212	10-66	314411	130453	19920608) 19920724 19930628) 19931008	2,800 (500) (2,300)	鹿児島県 立国分高 等学校体 育館建替
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
本御内遺跡	城跡	近世	石垣		近世陶磁器		方格T字鏡	
	生産遺跡	古代 ~ 中世	掘立柱建物跡 溝状遺構 水田		瓦 土師器, 白磁 青磁, 緑釉陶器 (近江産)			
	集落跡	古墳 弥生	溝状遺構 土坑 竪穴住居跡		成川式土器 破鏡 安国寺式土器 山之口式土器			



例 言

1. 本報告書は、鹿児島県立国分高等学校の体育館建替えに伴い、鹿児島県教育委員会鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行なった本御内遺跡（舞鶴城跡）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡名は当初「舞鶴城跡」としていたが、発掘調査の結果、舞鶴城跡関連の遺構・遺物よりも他の時代の遺構・遺物が主体をしめたため、当該地域の小字をもって「本御内遺跡」と改称した。
3. 調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4. 調査にあたっては、出水中央高等学校平田信芳氏、鹿児島県文化財保護審議会委員五味克夫氏、同河口貞徳氏、西南学院大学教授高倉洋彰氏のかたがたに現地指導をいただいた。
5. 報告書作成にあたっては、福岡大学教授小田富士雄氏、同助教授武末純二氏、専修大学教授亀井明德氏、佐賀県立陶磁文化館学芸課長大橋康二氏、佐賀県立博物館学芸員蒲原宏行氏、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏の方々にご指導・ご助言をいただいた。なお、亀井氏には中国陶磁器についての玉稿をいただいた。
6. 本報告書は、富田逸郎と関 明恵が編集し、執筆も両名が主となり、一部亀井氏の原稿をいただいている。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章	富田 逸郎
第Ⅳ章	関 明恵
第Ⅴ章	富田 逸郎・関 明恵
7. 陶磁器の分類については、1983年福岡県太宰府市教育委員会発行の「太宰府条坊跡Ⅱ」に基づいた。
8. 発掘現場での遺構の実測・写真撮影は富田・関が主に行い、埋蔵文化財センター職員の前迫亮一・栗林文夫が一部協力した。航空写真については(有)フジタに依頼した。また、遺構図のトレースは埋蔵文化財センター整理作業員が行い、富田・関が補った。
9. 出土遺物の整理復元・実測・トレース・写真撮影は、埋蔵文化財センター整理作業員の協力を得て富田・関が行なった。
10. 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。また、海拔絶対高は国分市が都市計画道路現況図作成のために打設した基準杭から引いた。
11. 遺物番号は一連とし、写真図版とも一致する。
12. 出土遺物は埋蔵文化財センターで一括保管し、一部展示する。

本文目次

序 文	
例 言	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
1 第1次調査（平成4年度）	2
2 第2次調査（平成5年度）	3
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の立地	3
第2節 遺跡の歴史的環境	3
第3章 第1次調査	8
第1節 調査の概要	8
1 調査区の設定	8
2 土 層	8
3 遺 構	8
第2節 近世の遺構・遺物	12
第3節 古代・中世の遺構・遺物	13
第4節 古墳時代の遺構・遺物	22
第5節 縄文時代・時期不明の遺物	22
第4章 第2次調査	23
第1節 調査の概要	23
1 調査区の設定	23
2 遺構の概要	23
第2節 近世の遺構・遺物	26
第3節 中世の遺構・遺物	29
第4節 古代の遺構・遺物	30
第5節 古墳時代・弥生時代の遺構・遺物遺物	32
第6節 近世～弥生時代までの遺物	46
第5章 まとめにかえて	56
付 篇 本御内遺跡（舞鶴城跡）出土の中国陶磁器について - 亀井明德 -	57

挿 図 目 次

第1図 発掘区周辺地形および年度別調査区	4
第2図 周辺遺跡地図	5
第3図 第1次調査区グリッド配置及び土層図等位置図	8
第4図 第1次調査区北壁土層図及び溝断面図	9
第5図 舞鶴城大手前五間道路東側石垣実測図	10

第6図	第1次調査区出土遺構	11
第7図	近世陶磁器	12
第8図	古代・中世の遺物1（土師器）	14
第9図	古代・中世の遺物2（須恵器・陶器・石鍋）	15
第10図	古代・中世の遺物3（青磁）	16
第11図	古代・中世の遺物4（白磁・青花）	17
第12図	古代・中世の遺物5（瓦）	19
第13図	古墳時代の遺物1（甕）	20
第14図	古墳時代の遺物2（甕・壺・ミニチュア土器）	21
第15図	縄文時代・磁器不明の遺物	22
第16図	第2次調査区グリッド配置図	23
第17図	土層断面図1	24
第18図	土層断面図2	25
第19図	溝状遺構1・2・3実測図	26
第20図	溝状遺構1・2・3内出土遺物実測図	26
第21図	中世の遺構配置図	27
第22図	溝状遺構4・5・6及び畦畔実測図	28
第23図	溝状遺構内出土土器実測図	29
第24図	古代の遺構配置図	30
第25図	土坑1（出土土器）及び掘立柱建物跡	31
第26図	古墳時代・弥生時代の遺構配置図	32
第27図	土坑2・3・4実測図	33
第28図	土坑2・3内出土土器実測図	33
第29図	溝状遺構7実測図	34
第30図	溝状遺構7内出土遺物実測図	35
第31図	土坑5内出土遺物実測図	36
第32図	竪穴住居跡実測図	37
第33図	竪穴住居跡内出土遺物実測図	38
第34図	古墳時代・弥生時代の遺物出土状況	39
第35図	古墳時代の出土遺物実測図1	40
第36図	古墳時代の出土遺物実測図2	41
第37図	古墳時代の出土遺物実測図3	42
第38図	古墳時代の出土遺物実測図4	43
第39図	弥生時代の出土遺物	44
第40図	破鏡実測図	45
第41図	石包丁・石錘実測図	45
第42図	土師器実測図1（椀・坏）	46
第43図	土師器実測図2（皿）	47
第44図	土師器実測図3（その他）	48
第45図	黒色土器A・B類実測図	48
第46図	緑釉陶器実測図	48
第47図	青磁・白磁実測図	49

第48図	陶磁器・瓦実測図	50
第49図	須恵器実測図	52
第50図	古墳時代遺物実測図	53
第51図	弥生時代遺物実測図	54
第52図	その他の遺物実測図	55

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表	6・7
-----	---------	-----

図 版 目 次

図版1-1	遺跡周辺航空写真	- 2	土層	60
図版2-1	発掘風景	- 2	第1次調査遺構全景	61
図版3-1	大手前道路石垣	- 2	同上面	62
図版4-1	中世水田跡(第2次調査)	- 2	中世掘立柱建物跡及び出土土師器	63
図版5-1	古墳時代の溝・弥生時代住居跡全景	- 2	弥生時代住居跡全景	64
図版6-1	弥生時代の溝・遺物出土状況	- 2	古墳時代の溝・遺物出土状況	65
図版7-1	古墳時代の土器出土状況	- 2	溝内出土土器出土状況	66
図版8-1	土坑7・土坑7内出土土器(蓋・壺)			67
図版9	出土遺物(1)			68
図版10	出土遺物(2)			69
図版11	出土遺物(3)			70
図版12	出土遺物(4)			71
図版13	出土遺物(5)			72
図版14	出土遺物(6)			73
図版15	出土遺物(7)			74
図版16	出土遺物(8)			75
図版17	出土遺物(9)			76
図版18	出土遺物(10)			77
図版19	出土遺物(11)			78
図版20	出土遺物(12)			79
図版21	出土遺物(13)			80
図版22	出土遺物(14)			81
図版23	出土遺物(15)			82
図版24	出土遺物(16)			83
図版25	出土遺物(17)			84
図版26	出土遺物(18)			85

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は県立学校の諸施設の改良を逐次進めている。その一環として、県立国分高等学校の屋内体育館（体育館）の建替えが計画された。その計画段階で、体育館建替えを主管する県教育庁学校施設課から同文化課に対して埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。文化課は、体育館建替え予定地が周知の遺跡である国分館（舞鶴城）の一面にかかり、また、城域外にもそれと関連する衆中屋敷のあることが絵図面等に残されていることから発掘調査が必要である旨回答し、体育館建替え事業と文化財保護との調整を図るため協議を行なった。その結果、平成4年度に体育館建替えに伴う国分市道の付替え部分の緊急調査を行い、翌5年度の、旧体育館の解体撤去作業終了後に建替え敷地の緊急発掘調査を実施することで合意し、予算措置等の手続きが進められた。平成4年度・5年度で発掘調査を実施することになった。

第2節 調査の組織

平成4年度

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	大久保忠昭
調査企画者	〃	次長兼総務課長	水口 俊雄
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	長野 眞一
	〃	文化財研究員	富田 逸郎
調査事務担当者	〃	主査	下園 勝一
	〃	主事	中村 和代
調査指導者	鹿児島県文化財保護審議会委員		河口 貞徳
	日本考古学協会会員		平田 信芳

平成5年度（平成4年度の担当と入れ替りのみ）

調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	富田 逸郎
	〃	〃	関 明恵
調査事務担当者	〃	主査	成尾 雅明
		主事	中村 和代
調査・遺物指導者	鹿児島県文化財保護審議会委員		河口 貞徳
	日本考古学協会会員		平田 信芳
	専修大学文学部教授		亀井 明德
	北九州市立考古博物館館長		藤丸詔八郎
	佐賀県立陶磁博物館学芸課長		大橋 康二

第3節 調査の経過

1 平成4年度の調査

期 間

調 査 概 要

- 6月8日(月)～6月12日(金) 調査区内の立ち木移植やグラウンドのフェンスの撤去作業等、発掘以前の作業に時間がかかる。重機による表土除去。市役所に依頼して、市道付け替え部分のセンター杭を打設してもらい、その杭を基準に調査グリッドを設定する。グラウンド表土下の盛土層を掘り下げる。
- 6月15日(月)～6月19日(金) 盛土層を掘り下げる。
A3・4区からB4区にかけて石垣が検出される。絵図や現況の石垣との方向から舞鶴城大手前大路の石垣と思われる。石垣の全体の検出と同時に路面の検出に努める。
- 6月22日(月)～6月26日(金) 石垣部分の掘り下げ。
A・B-1～3区の盛土層下の掘り下げ
- 6月29日(月)～7月3日(金) A・B-1～3区の遺構検出、大小7本の溝と畦畔を検出。
同遺構の掘り下げ
- 7月6日(月)～7月10日(金) B-1区からA-3区にかけての大溝及びそれに付随すると思われる小溝6本の写真撮影・実測。
以上の遺構の下位に一本のV字溝を検出する。
- 7月13日(月)～7月17日(金) V字溝の掘り下げ
- 7月20日(月)～7月24日(金) V字溝の掘り下げ
石垣の精査及び写真撮影・実測
- 7月27日(月)～7月30日(金) V字溝の写真撮影及び実測
発掘区全体の清掃及び全景写真撮影
発掘器具などの整理及び撤収作業

2 平成5年度の調査

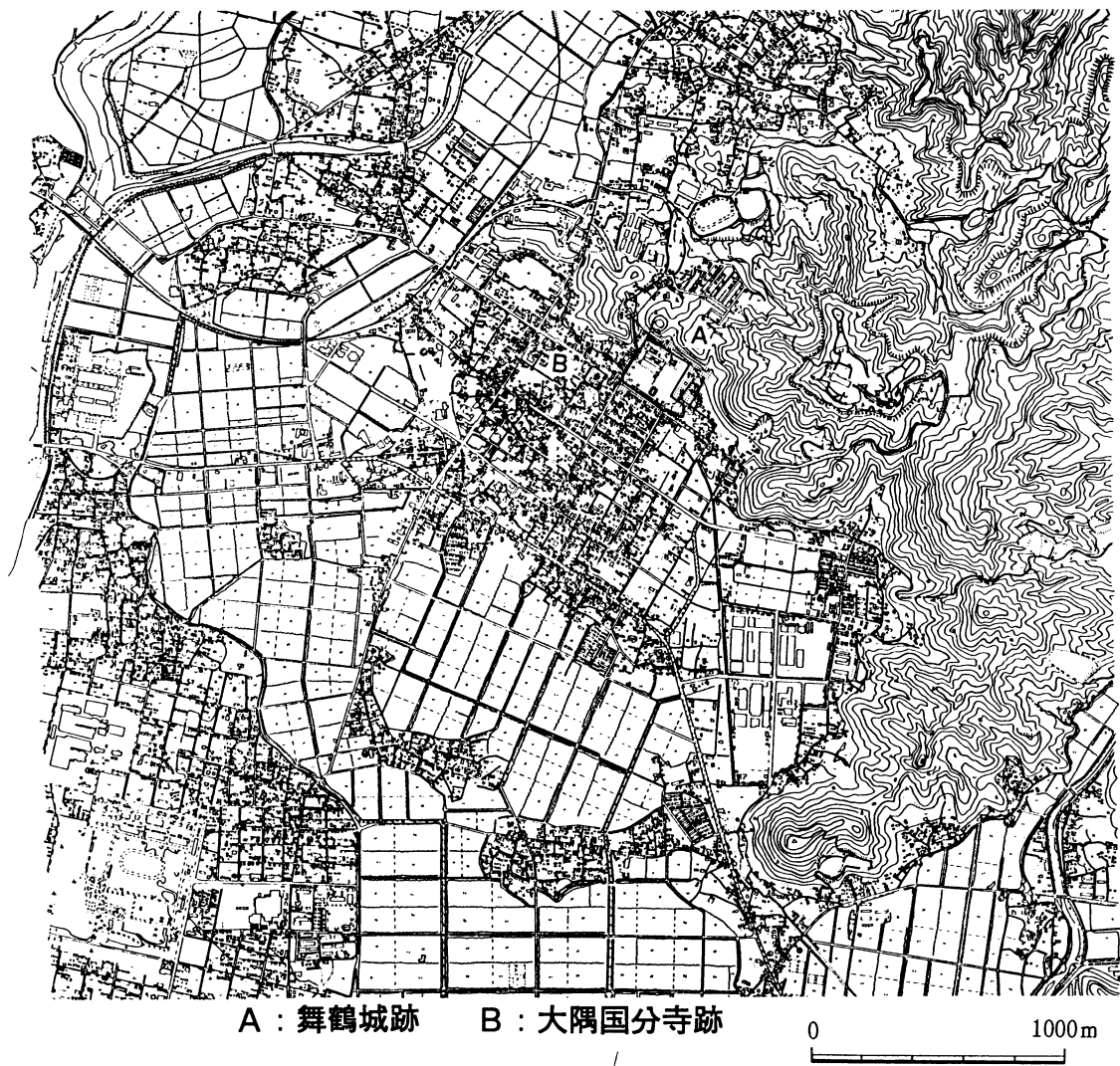
- 6月28日(月)～7月2日(金) 発掘用機材搬入、重機による表土除去。雨天のため、進捗が悪い。
- 7月3日(月)～7月9日(金) 雨天のため、発掘区はプール状態、ほとんど作業できず。
発掘区周辺の土のう積み、表土剥ぎ
- 7月12日(月)～7月16日(金) 重機による表土剥ぎほぼ終了。発掘区全体の壁面清掃。
グリッド杭打設、校舎の南北壁を基準線とする。
- 7月19日(月)～7月23日(金) A～C-8～14区から掘り下げ開始。近代・近世の盛土層が厚い。
B-13区で溝検出、掘り下げる。
- 7月26日(月)～7月30日(金) A～C-8～14区掘り下げ。
7月27日台風5号襲来、以後雨天等のため作業できず。
- 8月1日(日) 8・1豪雨災害、城山が崩れ、土石流発生。
- 8月2日(月)～8月6日(金) ほぼ一週間かけて、豪雨災害の後始末。以後の発掘の効率化を図るため、発掘区域を4分割するようにトレンチ設定。鹿児島市周辺では、8・6豪雨災害、以後富田2週間調査からはずれる。

- 8月9日(月)～8月13日(金) 8月9日台風7号襲来。作業中止や発掘区の排水など、台風の後始末で一週間終わる。
- 8月14日(月)～8月20日(金) 8～14区の盛土層を重機で除去する。国分女学校時代のゴミ穴等、攪乱部分がかなり広い。1～7区水田面検出、精査。
- 8月23日(月)～8月27日(金) 1～7区、精査及び水田面のない部分の掘り下げ。
8～14区、攪乱除去後の清掃、近代(女学校?)の建物基礎確認、
- 8月30日(月)～9月3日(金) 1～7区、精査及び水田面のない部分の掘り下げ。
8～14区、古墳時代包含層の掘り下げ。9月3日台風13号襲来。
- 9月6日(月)～9月10日(金) 台風の後始末。1～7区、水田遺構に伴う畦畔・溝検出、溝の掘り下げ。8～14区、古墳時代包含層の掘り下げ。
- 9月13日(月)～9月17日(金) 1～7区、溝掘り下げ。一番新しい溝から、近世陶器出土。水田面清掃。写真撮影。
- 9月20日(月)～9月24日(金) 8～14区、古墳時代包含層の掘り下げ。遺物の出土が多く、出土状況の記録に追われる。
- 9月27日(月)～10月1日(金) 8～14区、古墳時代包含層の掘り下げ、弥生土器も部分的に出土しだす。住居跡・溝などの遺構検出。破碎鏡出土。
- 10月4日(月)～10月8日(金) 遺構の掘り下げ。遺構のない部分も包含層を掘り下げて、地山までさげる。住居跡とその近くの溝以外はほぼ実測まで終了。
- 10月11日(月)～10月15日(金) 住居跡などの写真撮影・実測、土層図作成。セクション・ベルトをはずして、完掘写真撮影。現場調査終了。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の立地

本御内遺跡の所在する国分市は、鹿児島湾奥部に位置し、旧大隅国の西部にあたる。国分市周辺の地形は、始良カルデラ(鹿児島湾奥部)噴出物で形成されるシラス台地と、それを開析する天降川・検校川等で形成された沖積平野とからなる。遺跡は城山(標高192.6m)の崖下であり、南西方向にはゆるやかな傾斜で沖積地に続く。このため、遺跡内には氾濫原堆積物や背後の城山からの泥流が堆積しており、土層はかなり複雑な堆積状況を見せている。城山からの泥流については、第2次調査の期間中、地元で8・1災害と呼ばれる大雨による河川の氾濫や何十カ所にも上る崖崩れ等の災害があったとき、城山でも崖崩れが発生し、本遺跡前の道路にその土石流が厚く堆積したことを付記しておきたい。

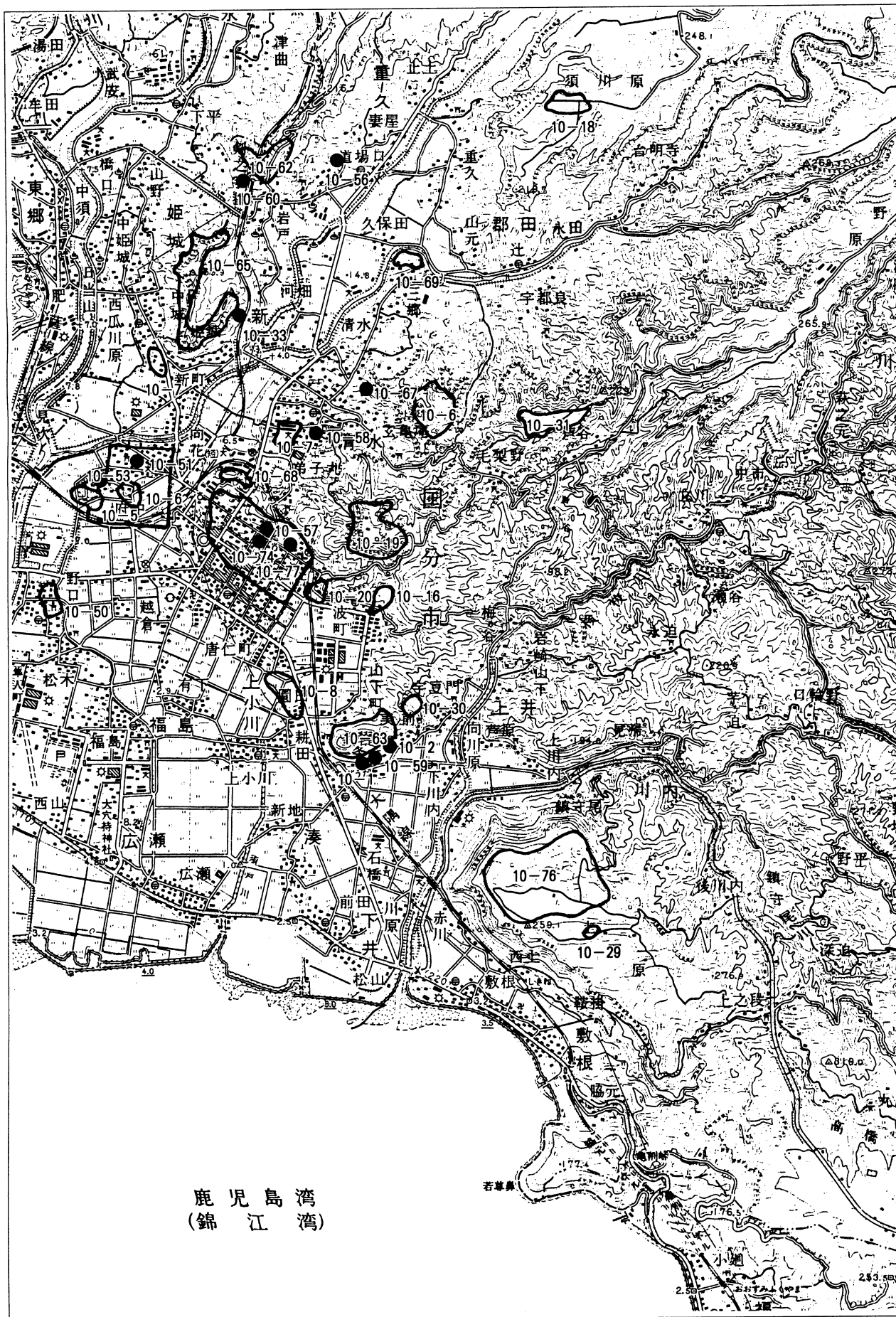


第1次 調査区 (平成4年度)

第2次 調査区 (平成5年度)



第1図 発掘区周辺地形図及び年度別調査区



鹿兒島湾
(錦江湾)

第2図 周辺遺跡地図

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考	旧番号
10-1	平 楯	上井201		縄（前）	平楯式		10-01
2	中 田 貝 塚	上井一条		縄（早）	土器・押型文・石器 人骨等		02
3	椎 渥 原	椎渥原		縄（後）			
4	鍋 迫	鍋迫		縄・古	土器・成川式		
5	気色の杜	府中天神坊	小 台 地	弥	土器・石斧・祭器		1
6	岡 見 山	府中塚脇	台 地	弥・歴	土器・瓦		2
7	智 尾 岡	第子丸乳尾	平 地	弥（後）	土器	勾玉出土 「清水村史」	3
8	園 田	上小川園田	”	”	土器		4
9	平 下 原	平山平之原	台 地	弥	土器・高杯・石斧		5
10	浮 塚	郡田浮石	”	弥（前・後）	土器・石斧		03
11	塚 脇 A	上ノ段塚脇	山 林	縄・弥	土器		04
12	塚 脇 B	県種苗場飼料場	平 地	弥	土器		05
13	大 野 原	黒石大野原	台 地	弥	土器・磨製石斧		07
14	志 明 寺	重久春山志明寺	”	”	”		06
15	口 輪 野	口輪野	山 麓	”			08
16	大 平	上小川大平	”	”			09
17	こがの杜	姫城木ヶ森	畑 地	”			010
18	立 山 原	立山原					
19	城 山 山 頂	上小川新城	山 頂	縄・古	吉田式・土師器（布 留式）・須恵器	昭52. 53発掘調査	6・015
20	妻 山 元	中央2丁目2819	山 麓	縄・古	黒川式・成川式・ 須恵器	昭59市教委発掘 調査	
21	竹 渡 A	竹渡	畑 地	古	土師器・成川式・ 須恵器		
22	竹 渡 B	”	”	”	”		
23	堂 ヶ 原	堂ヶ原	”	”	成川式		
24	藤 ヶ 尾	藤ヶ尾	”	”	土師器・成川式		
25	後 川 内	後川内	”	”	”		
26	東 原	東原	”	”	”		
27	中 原	中原	”	”	”		
28	水 ヶ 迫	水ヶ迫	”	”	”		
29	堂 ヶ 尾	堂ヶ尾	”	”	成川式		
30	樋 脇	樋脇	山 麓	”	土師器・成川式		
31	白 蔵 原	白蔵原	”	”	”		

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考	旧番号
10-32	鷹原	鷹原	山麓	古	成川式		
33	竹下	姫城竹下	畑地	古・歴	土師器		
34	下外戸	姫城下外戸	〃	古	成川式		
35	中平野	上郡田中平野	〃	〃	〃		
36	星合原	川原星合原	〃	〃	〃		
37	茅落	上郡田茅落	〃	〃	〃		
38	甚ヶ原	〃 甚ヶ原	〃	〃	〃 ・土師器		
39	前畑	〃 前畑	〃	〃	土師器・成川式・ 青磁・磨石		
40	外戸前	〃 外戸前	〃	〃	成川式		
41	猿喰	〃 猿喰	〃	〃	〃		
42	牧神	重久牧神	〃	〃	〃 ・土師器		
43	新開込	〃 新開込	〃	〃	成川式		
44	桃ヶ迫	〃 桃ヶ迫	〃	〃	〃 ・土師器		
45	星熊原	〃 星熊原	〃	〃	〃		
46	白蔵原	川原白蔵原	〃	〃	〃		
47	内野々	重久内野々	〃	縄・古	土器・成川式・ 須恵器		
48	大久保	大久保	〃	古	土師器・成川式・ 黒曜石		
49	大王坂	敷根大王坂	〃	古・歴	土師器・青磁		
50	弥勤寺	野中弥勤寺	〃	古	成川式		
51	亀甲土	府中亀甲亀里	〃	〃	土師器・須恵器・ 金環		7
52							
53	大隅国府跡	府中亀甲亀里	〃	歴	瓦		041
54	旧台明寺	台明寺柿迫		〃	層塔・五輪塔・板碑 磨崖仏		012
56	念仏寺	重久道場口	山麓	〃	五輪塔・方柱塔婆		24
57	遠寿寺	中央一丁目19	〃	〃	島津家墓地		
58	清水寺	清水中字都	〃	〃	連碑		
59	淵竜院	上井宇都	〃	〃			
60	吉祥院	重久剣之宇都	〃	〃	十三仏・宝篋印塔		
61	清水城跡	清水外城	山岳	中世	禿倉・通路		016
76	上野原	川内	台地	縄文	平椀式・塞之神式	H3～ 調査中	

第2節 遺跡の歴史的環境

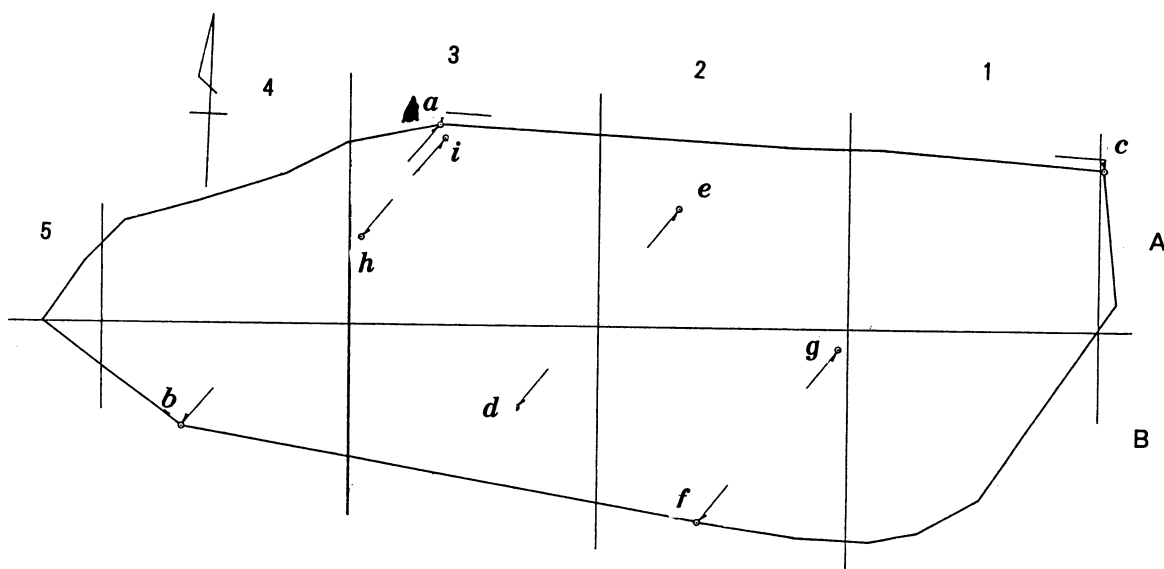
国分市は大隅の国の中心地であり、数多くの史跡が点在している。古式土師器が出土したことで著名な城山山頂遺跡はさきに述べた本遺跡背後の城山の山頂にある遺跡である。古代においては、713年に日向国から大隅が分置されたさい、中心地の国分に国府・国分寺・国分尼寺が建立され、大隅の国の中心地として栄えた。国指定史跡大隅国分寺跡は、本御内遺跡の西約300mの位置にある。さらに、近世においては、本遺跡発掘調査の端緒となった国分舞鶴城が、慶長9年(1604年)島津義久によって築城されており、埋もれていた遺構の一部が今回の発掘で確認できた。現在の国分市街地の町割りがこの舞鶴城築城時に行われたと言われており、国分寺などが存在していたころの条里が作り替えられたと考えられている。条里遺構は現在京セラ国分工場が建っている名波町に昭和40年代まで残っていたと言われるが、現在は跡形もない。

第3章 第1次調査

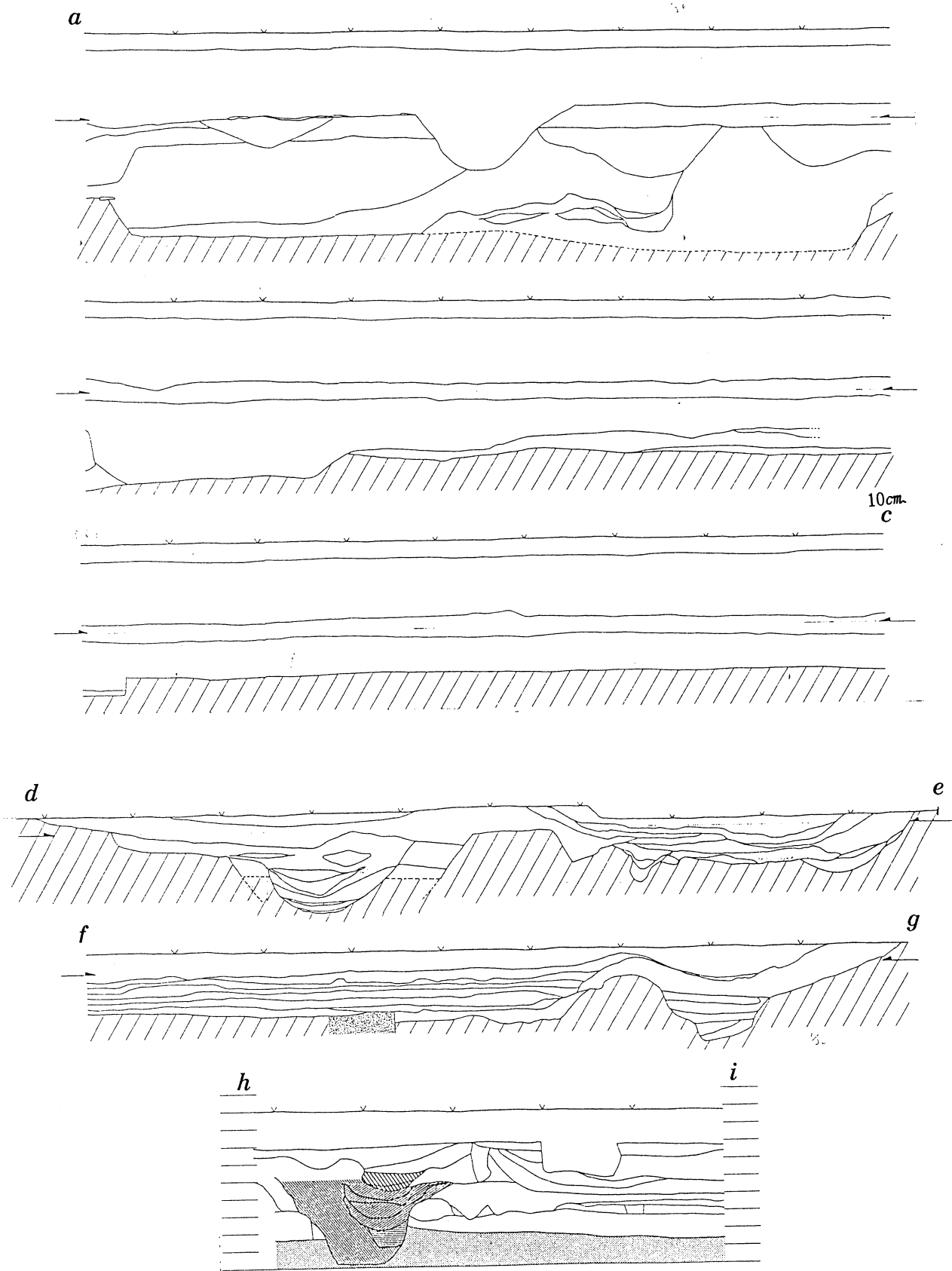
第1節 調査の概要

1 調査区の設定

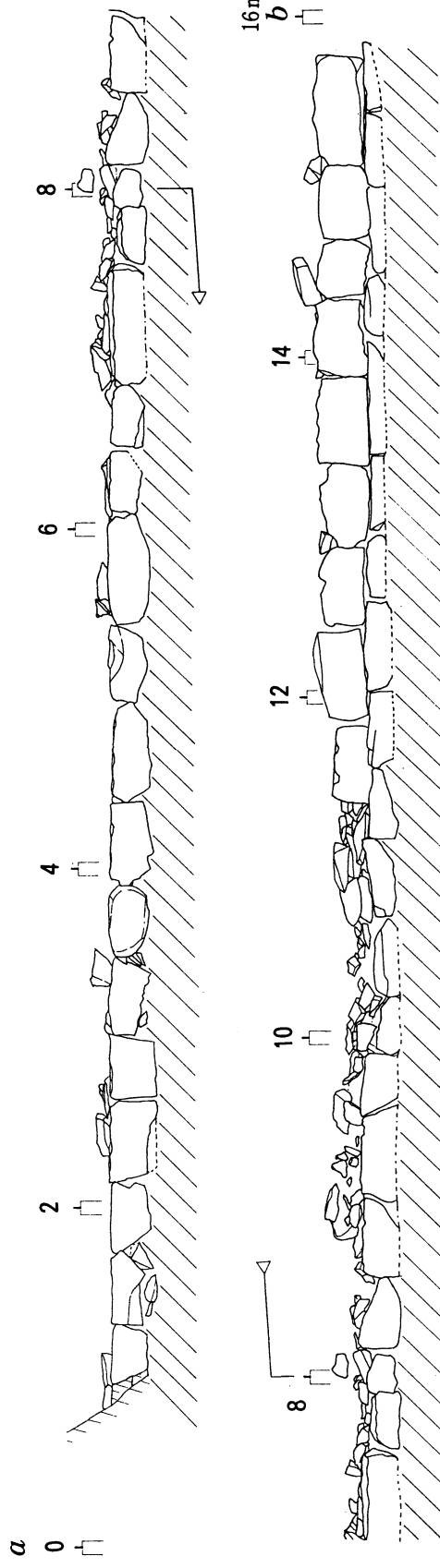
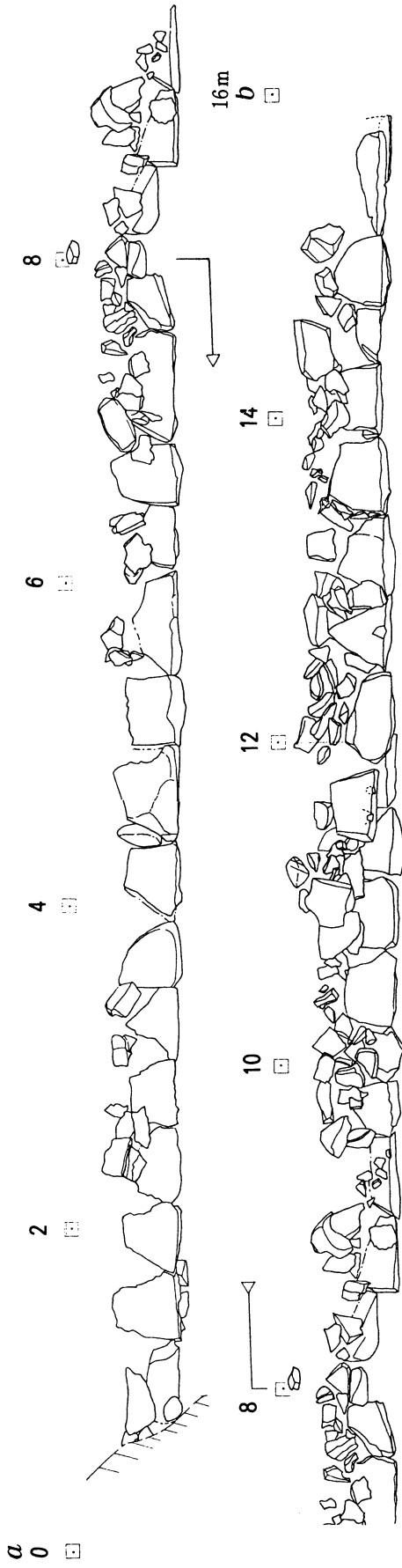
国分高校体育館建て替えに伴う市道の付け替え部分の国分高校グラウンドを約500㎡調査した。調査に当たっては、付け替え道路のセンター杭を利用して、発掘区を略南北に二分したうえで、センターB.P.から10m毎に分割してグリッドを設定した。その結果、偶然ではあるが、磁北に沿ったグリッド・ラインになった。(第3図)



第3図 第1次調査区グリッド配置及び土層図等位置図

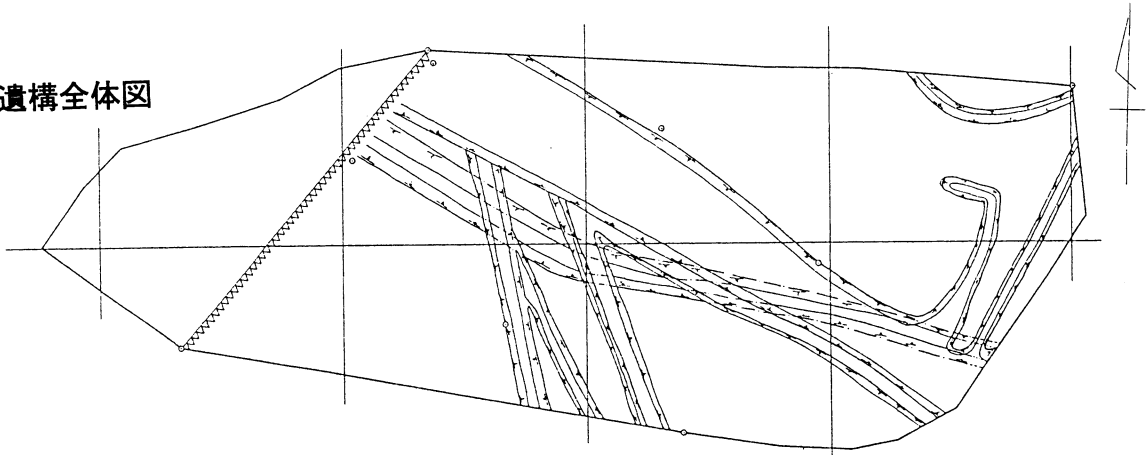


第4図 第1次調査区北壁土層図及び溝断面図

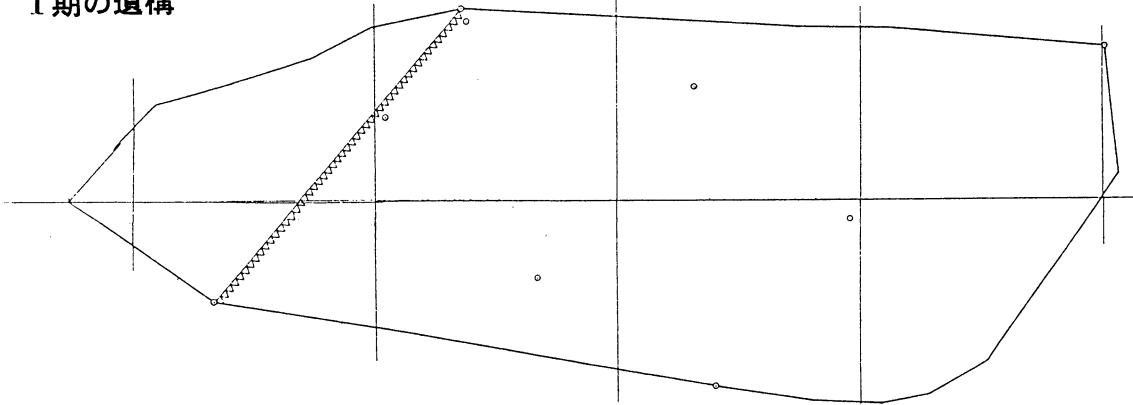


第5図 舞鶴城大手前五間道路東側石垣実側図

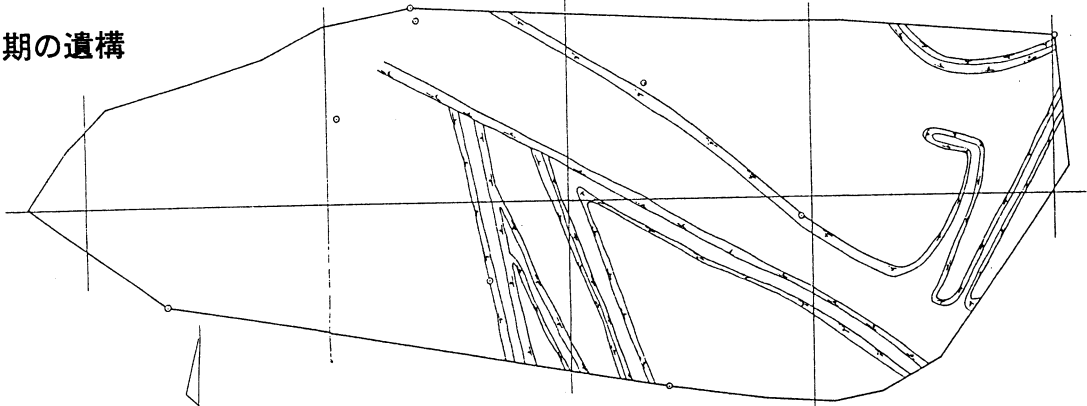
遺構全体図



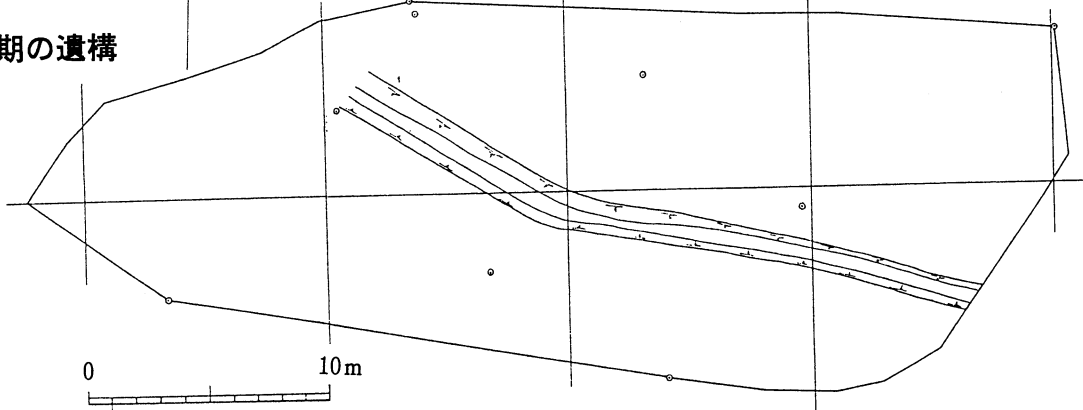
I期の遺構



II期の遺構



III期の遺構



第6図 第1次調査区出土遺構

2 土 層

発掘区は、舞鶴城の時期から現在の高校グラウンドまでの間に相当の掘削・盛土が繰り返されたようであり、発掘当初は土層の理解に苦しんだ。グラウンド表面の置き換えられた土をI a層とし、ガラスや近代陶器の交じる盛土をI b層として、近・現代の盛土層と判断した。その下位には、ガラスなどの交じらない盛土(II層)、グライ化した田土(集積層を含む)(III層)、背後の山からの泥流かと思われる軽石混じりの黄褐色土(IV層)がある。ガラスや近代陶器の交じらない盛土が舞鶴城時代の盛土であり、田土はそれ以前の土地利用を示すものと理解している。

3 遺構

遺構は、1列の石垣と8条の溝および鋭角に交わる2本の畦畔とそれに伴う水田が検出された。

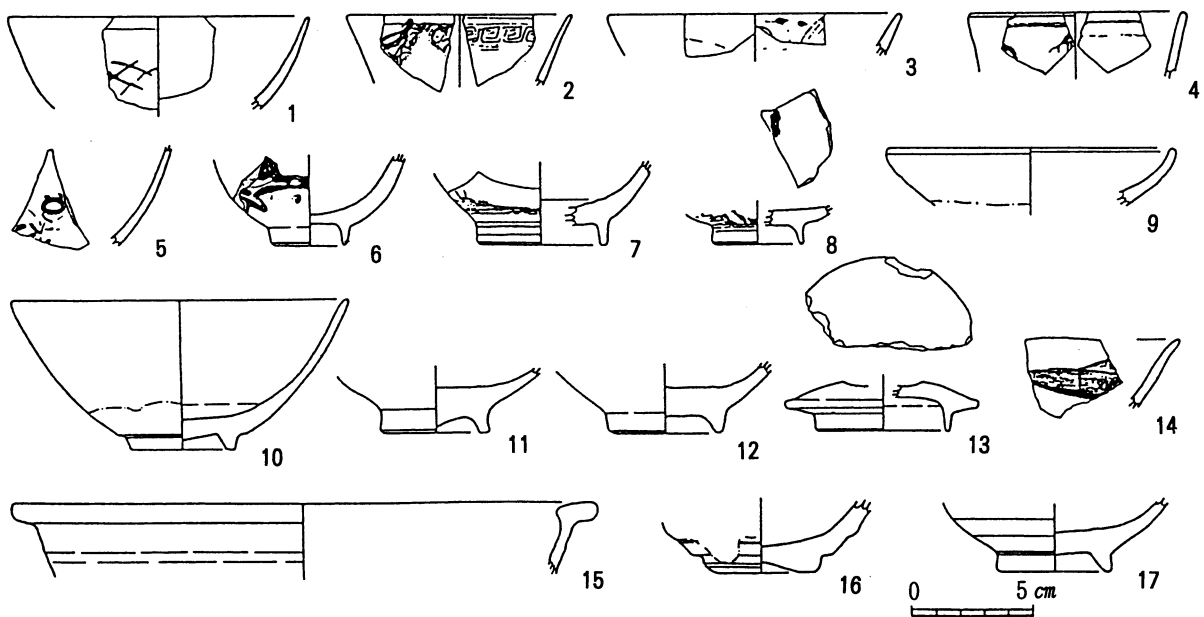
石垣はII層と同時期のものであり、面が西を向いていること・位置・方向から、舞鶴館東側の五間の道の石垣と判断して間違いのないものと思われる。これが今回の発掘区内でのI期の遺構である。

畦畔と8条の溝のうち、幅が広く浅い溝とそれに流れ込む小溝5条とA-1区の小溝はII層の田土に伴うものであり、これらをII期の遺構とした。ただし、これらはより細分できるとと思われる。このII期の溝には、古墳時代の成川式土器・大隅国分寺の瓦・中世土師器・青磁・白磁などがその埋土に入っていた。

II期の遺構とは別に、その下に潜る溝も1条検出されている。これをIII期の遺構とした。この溝には、成川式土器と大隅国分寺の瓦が入っていた。

第2節 近世の遺構・遺物

1～8は国内産磁器である。1は肥前系の染付碗で見込みは釉剥ぎし、アルミナを塗る。19c頃か。2は肥前系の染付端反碗で口縁部内面には雷文帯を描く。19c前～中葉頃。3は肥前系の染付皿で18c後半頃か。4は染付の筒形碗で、雪持ち笹文を描く。肥前系で南九州在地産の可能性が高い。5は肥前の染付丸碗で、草花文を描く。7は肥前系の染付碗で、見込は蛇ノ目状に釉剥ぎされ



第7図 近世陶磁器

る。8は肥前系の染付椀の蓋と見られる。19c前～中葉頃か。9は肥前産の灰釉陶器皿で1580～1610年代。10は肥前産の鉄釉陶器椀で、1590～1610年代。11・12は薩摩焼の陶器椀で、見込は蛇ノ目釉剥ぎされる。高台内中央は円錐状に突起する。13は陶器蓋物の蓋で、外面はとびがんで装飾。14は肥前系磁器の染付端反椀で南九州在地産の可能性が高い。19c前～中葉頃か。15は薩摩焼の褐釉陶器鉢で口縁部には貝目痕が残る。16は瀬戸美濃産の天目椀。16c後～17c前。17は薩摩焼の陶器椀で、見込は蛇ノ目釉剥ぎされる。体内面と高台部付近を除く体外面に白化粧土を施し、その上から透明釉を掛ける。高台内中央部は円錐状に突起する。

第3節 古代・中世の遺物（第8図～第12図）

古代・中世の遺構は溝だけであるが、遺物は土師器・陶器・磁器・瓦等が出土している。

土師器（第8図）

18・27・30・34・39～45はヘラ切りの坏である。18は口縁径11.4cm、器高6.2cm、底径5.4cmで内傾しながら立ち上る体部で、やや器高が高く、底部の断面が厚い。底部付近を面取りし丁寧に仕上げている。27・30も高さのある坏である。34は体部が開きながら直線的に立ち上る。39～45は底部である。39・40・45は底部および底部付近が未調整のもの、41～44は底部付近をナデて調整し、やや丸みをもつ。42～44は口縁径11.2～10.9cm、器高3.9～3.7cm、底部径6.8～4.8cmである。

31～33・35・37は糸切り底の坏である。31～33・35は口縁径13.8～13cmである。35・37は底部付近をナデて仕上げている。

23～26・28・29・36は椀である。23～26・28・29は高台部分である。24は底部外周付近に短くつくもので、それ以外はハの字状に開くものでその長さや高台径は様々である。36は体部が内湾気味に立ち上る椀である。

19・20・22は口縁部～体部であるが、器種が確定できないものである。22は口唇部を平坦に仕上げ、やや外反している。

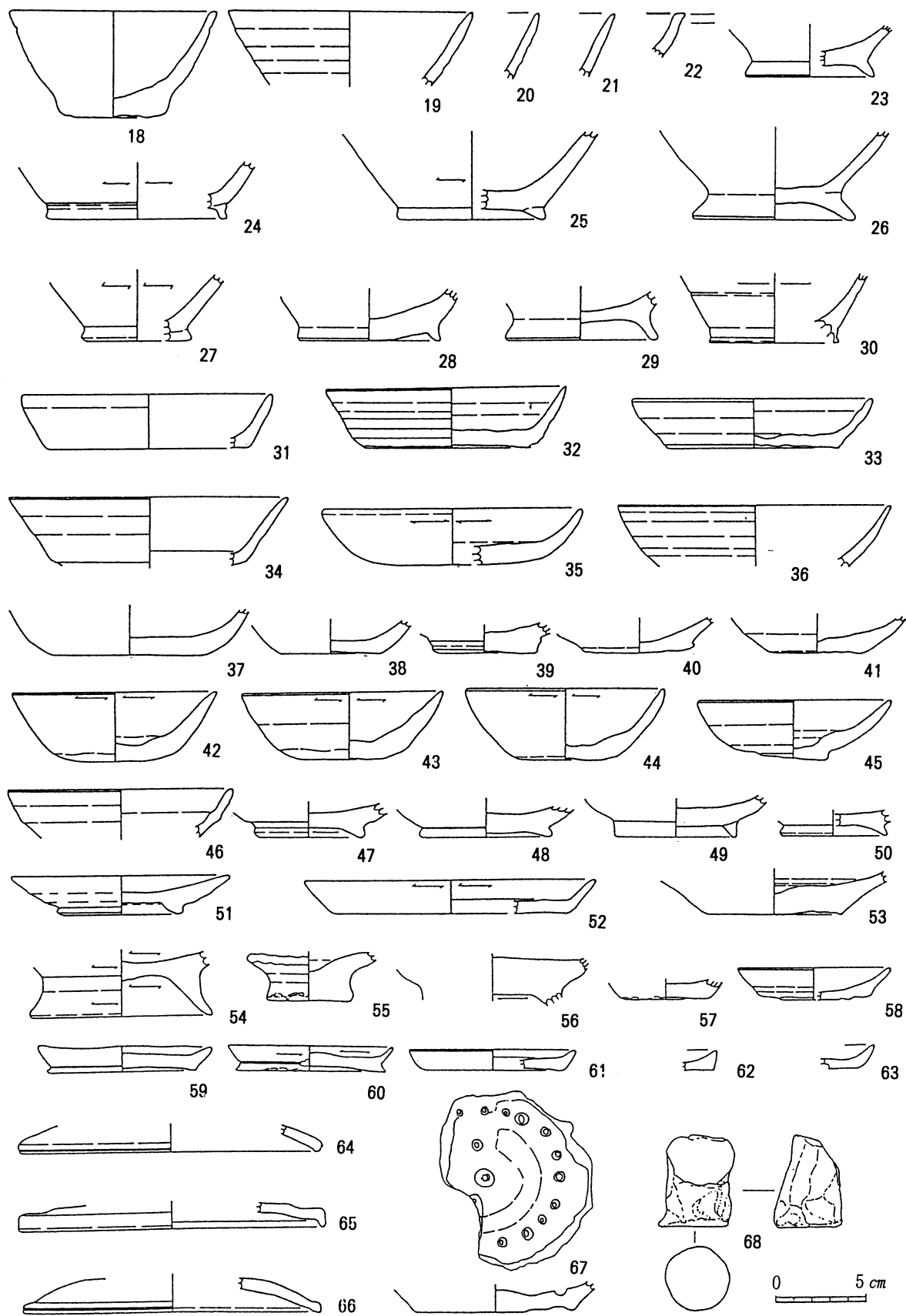
52～63は皿である。52はヘラ切りの皿であるが瓦質に焼けている。復元口縁径は15.8cmを測る。58は復元口縁径8.4cmを測るヘラ切りの小皿である。59～63は復元口縁径が9.6cmと9cmのものがある。46・54・56は脚台付皿である。46は内面に稜を持ち、やや内湾気味に開きながら立ち上る。56は見込に布の痕跡が認められる。55は柱状高台皿で、糸切り底。体部は意図的に打ち欠かされている。

64～66は復元口縁径16.8～16.4cmを測る蓋である。64・66は天井部にかけて丸みを持ち端部は短いかえりもつ。かえりの外面には沈線をめぐらす。65は天井部が平坦でやや大きいかえりをもつものである。

53・67・68は特殊なものである。53の底部には脚が外れた痕跡が3箇所観察される。おそらく脚付きの皿ではないかと思われる。67はヘラ切りの底のやや大きめの坏で、見込みの外周に規則的に11箇所、また、その内側に2箇所孔を掘り込んである。深さは5mm程度で貫通していない。68は3足程度の脚をもつ器の脚であろう。ヘラ状工具で仕上げている。

21は口縁～体部で、38・57は底部であるが、土師器ではなく焼成の悪い須恵器である。

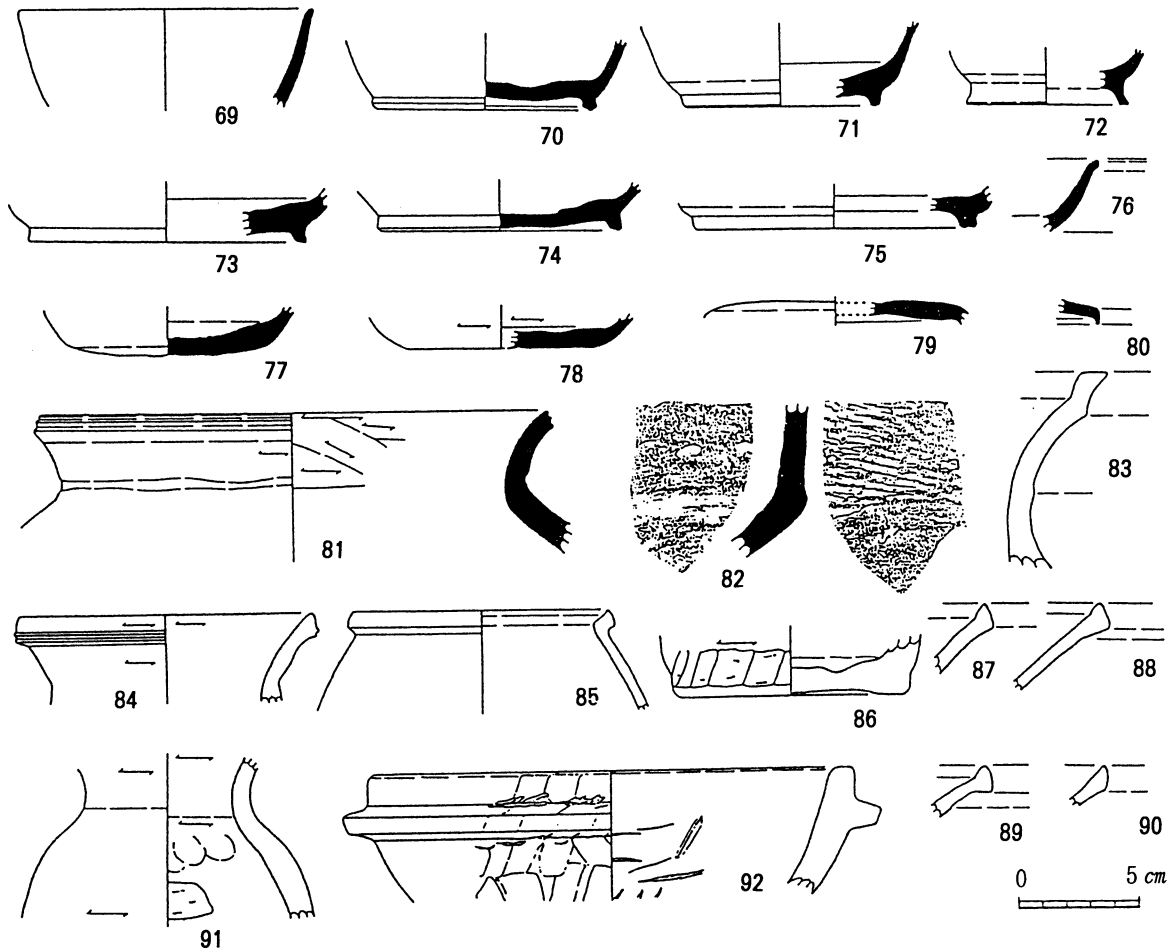
47～51は黒色土器である。47～49・51はA類椀の底部・高台部で、内面のみヘラ磨きを施している。高台はハの字状に開くもので、その長さが様々である。50はB類椀である。内面のみヘラ磨きを施す。高台はハの字状に短く付ける。



第8図 古代・中世の遺物1（土師器）

須恵器・陶器・滑石製石鍋

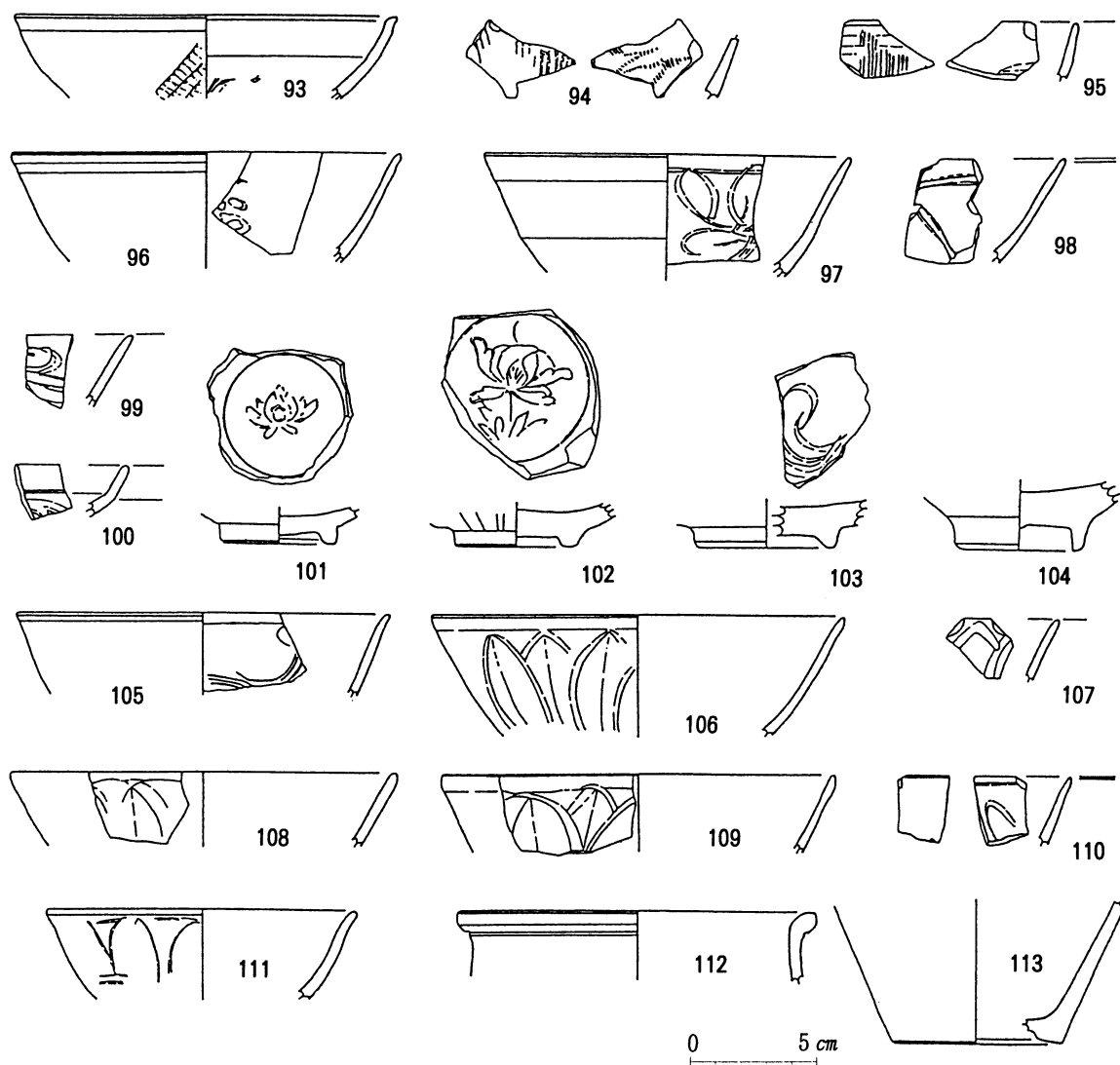
69～83・84・86・91は須恵器である。69～75は碗。69は口縁部が直線的に立ち上るものである。70～75は高台を有する底部で、いずれも高台が外側にふんばる。71は腰がやや張るものである。77・78は底部。79・80は蓋である。81・83は甕である。81は復元口縁径21.9cmを測るもので、口縁部は短く外反する。83は口縁部大きく外反するもの大甕と思われる。82は肩部が屈曲部を有しながら張る壺で外面に平行タタキがみられる。84・86・91は壺。84は口縁部で、内面に自然釉がみられる86は底部で、胴部下部に2cm程度の幅で削り調整が施される。91は肩部がなだらかなナデ肩の頸部から胴部にかけてのものである。外面に平行タタキ痕がみられる。85は中国陶器である。壺形土器の口縁部で太宰府分類の耳壺4類に属するものである。87～90はいずれも東播磨系の片口鉢の口縁部である。87・88は内面にわずかにくぼみをもつ。92は滑石製の石鍋である。復元口縁径が20.7cmを測るもので、口縁下焼く1.5cmに罅をめぐらす。外面は鑿で仕上げ、罅より下側は煤が付着している。罅の断面は台形状である。



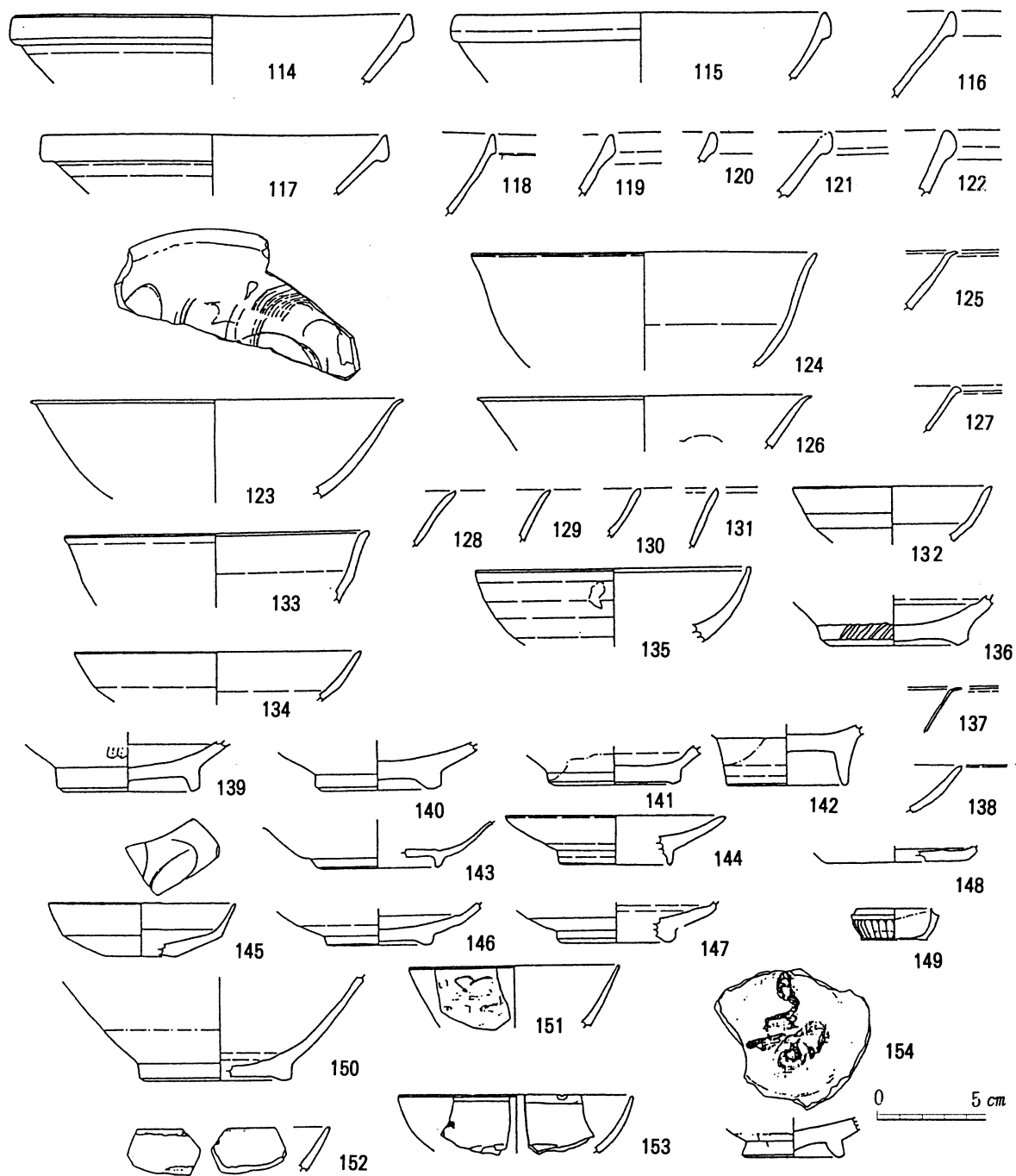
第9図 古代・中世の遺物2（須恵器・陶器・石鍋）

青磁

93は内面に櫛目文，外面にはへら状施文具による装飾が見られる。94は同安窯系青磁の碗Ⅰ類。95も同安窯系の青磁碗。96～99は龍泉窯系青磁の碗Ⅰ類。100は青磁皿。101は龍泉窯系の青磁碗で高台内は蛇ノ目状に釉を搔き取る。102は龍泉窯系青磁の碗Ⅰ－5類。103は龍泉窯系青磁の碗Ⅰ－4類。104は龍泉窯系青磁碗で，明代の所産。105は龍泉窯系青磁の碗Ⅰ－2類。106～109は龍泉窯系青磁の碗Ⅰ－5類。110は龍泉窯系青磁の碗Ⅰ－2類か。111は龍泉窯系青磁の蓮弁文碗で蓮弁は鏝を持たずへら描き。112は陶器壺など袋物の口縁部で，口縁端部に白色の目跡がみられる。113は陶器袋物の底部で釉は内外面共に失透する。



第10図 古代・中世の遺物 3 (青磁)



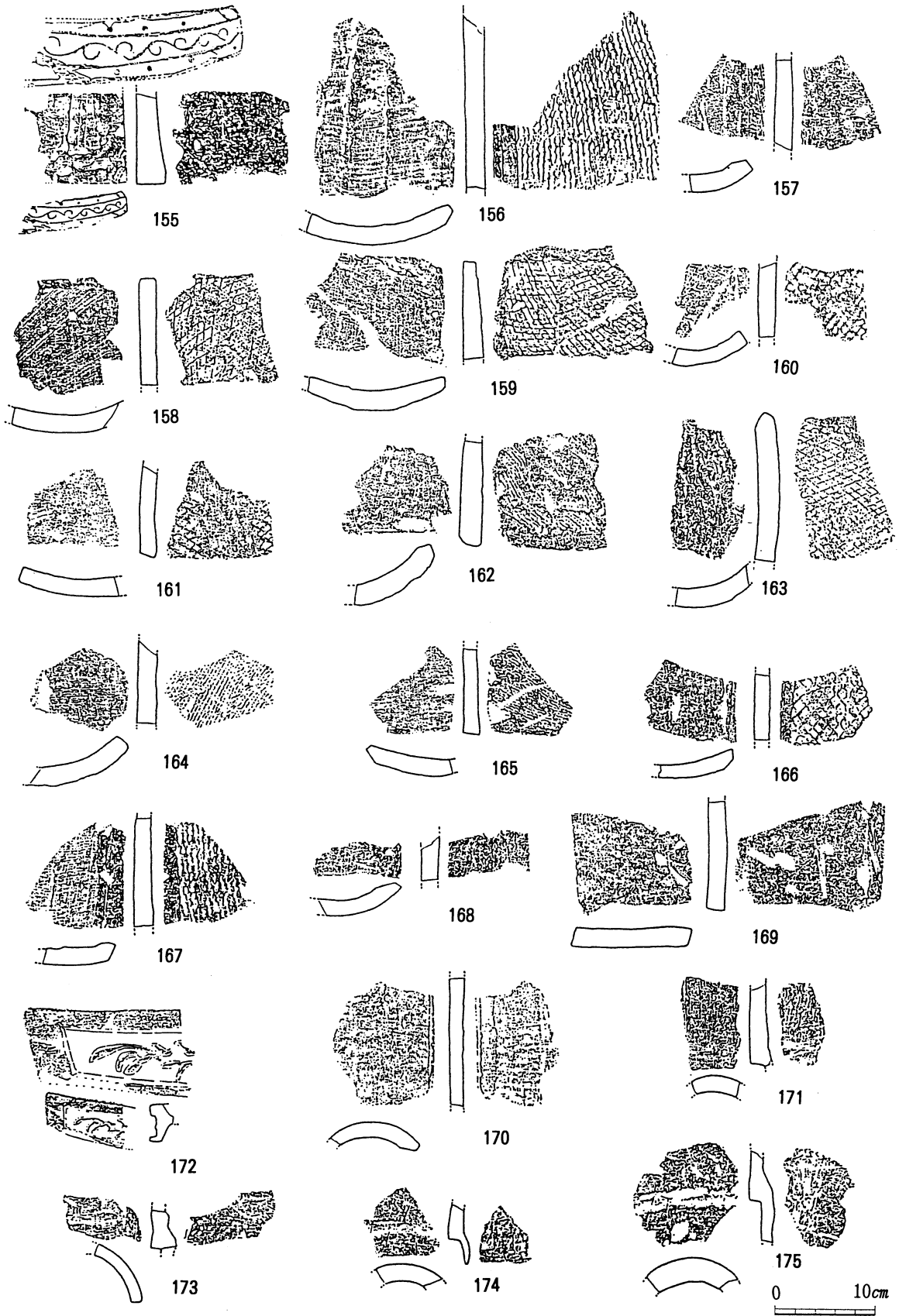
第11図 古代・中世の遺物 4 (白磁・青花)

白磁・青花

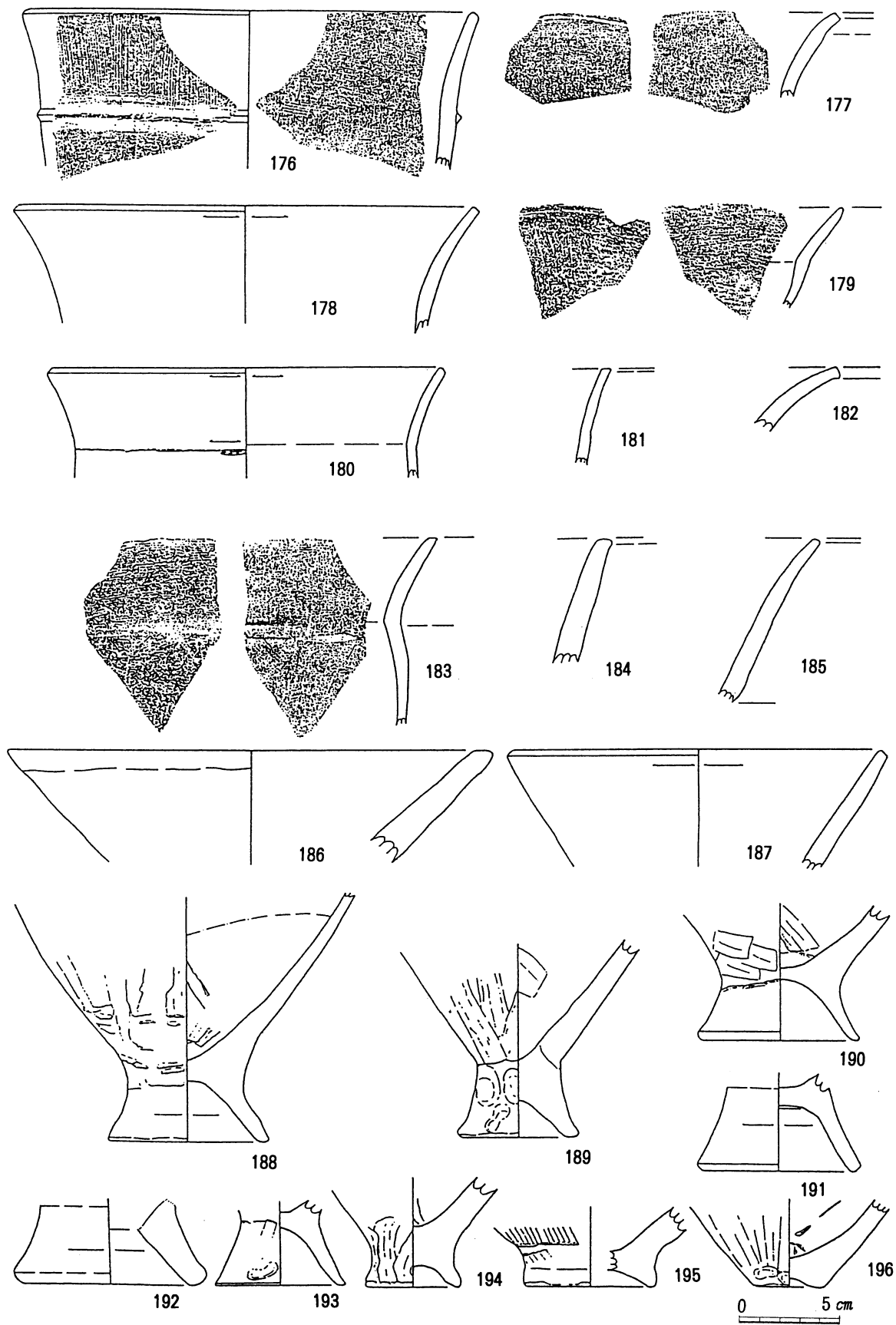
114～122は玉縁状の口縁部を呈する白磁碗である。多くは白磁の碗Ⅳ類かと思われるが、118など小さな玉縁の製品もみられ、碗Ⅱ類等を含む可能性もある。123は白磁碗Ⅶ類で内面に櫛目文が施される。124は白磁碗Ⅸ類で口縁部は釉剥ぎされる。125は白磁碗Ⅴ類若しくはⅧ類と考えられる。126は白磁碗Ⅶ類で内面には花文が施される。127は白磁碗Ⅴ類かⅧ類と思われる。128は白磁皿Ⅸ類の口縁部。129は白磁皿Ⅸ類の口縁部。130は同安窯系の青磁の可能性が高い。131は白磁皿Ⅸ類の口縁部で128と同一個体と思われる。132の白磁は2次的な焼成を受けた痕跡がある。133と135は詳細不明。134は白磁の皿。136は白磁碗の高台部で外面には削り痕が残る。137の白磁の口縁部は輪花と思われる。138は白磁の皿。139は白磁碗Ⅷ類の高台と思われるが、見込は蛇ノ目に釉剥ぎされる。140は詳細不明。142は白磁碗Ⅴ類の底部。143は白磁の皿で16世紀の所産。144は近世の白磁碗の蓋と考えられるもので、内面は蛇ノ目状に釉剥ぎされる。145は白磁の皿で内面は花文を施す。146・147はともに白磁の高台部で、147の見込は釉剥ぎされる。148は白磁皿Ⅸ類の底部。149は青白磁合子の身。150は白磁碗Ⅳ類。151は青花碗で口縁部外面には波濤文を描く。16世紀前～中葉頃と思われる。152は青花碗で16世紀後葉頃。153は碁笥底の青花皿の口縁部で、16世紀代と思われる。154は組製の青花碗の底部である。

瓦

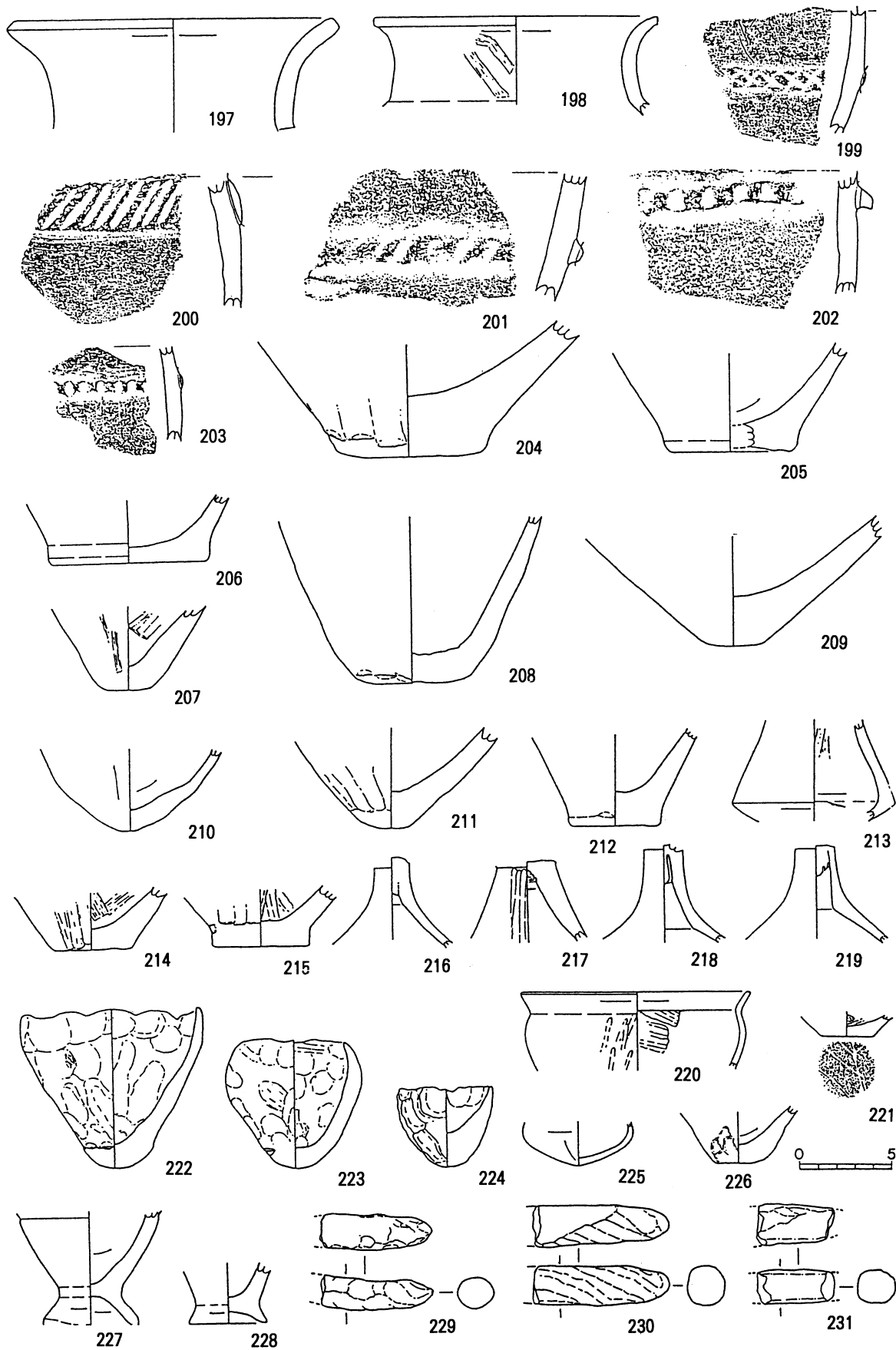
155～175は布目瓦である。155は軒平瓦である。上縁・下縁ともに珠文帯をめぐらし、主文は扁行唐草文である。無顎形式である。156・158～169は平瓦で、外面には縄目叩き・格子目叩き等が見られる。170・171は丸瓦で玉縁を有するものである。これらは、大隅国分寺で使用されたと思われる布目瓦と同じものである。しかしながら、157・172～175は外面調整や焼成の具合が他のものとは異なるものである。157は布目の痕跡を残す平瓦であるが、外面はタタキの痕跡がみられない。171は軒平瓦であるが、焼きが良質で唐草文は退化している。173～175は丸瓦である。これらは近世の瓦と思われるものであるが、島津義久が築城した舞鶴城に使用された瓦ではないかと考えられる。



第12図 古代・中世の遺物 5 (瓦)



第13図 古墳時代の遺物 (1) (成川式土器・カメ)



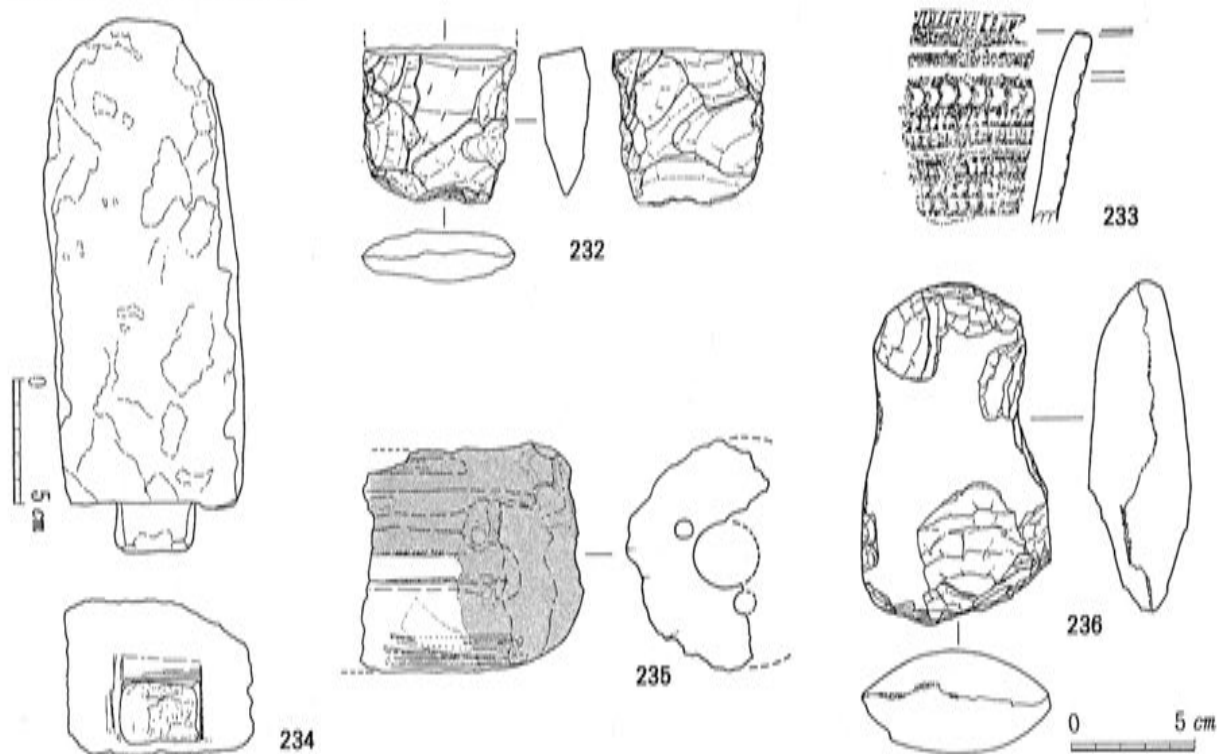
第14図 古墳時代の遺物 (2)

第4節 古墳時代の遺物

176~195は甕形土器。口縁部はわずかに外反するもの（176~181・183~185）と大きく外反するもの（182・186・187）に分けられる。176は胴部上位に三角突帯をめぐらす。180・183は内面に稜線を残すもので、頸部から口縁部へかけてハケ目のかき上げ技法が認められる。188~194は底部。中空の脚台である。195は上げ底が浅いものである。196~211は壺形土器と思われる。197・198は口縁部。締まった頸部から反り気味に外反するものである。199~203は刻目突帯をめぐらせる胴部である。196・204~211は底部で、丸底・平底・乳房状底部等がみられる。212・214・215は鉢形土器の底部と思われる。213は埴型土器の胴部から頸部近くである。胴部最大径の部分で鋭角的に屈曲するものである。216~219は高坏の脚部である。220は口縁径が12.4cmと小型の甕形土器である。221は壺形土器あるいは鉢形土器の底部であるが、底面に木の葉の痕跡が残るものである。222~224・226は手捏土器で指頭圧痕による調整痕が明瞭なものである。225は埴の底部。227は小型の甕形土器の底部。229~231は杓型土製品の柄の部分である。

第5節 縄文時代・時期不明の遺物

232・233・236は縄文時代のものである。232・236は打製石斧。233は貝殻文円筒土器である。口唇部に刻目を施し、口縁部直下に横位の貝殻復縁の刺突文・その下に半截竹管による爪型文・胴部は横位の貝殻復縁による押引文を施すものである。縄文時代早期前半のものと思われる。234は軽石製品であるが嵌め込み用のほぞがあるが、使用目的は不明である。近世のものと思われる。235は筒状を呈するふいごの羽口で、外径 9.6cm、孔径 2.7cmを測る。炉内に挿入される方の端は溶解し、スラグが付着している。



第15図 縄文時代・時期不明の遺物

第4章 第2次調査

第1節 調査の概要

1 調査区の設定

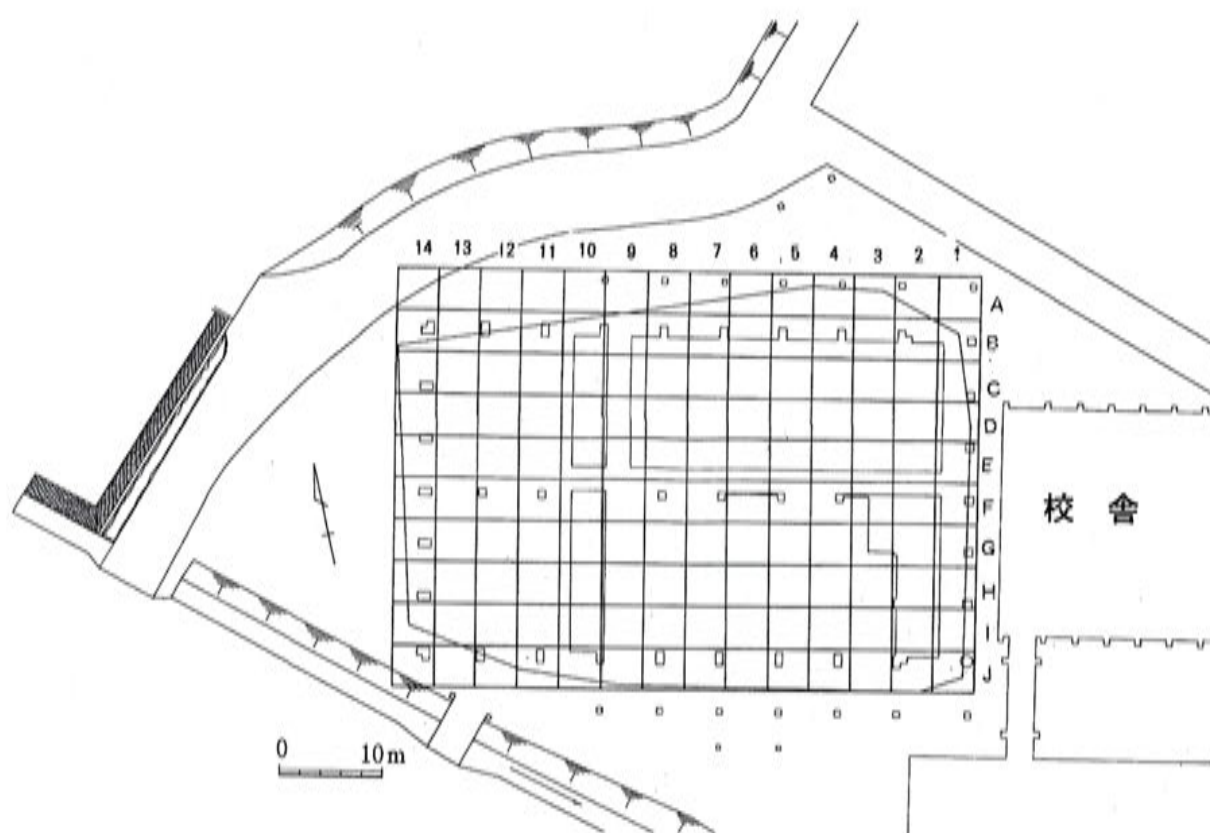
本御内遺跡の第2次調査のグリッド設定は、第1次調査と異なり、校舎側面ラインを基準とし、4×4mのグリッドを設定し、校舎側（東）から西へ1～14区、北から南へA～Jとした。

2 遺構の概要

本御内遺跡の第2次調査の経過は第1章の第3節でも記したが、確認調査において遺物が出土し体育館建設に伴って破壊される1500㎡について全面調査を実施したものである。

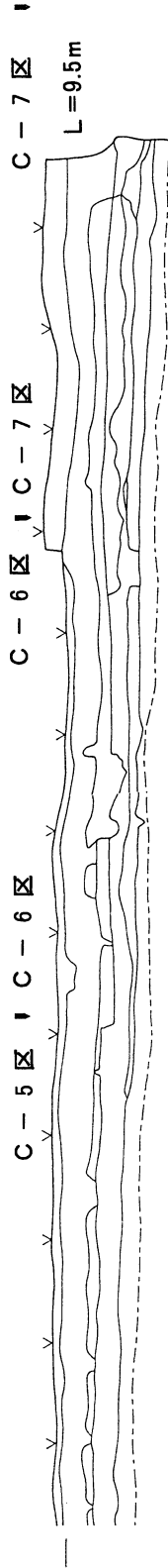
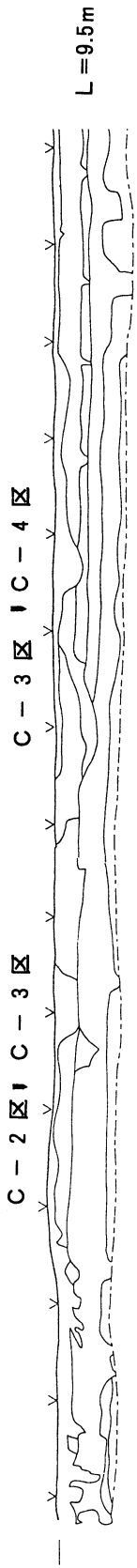
全面調査の結果、江戸時代、室町・鎌倉時代、古墳時代、弥生時代の遺構が検出された。

江戸時代の遺構としては、性格不明の溝状遺構3条が検出され、室町・鎌倉時代の遺構としては水田跡および畦畔、掘立柱建物跡1棟とそれに伴うのではないかとと思われる土坑1基が検出された。また、不規則なピットも検出されている。その他に、江戸時代から室町・鎌倉時代のあいだに3回作り替えられたと考えられる溝状遺構が3条検出された。古墳時代の遺構は、性格不明の溝状遺構1条と土坑4基が検出され、弥生時代の遺構としては、E-9区より竪穴住居跡1基が検出された。



第16図 第2次調査区グリッド配置図

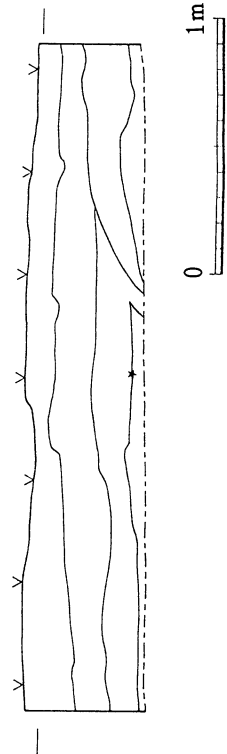
南壁土層断面図



南壁土層断面図

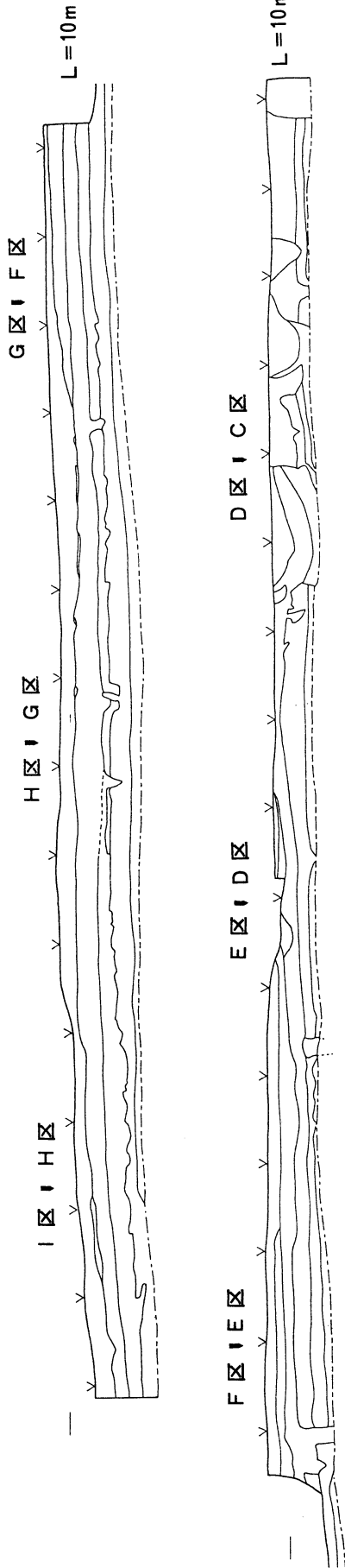


破鏡出土地 西壁土層断面図

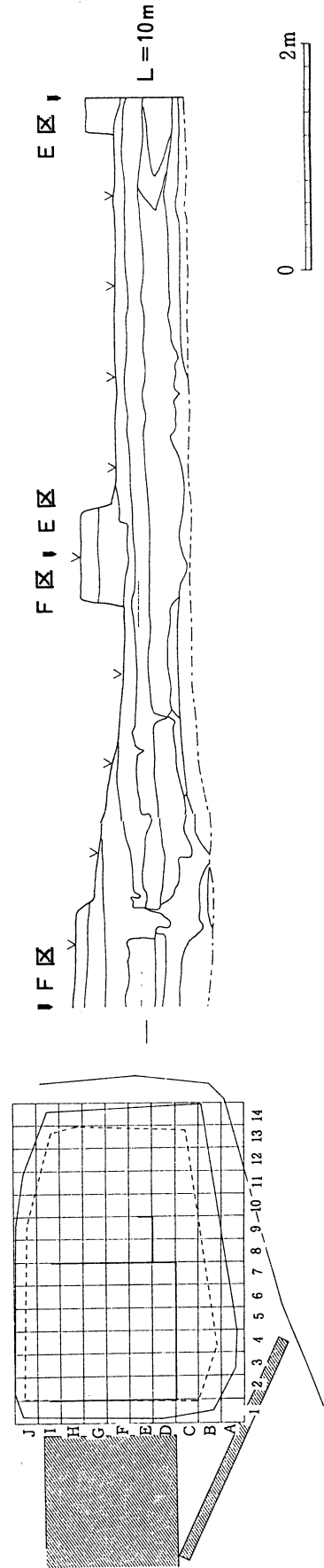
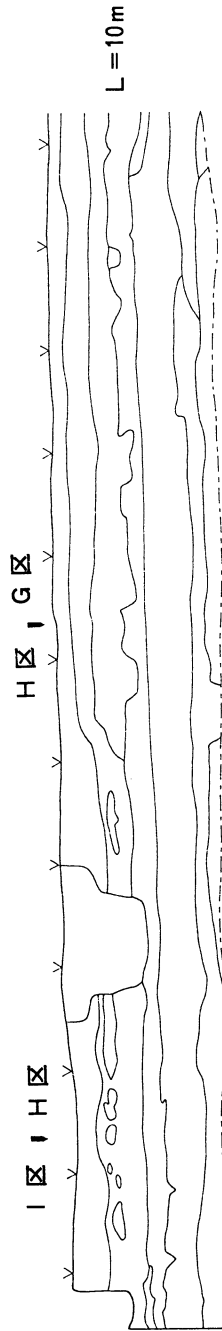


第17図 土層断面図 (1)

西壁土層断面図



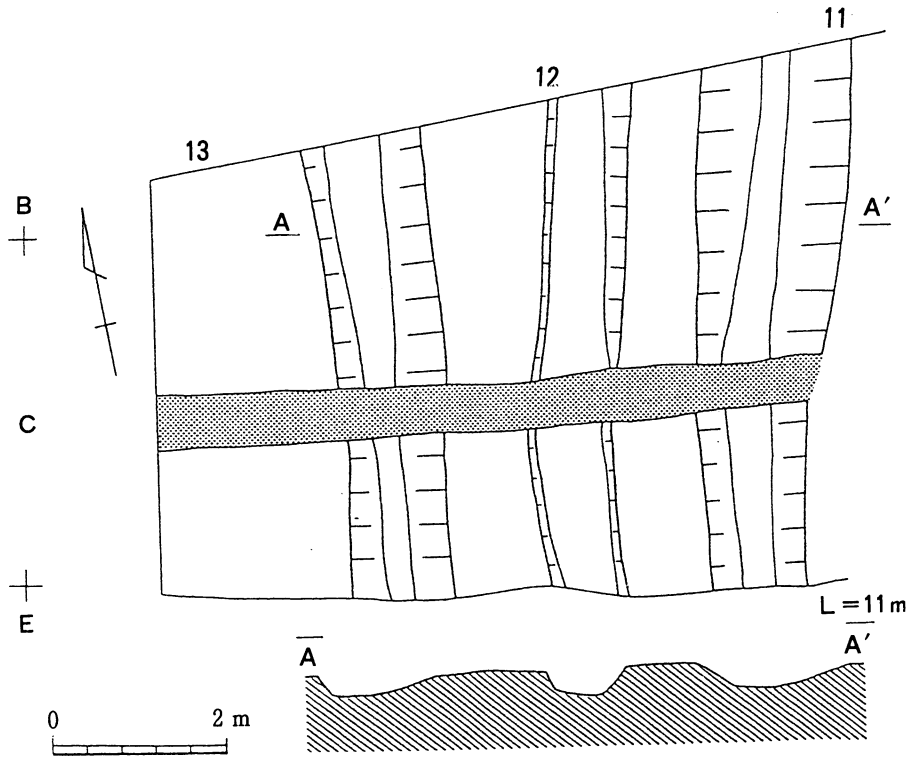
西壁土層断面図



第18図 土層断面図 (2)

第2節 近世の遺構・遺物

近世の遺構・遺物は少なく、浅い溝状遺構が3条と近世陶磁器・近世布目瓦が出土しているのみである。

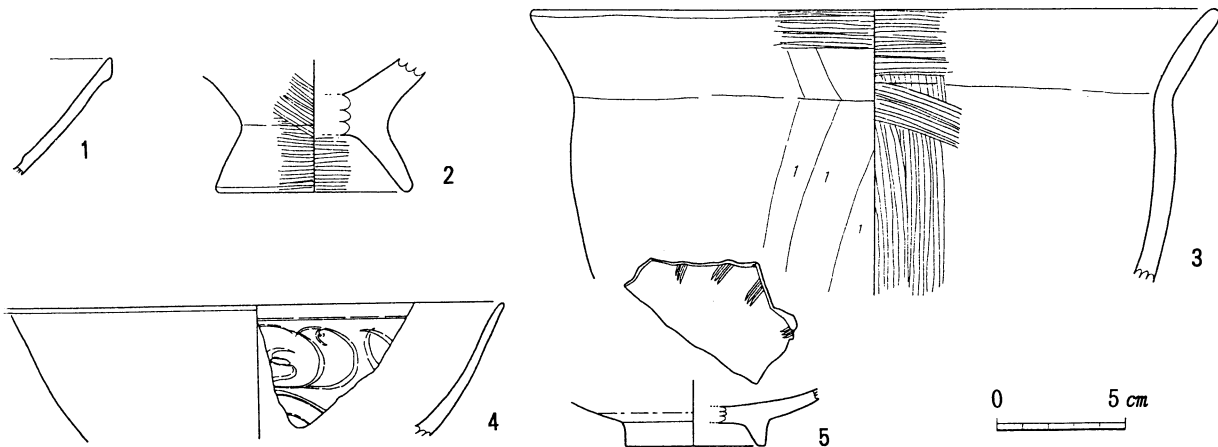


第19図 溝状遺構1・2・3実測図

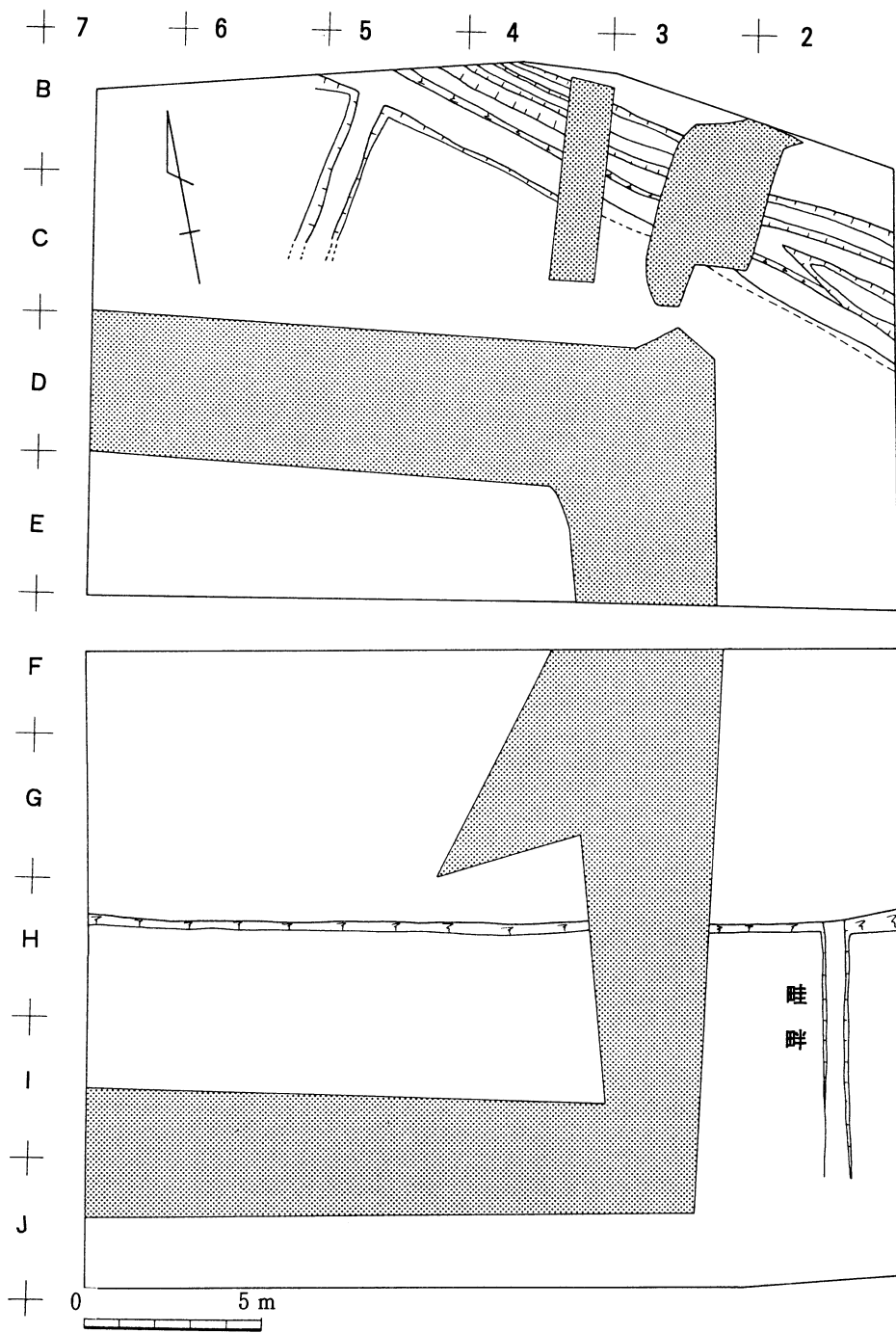
溝状遺構1・2・3及び出土遺物

幅・深さ共に同じくらいの規模の溝が南北方向に三条並んで検出されたものである。断面はU字に近いものである。溝からの出土遺物は少なく図化できたものは5点である。

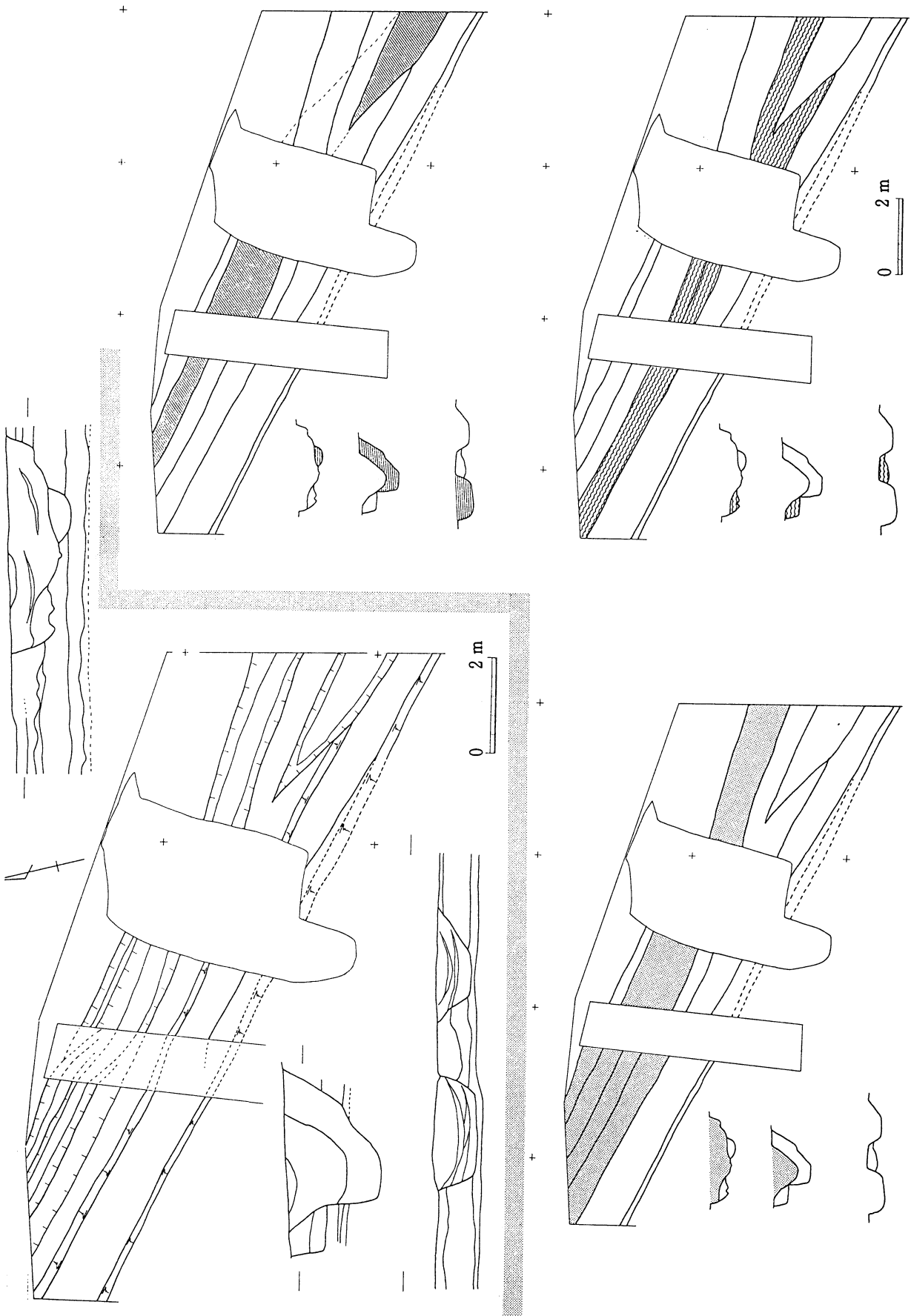
1は玉縁口縁の白磁の碗である。2は、古墳時代の甕形土器の底部で、中空の脚台部分である。3は古墳時代の甕形土器の胴部から口縁部である。胴部の膨らみは弱く、口縁部はくの字状に外反し内面にはわずかに稜線が認められる。口縁部は内外面共にナデ整形で外面の胴部・頸部はヘラケズリ、内面はハケ目調整が施される。4は龍泉窯系青磁の碗I-2類。5は白磁碗の底部で碗V類と思われる。



第20図 溝状遺構1・2・3内出土遺物実測図



第21図 中世の遺構配置図



第22図 溝状遺構4・5・6及U哇畔実測図

第3節 中世の遺構・遺物

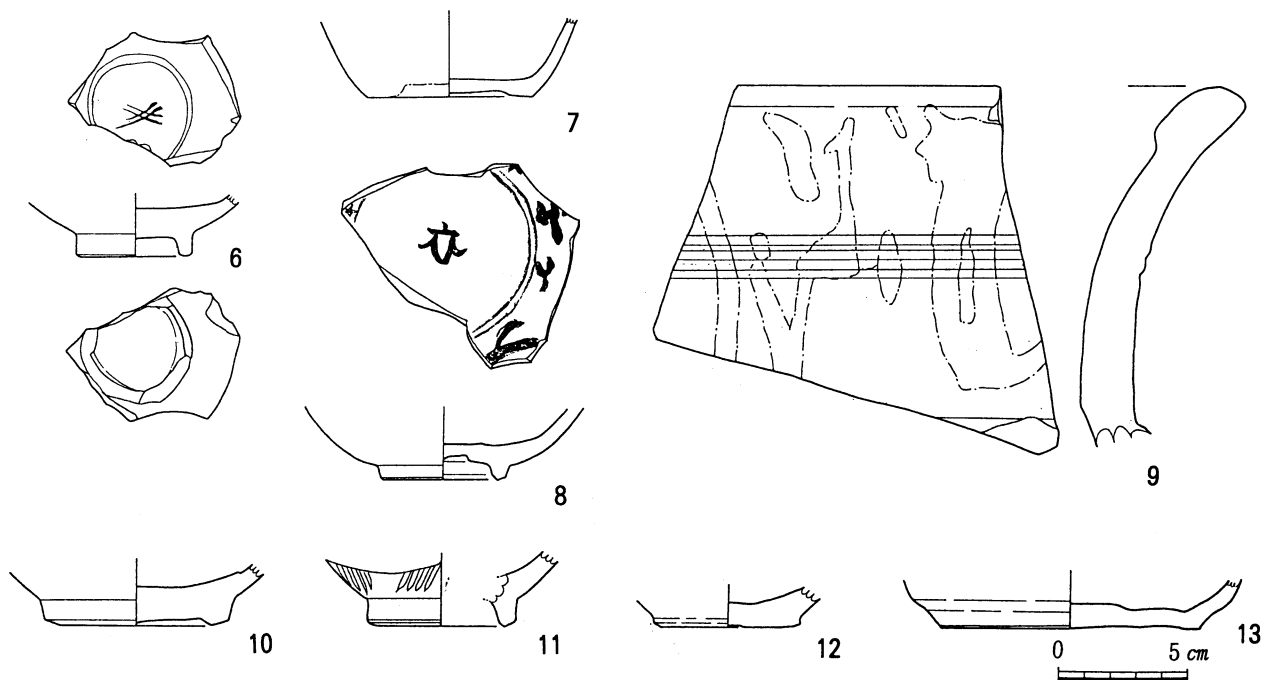
第1次調査のⅡ期の遺構として、水田遺構とそれに伴う溝・畦畔があるが、第2次調査でも水田遺構及び溝・畦畔が検出された。A～J-1～7区に掛けてT字に交わる畦畔2本とその外側にある4回の掘り直しが確認された溝である。畦畔も溝の掘り直しに伴って作り替えられたであろうと思われるが、実際には遺構として確認できていない。また、G列では水田面の段落ちが検出されているが、ここにも畦畔があったが、検出できなかった可能性もある。段落ちに交わる畦畔はG・H-2区で検出した。溝の掘り直しについては第22図に示すとおりである。

溝の方向は、第1次調査で検出された溝と同一方向に伸びており、その延長であると考えられる。畦畔のコーナー部分が検出されなかったので、水田1枚の広さは不明である。

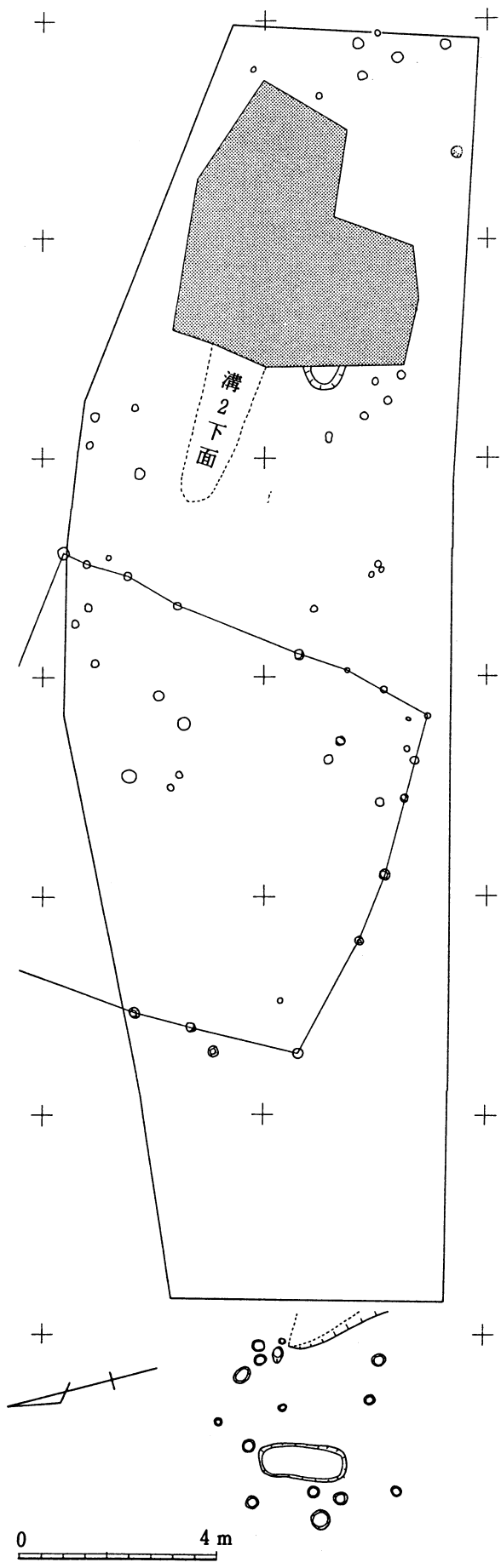
さて、国土座標を用いて作成してある国分市都市計画図を見れば、国分高校の校舎は真南北を短軸に取っていることが分かる。グリッド・ラインは校舎の西壁を基準線として設定したので、これもほぼ真南北であり、水田面の段落ちとそれに直行する畦畔は真南北とそれに直行するものであることが分かる。このことから、条理遺構の可能性も否定できないものと考えられる。ただし、A～C-2～5区の溝・畦畔はこれとだいぶ方向がずれている。

溝状遺構内出土遺物

6は肥前系の染付端反碗の底部で、19世紀前～中葉頃。7は肥前系の染付皿で、見込は蛇ノ目釉剥きされアルミナを塗布するもので、19世紀後葉頃と思われる。8は薩摩焼の龍門司製品で、袋物の底部。褐色の胎土であるが、体外面には城化粧土を塗り、その上からわずかに黄味を帯びた透明釉を掛けている。9は詳細不明の褐釉陶器甕で、内面の一部に格子状のタタキ痕が残る。10は白磁碗の底部。11は同安窯系青磁の碗Ⅲ-2類と思われる。



第23図 溝状遺構内出土土器実測図



第24図 古代の遺構配置図

第4節 古代の遺構・遺物

古代の遺構としては、ピットが数多く検出されたが建物として並ぶものは少なかった。

埋葬施設と思われる土坑1基とその土坑と重なるようにして検出された1間×1間の掘立柱建物跡1棟がみられるのみである。

土坑1号及び出土遺物

黄褐色砂質土層に掘り込まれたもので主軸を北北東にもつ〇〇cm×〇〇cmの隅丸長方形の土坑である。検出面から底面までの深さは比較的浅いが、本来の掘り込み面は残存していないと思われるもので実際はもっと深かったものである。土坑内にはほぼ完形の土師器が土坑内の北側において出土している。14は土師器の坏である。

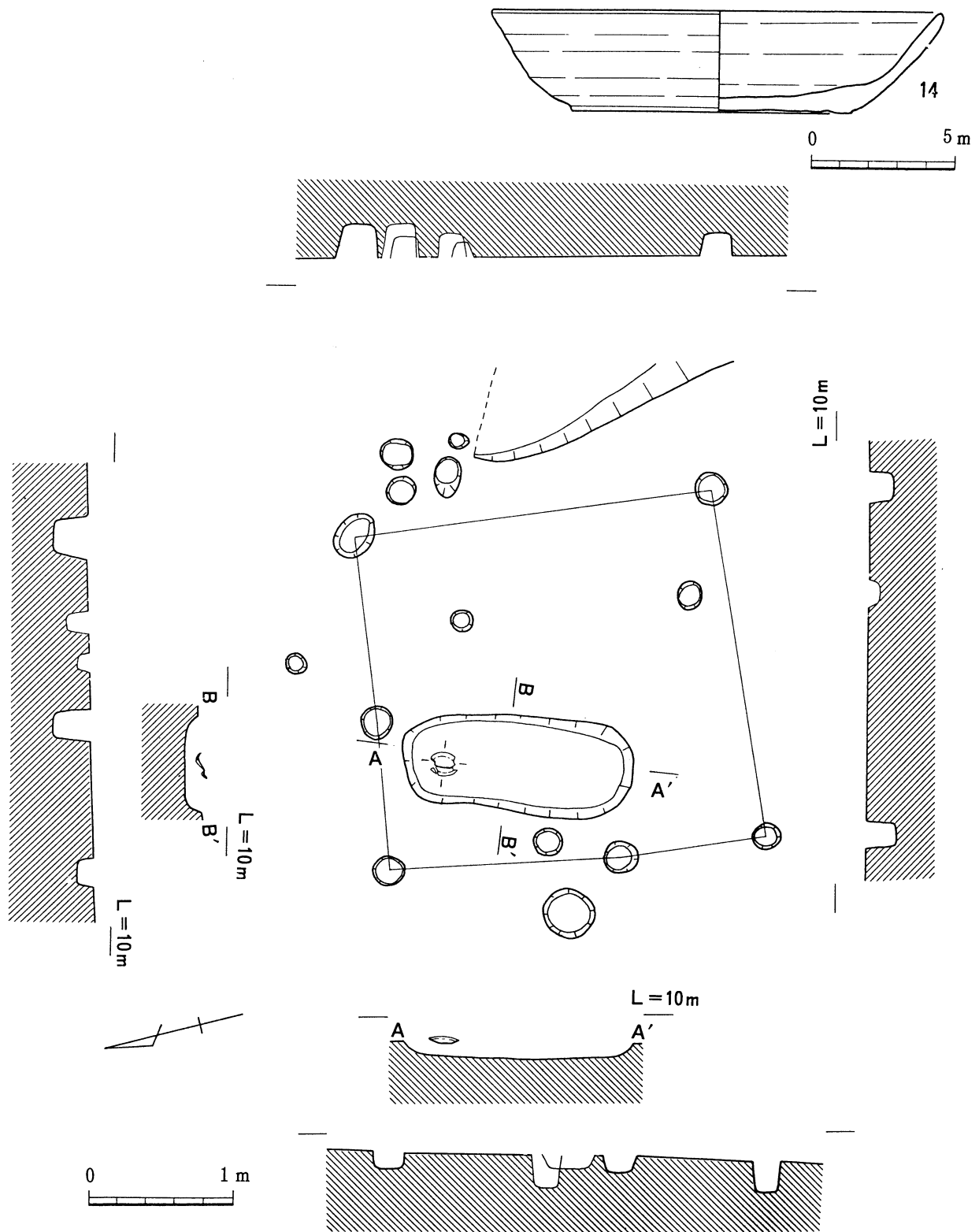
土坑1号は、埋葬に関する可能性が高く、土師器も供献されたものと思われる。

掘立柱建物跡

土坑1号と重なる位置に1間×1間の略方形の掘立柱建物跡が検出された。

柱間は〇〇mである。北側および西側においては間尺に合わないピットが見られるが基本的には4本の柱と考えてよいだろう。

土坑1号と掘立柱建物跡は重なる位置関係にあるが、双方が関係あるかいなかについては不明である。



第25図 土坑1（出土土器）及び掘立柱建物跡実測図

第5節 古墳時代・弥生時代の遺構・遺物

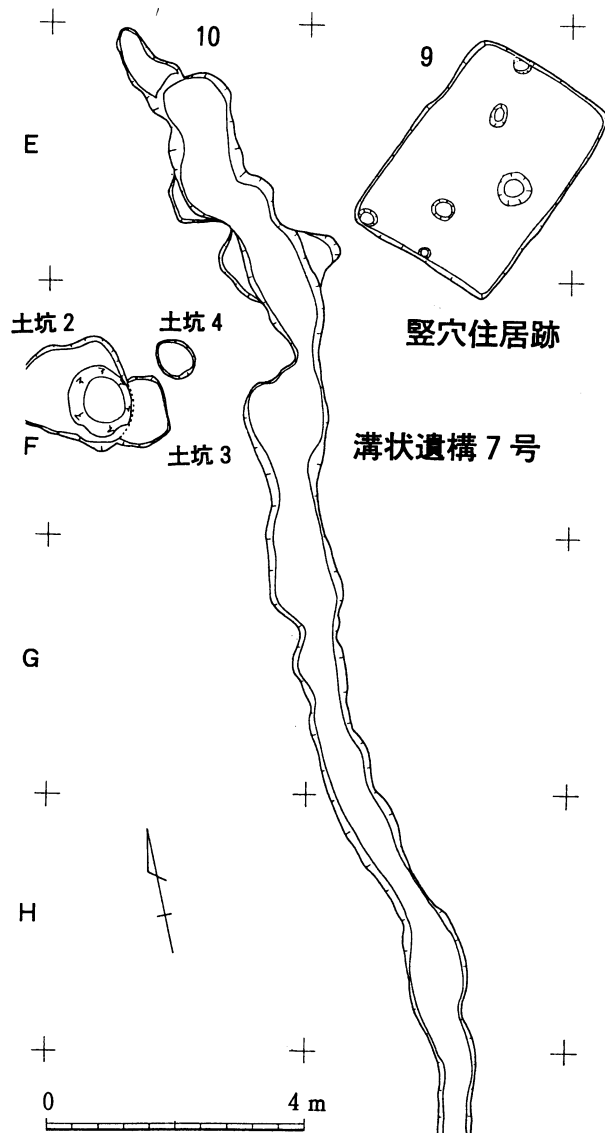
古墳時代の遺構は土坑が4基、溝状遺構1条が検出され、弥生時代の遺構は竪穴住居跡1基が検出されている。

2・3・4号土坑および土坑内出土土器

土坑は2・3号は切り合い、4号は近接した状況の3基が検出された。これらは、黄褐色砂質土層に掘り込まれている。

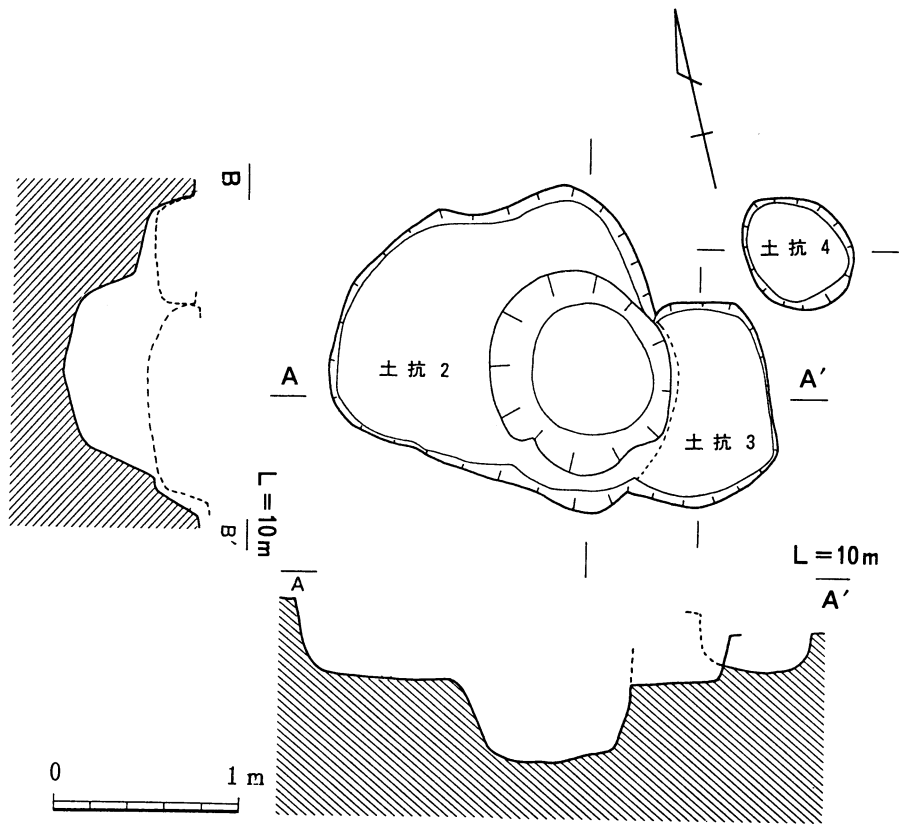
2号が3号を切った状況で検出され3号が古く2号が新しいことが判明した。ただ4号については前後関係は明らかにならない。

2号は長軸 180cm、短軸 160cmの不整形な土坑で2段掘りになっている。最深部は28cmを測る。3号は長軸 104cm、短軸80cm（復元）、深さ28cmを測る。4号はやや小さなもので径約72cm・深さ28cmを測るものである。出土遺物は古墳時代・弥生時代の土器である。

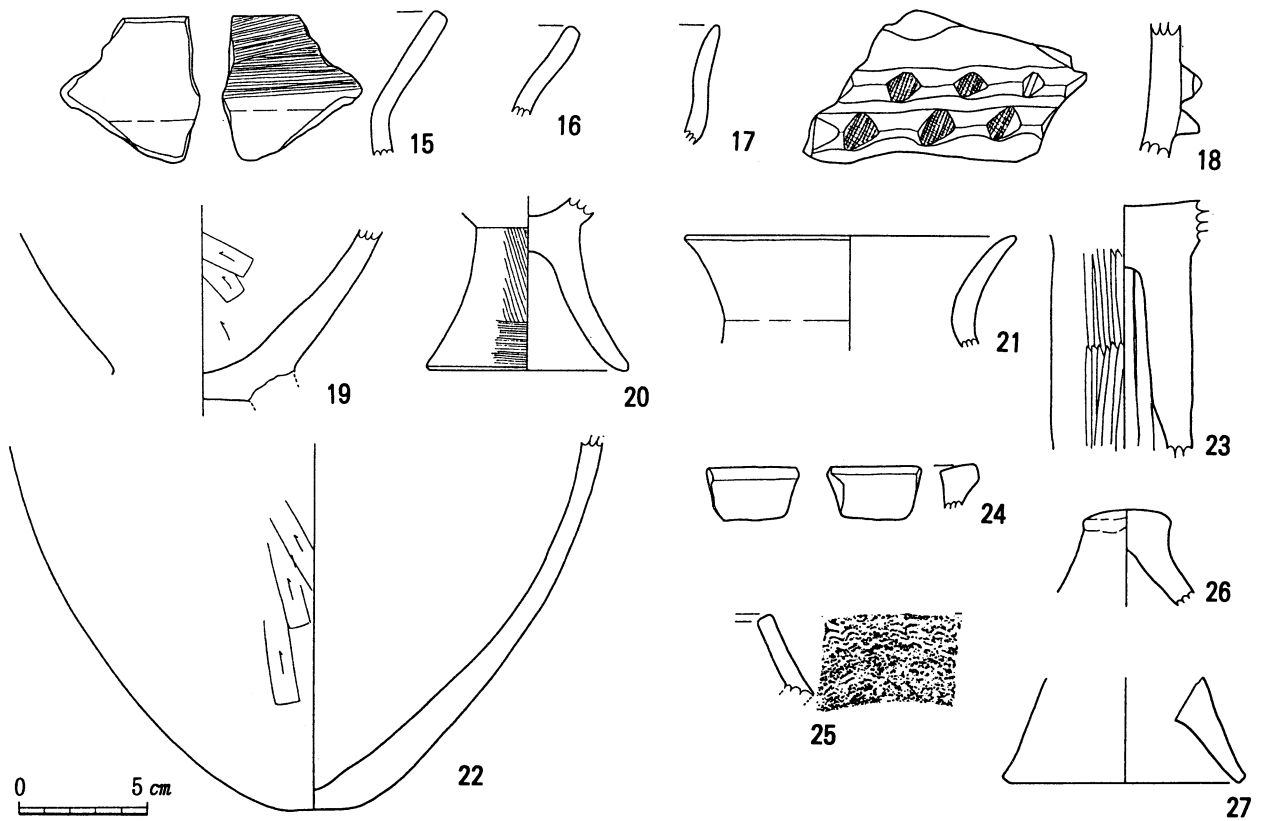


15～17は甕形土器の口縁部である。18は壺形土器の胴部で、2条の刻目突帯をめぐらす。刻目には繊維の痕跡が認められる。19は脚台部分が欠損した甕形土器の底部である。20は甕形土器の底部で脚台がやや高いものである。21は壺形土器の口縁部で器である。底部は平底で胴部はあまり膨らまないものである。23は筒型を呈した高坏の脚柱部である。外面は丁寧なヘラミガキが施される。24は甕形土器の口縁部である。25は袋状口縁を呈する壺形土器の口縁部である。口縁外面には櫛描波状文が施される。26は蓋である。27は甕形土器の底部である。これらは古墳時代のものと考えられるが、24・25は弥生時代と考えられるものである。

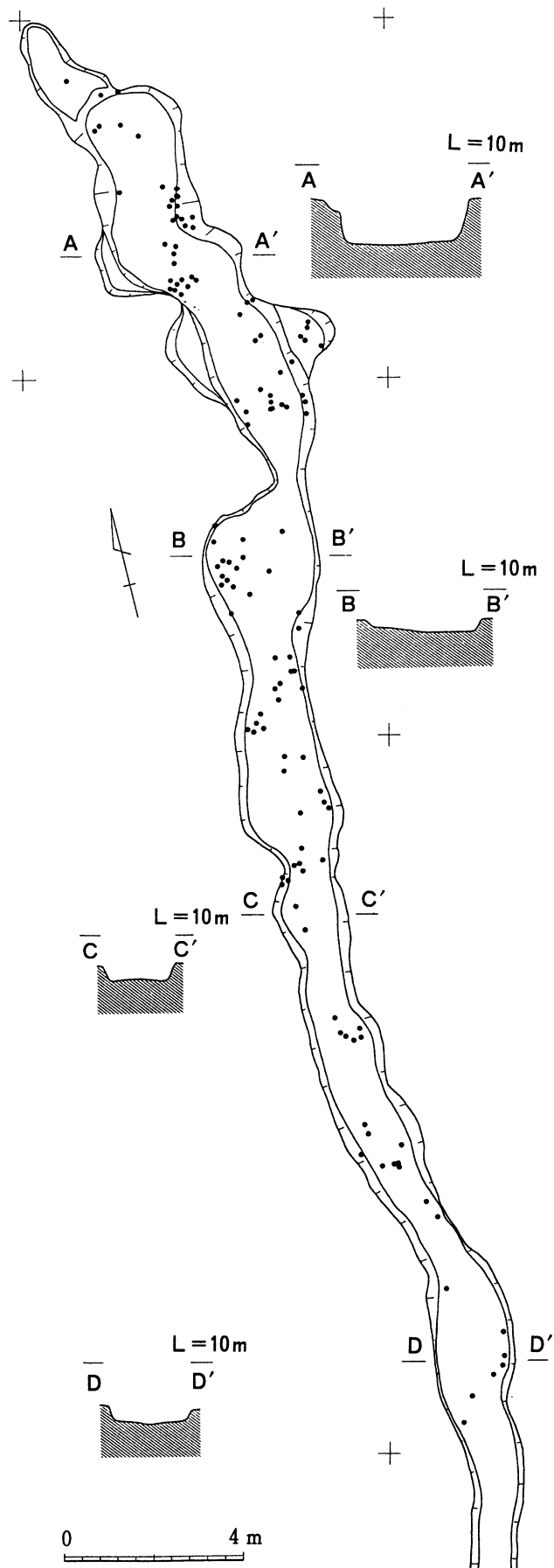
第26図 古墳時代・弥生時代の遺構



第27图 土坑 2·3·4 实测图



第28图 土坑 2·3 内出土土器实测图



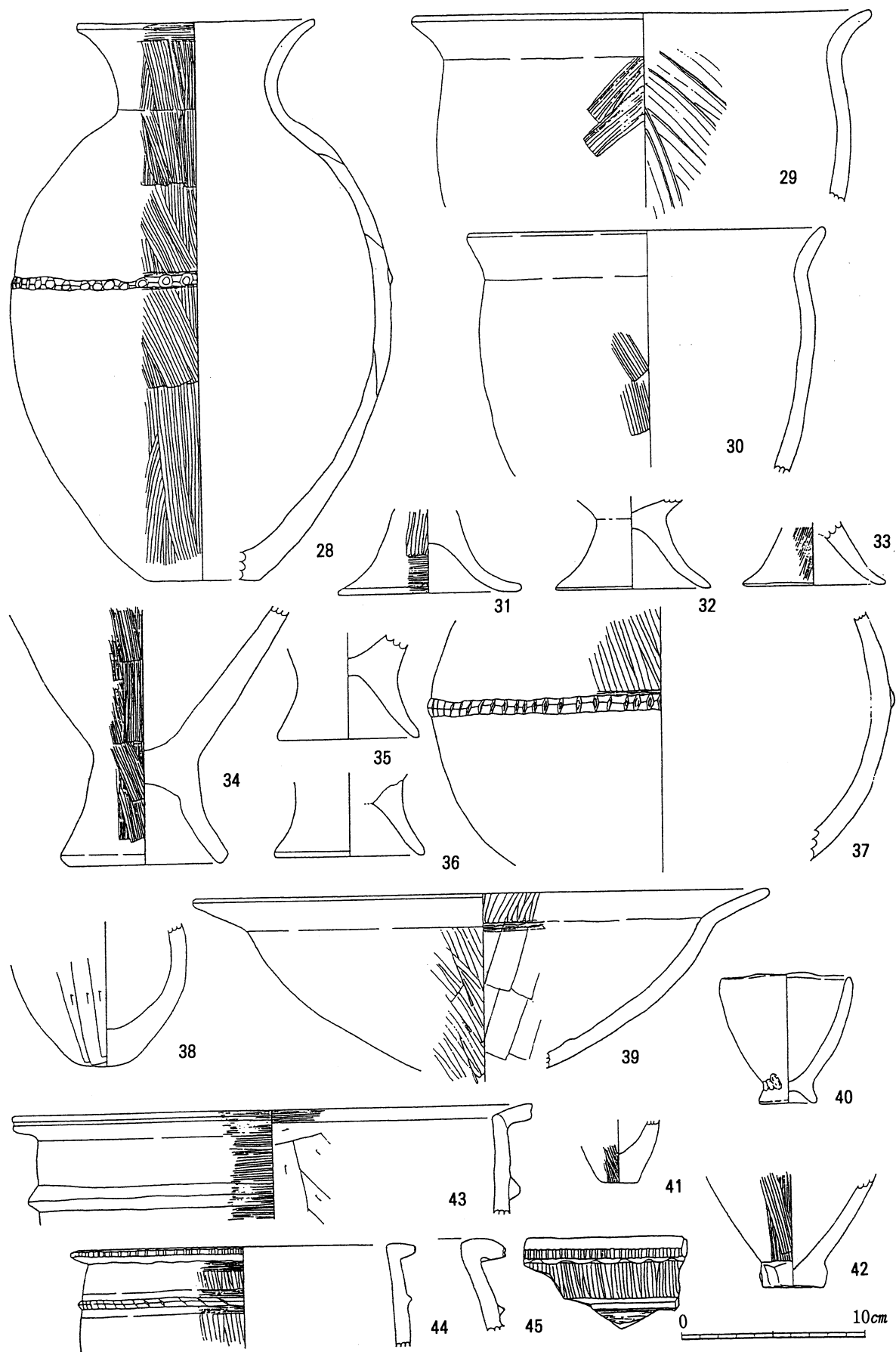
第29図 溝状遺構7実測図

溝条遺構7

E-10区からI-9区にかけて南北方向に長く検出された溝状遺構である。検出された長さは18mで、最大幅130cm、最小幅50cmを測る。北側のE-10区で終結している。溝の底面は平坦で断面U字形を呈する。全体的には北側が高く、南側が低い。

出土遺物は、古墳時代の成川式土器がほとんどで、完形に近い土器1個体や小型の鉢形土器等が出土している。

28は口縁部径12.8cm、器高29.5cmを測る壺形土器である。平底の底部からゆるやかに立ち上り、胴部はあまり膨らまない。しまった頸部から口縁部は反り気味に外反する。胴部最大径の位置に刻目突帯をめぐらす。外面はハケ目調整である。29~36は甕形土器である。29は口縁部の外反が強いものである。30はあまり張らない胴部から口縁部はくの字状に外反する。33~36は中空の脚台である。34は外面がハケ目調整が施されるものである。37・38は壺形土器である。37は球形に膨らんだ胴部で最大径の位置に刻目突帯をめぐらす。39は高坏の坏部である。皿状の体部から口縁部が大きく外反するもので外面はハケ目・内面はヘラケズリが施される。40・42は鉢形土器である。40は口縁径7.2cm、器高7cmを測るもので、低い脚台からやや内湾気味に立ち上るものである。28~42は古墳時代のものと思われる。43~45は甕形土器の口縁部である。いずれも口縁部が逆L字状に外反し、胴部上位に一条の三角突帯をめぐらすものである。弥生時代中期のものと思われる。

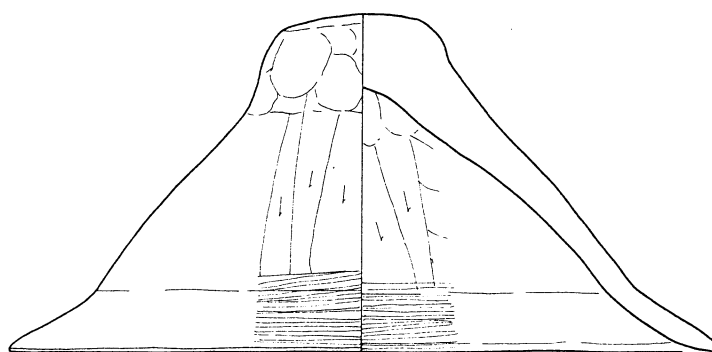


第30图 沟状遺構7出土遺物実測図

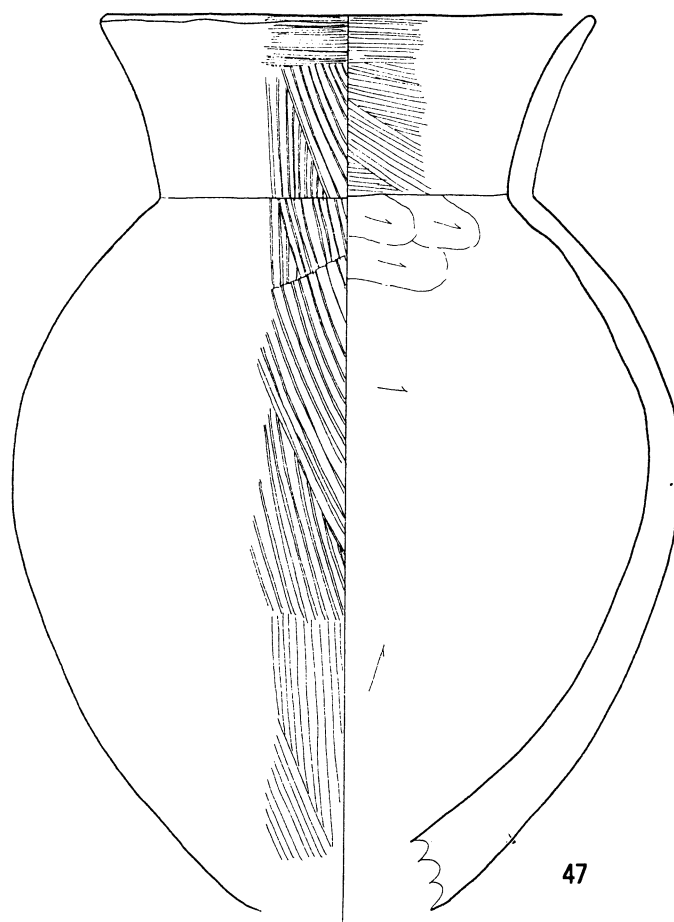
土坑 5 内出土遺物

46は口縁部が大きく外反する蓋型土器で、口縁径19.2cm・器高9.2cmを測る。内外面共にヘラケズリが施される。47は口縁径13.5cmを測る壺形土器である。胴部はわずかに膨らみ、しまった頸部から口縁部は反り気味に外反する。外面はハケ目、内面はヘラケズリが施される。

土坑 5 号については、調査中の度重なる水没や土砂崩れ等により遺構の実測を断念せざるを得ない状況であったため詳細は不明である。



46



47

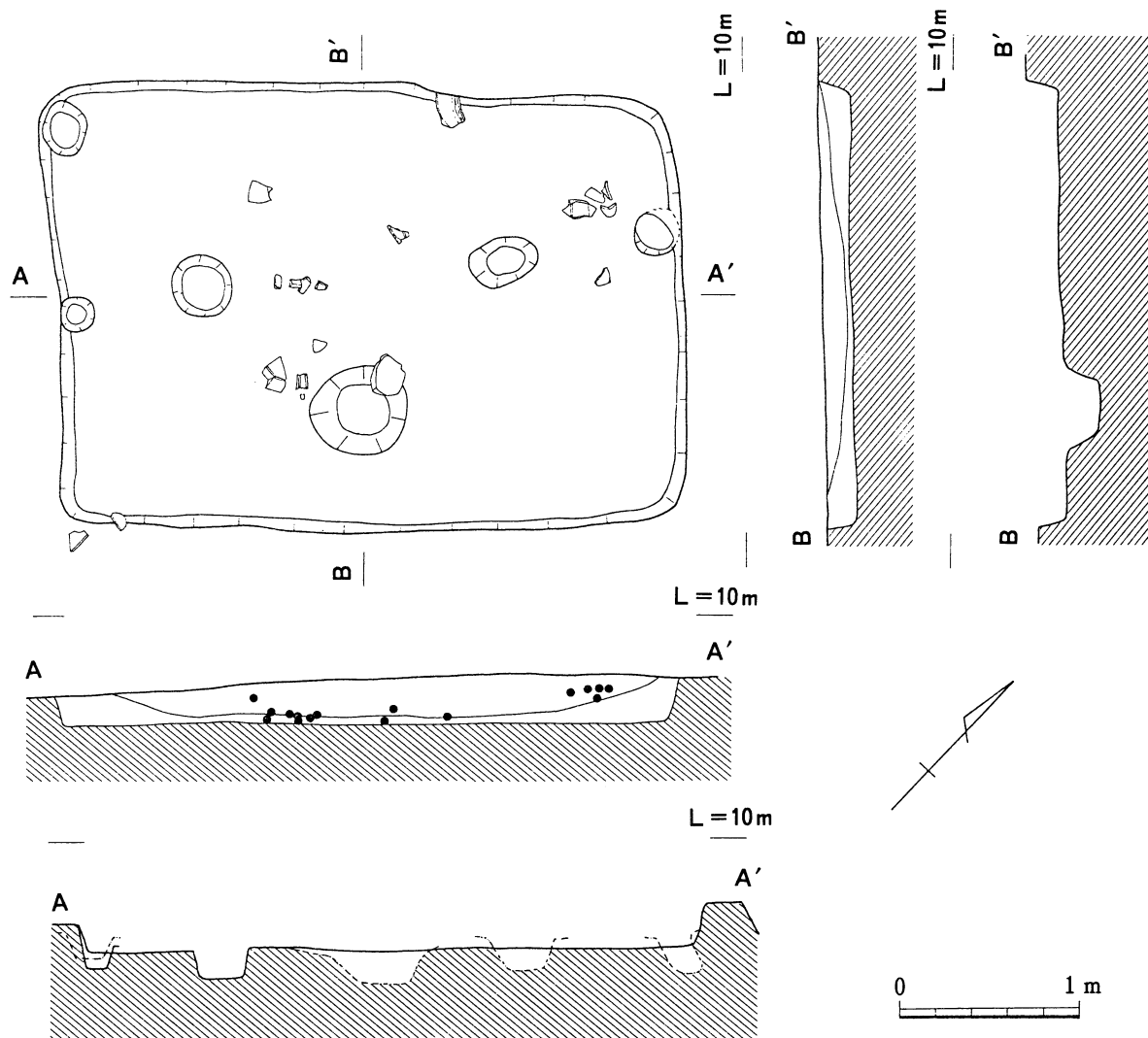


第31図 土坑 5 内出土遺物実測図

弥生時代の竪穴住居跡

竪穴住居跡はE-9区で検出された。長軸を北東に持つ長方形プランを呈するもので、検出面での規模は平面が352cm×258cmで深さ30cmを測る。遺構の検出面は黄褐色砂質土で、埋土は黒褐色土褐色の腐植土である。床面では柱穴と思われるピットが複数検出されているが、検出面が砂地であることに加え、調査時の天候不良等の影響で明確な性格をとらえることはできなかった。ただ比較的大きな中央の2個の柱穴が主な柱と思われ、2本柱の建物が想定される。また、中央南東部にやや大きくて浅い堀込みがあるが、焼土や炭化物等は認められない。

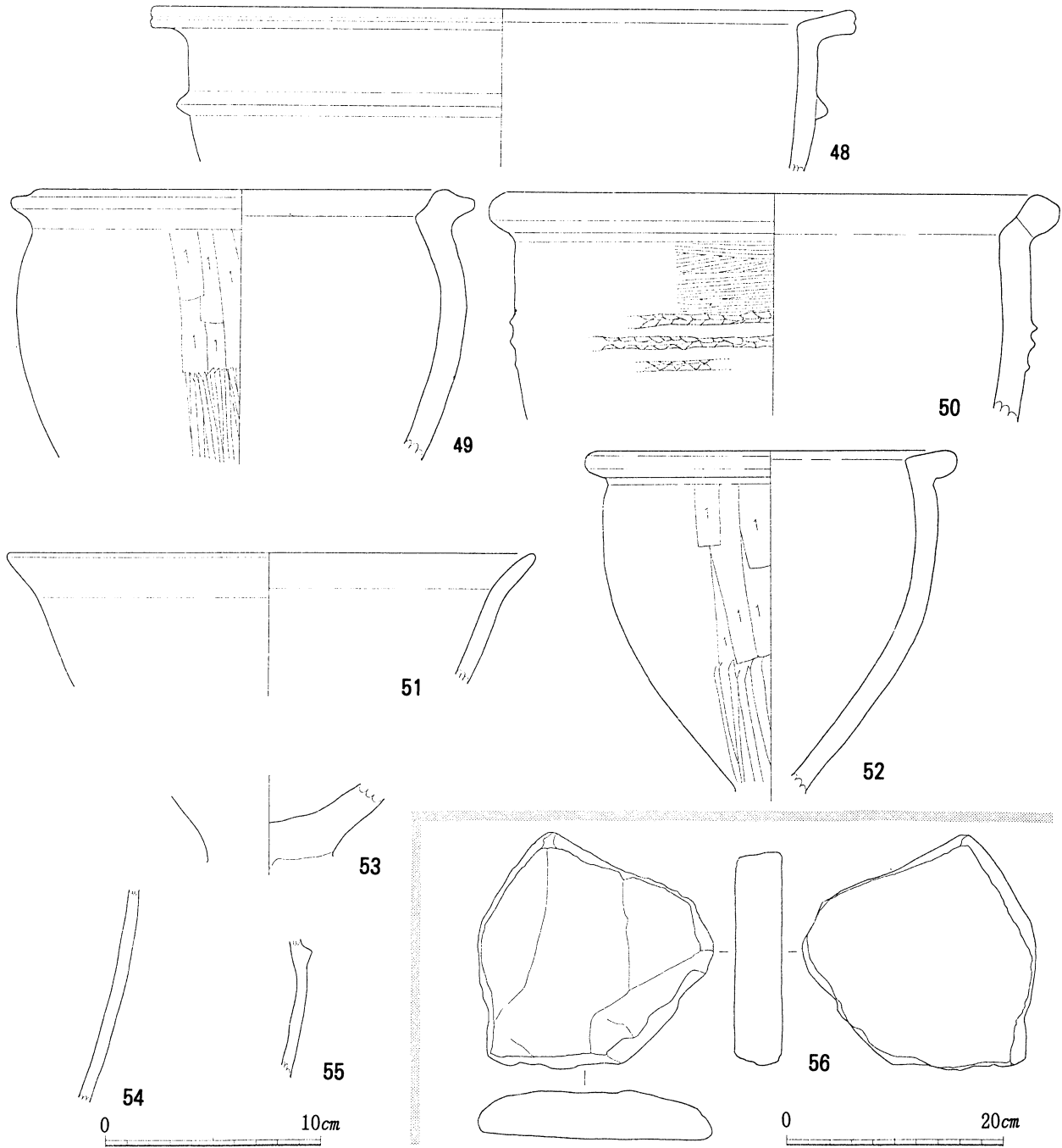
埋土内の比較的床面に近い位置で、大きな土器片が出土している。これらの土器は弥生中期の特徴を持つものである。2本柱である点および南側に堀込みを有すること等、南九州の弥生中期の竪穴住居の特徴を持つことからこの住居跡は弥生時代中期のものと考えてよいだろう。



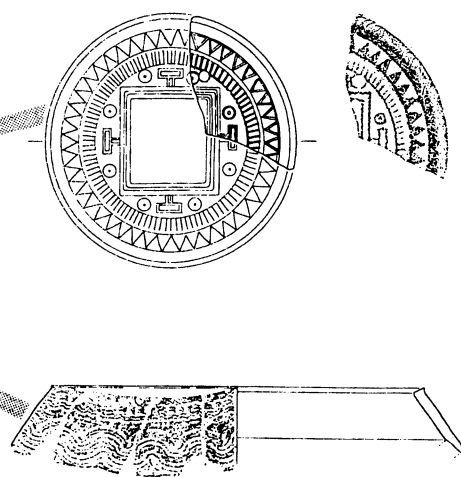
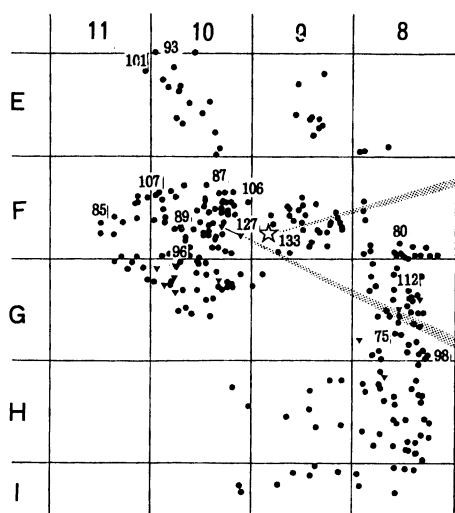
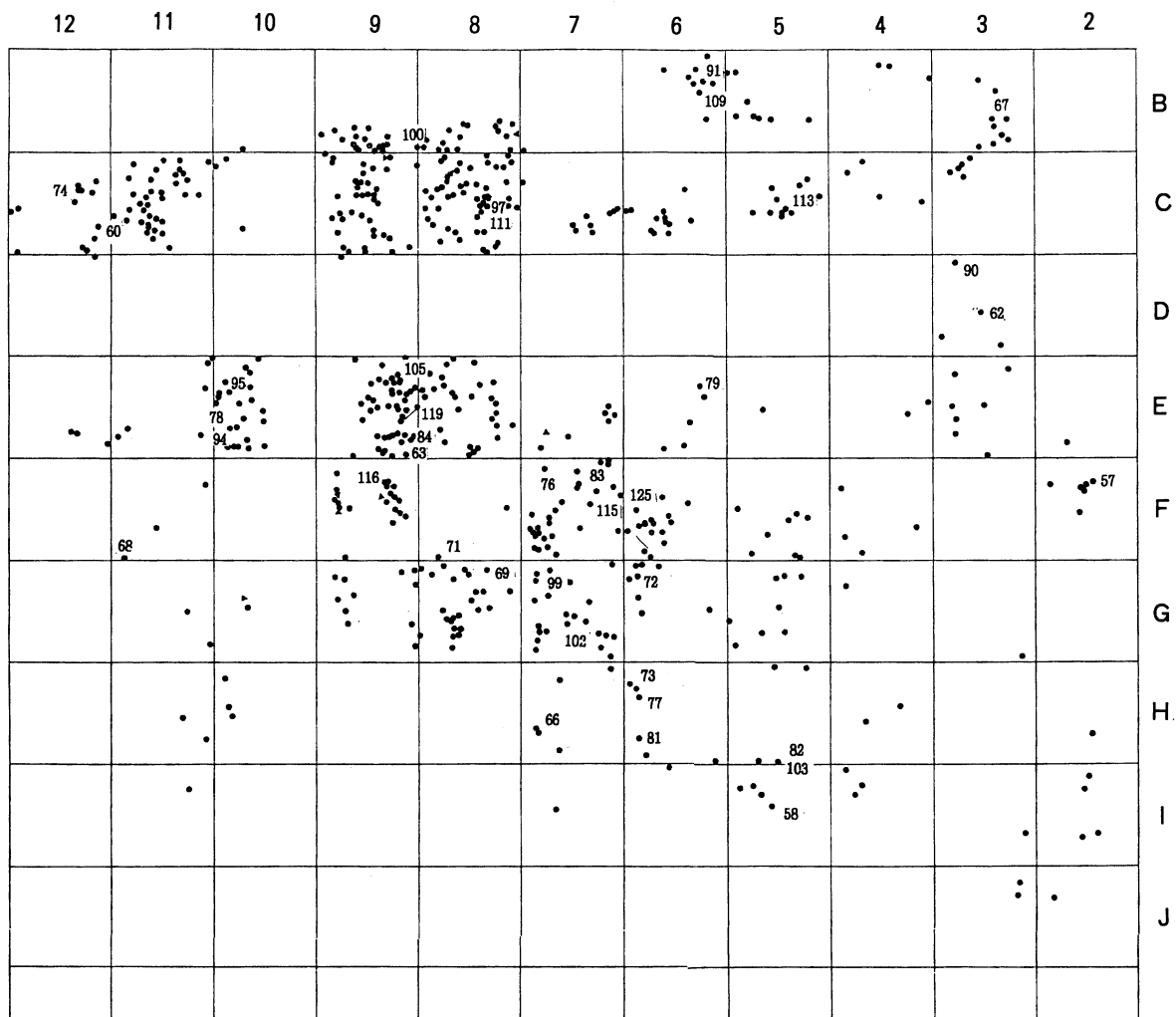
第32図 竪穴住居跡実測図

竪穴住居跡出土遺物

48～55は甕形土器である。48は口縁部が逆L字状に外反し端部はM字状を呈する。胴部には1条の三角突帯をめぐらす。49は外反する口縁部の上端に突起を有するものである。胴部はやや膨らみ外面は上位はヘラケズリ、下位はハケ目が施される。50は口縁部が分厚いものでくの字に近い状態で外反する。胴部に3条の絡縄突帯をめぐらす。52はやや分厚い口縁部が逆L字状に外反するものである。外面はヘラケズリおよびヘラミガキが施される。56は平坦面を有する平たい石であるが、用途については不明である。台石の可能性が考えられるものである。

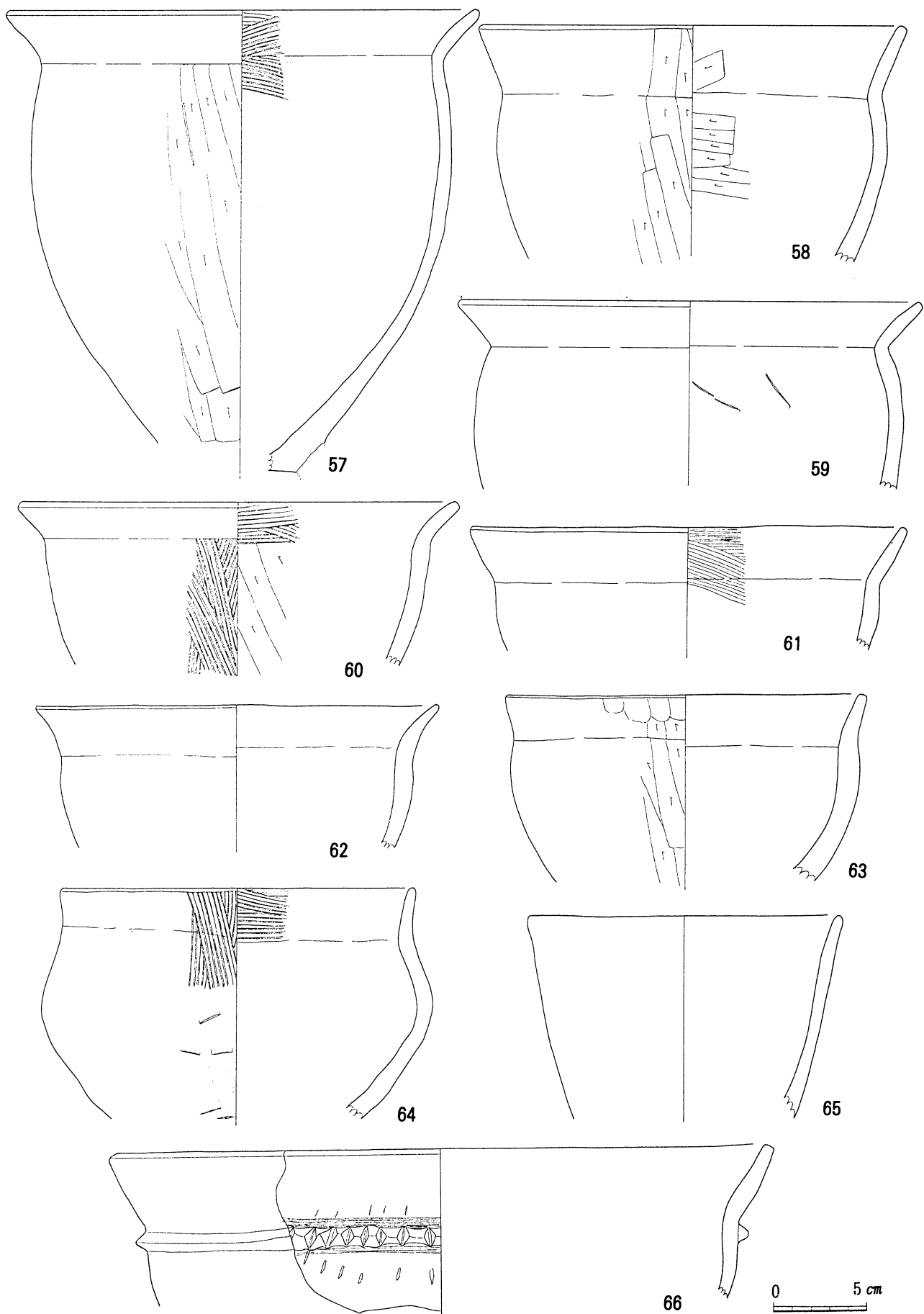


第33図 竪穴住居跡出土遺物

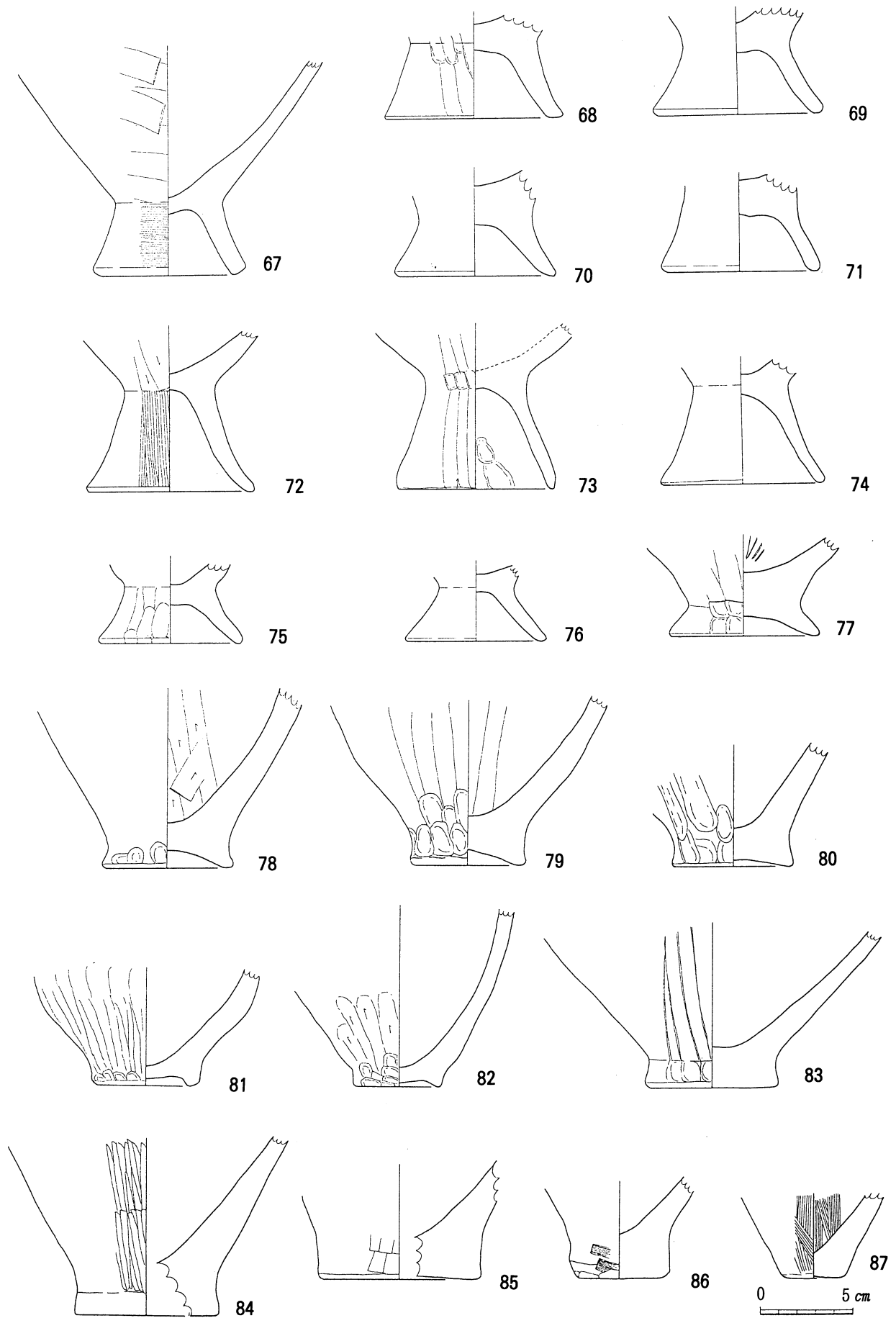


- 土器
- ▲ 安國寺式土器
- ☆ 破鏡

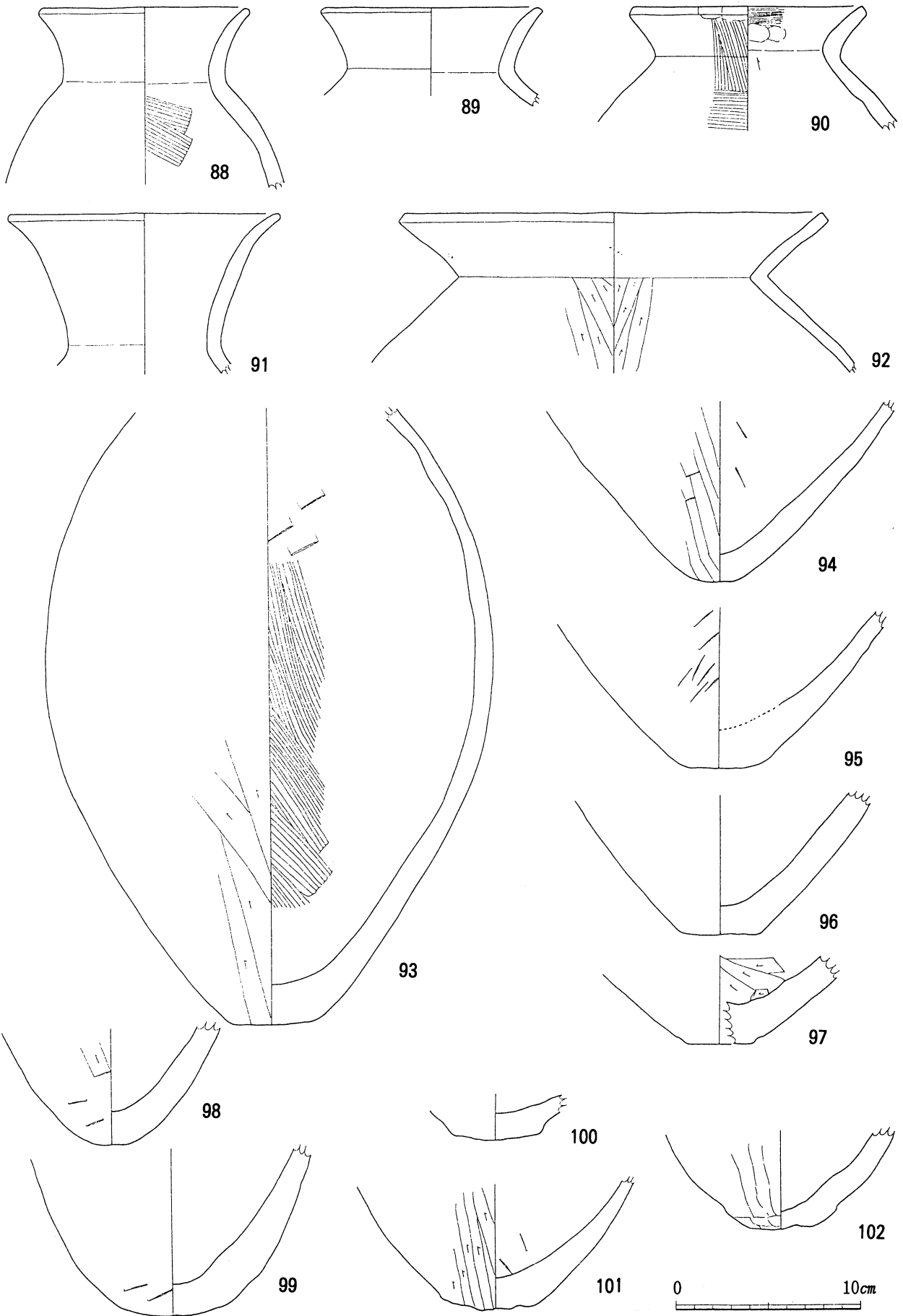
第34図 古墳時代・弥生時代の遺物出土状況



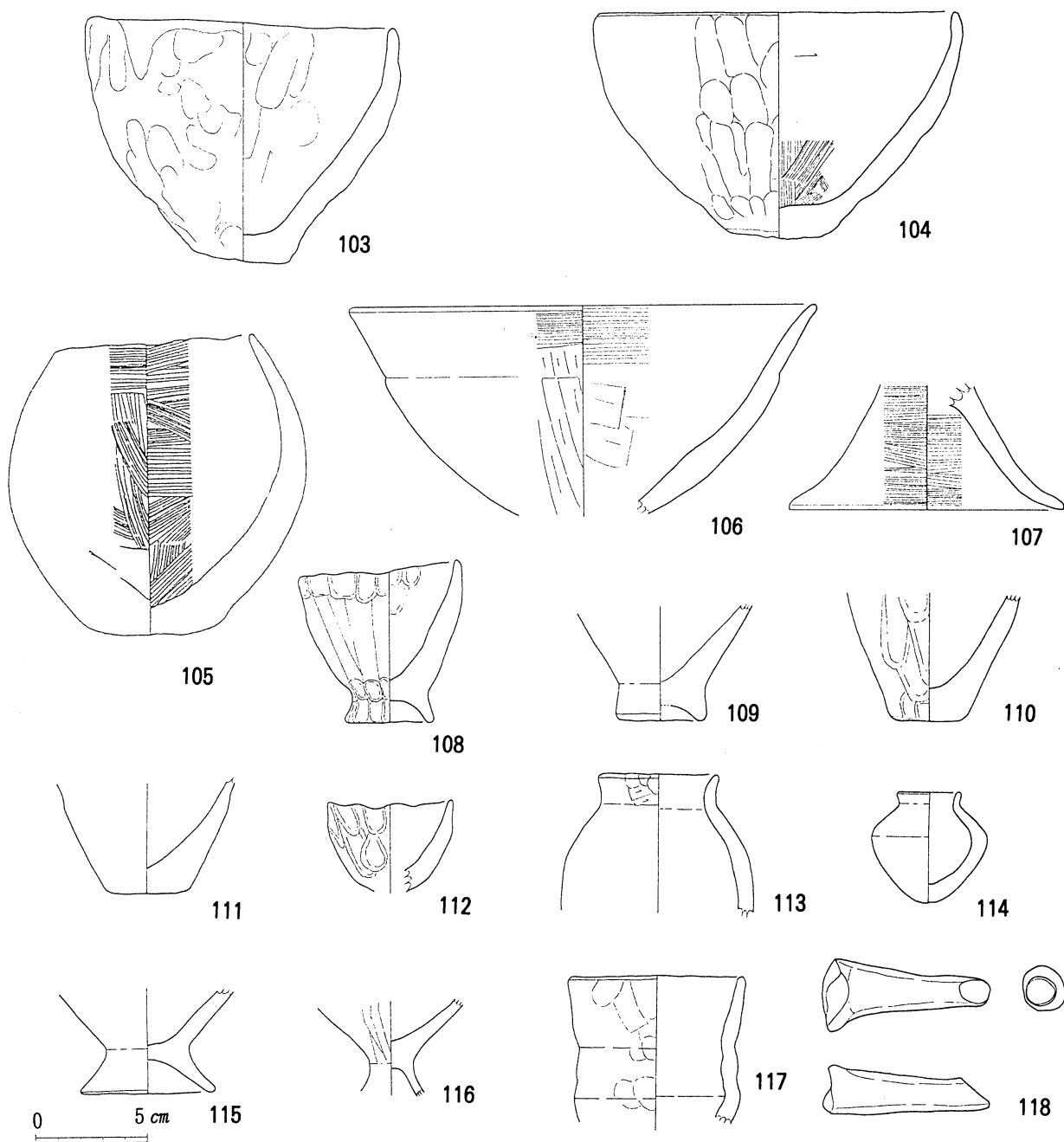
第35図 弥生・古墳時代遺物実測図(1)



第36図 弥生・古墳時代遺物実測図(2)



第37図 弥生・古墳時代遺物実測図 (3)



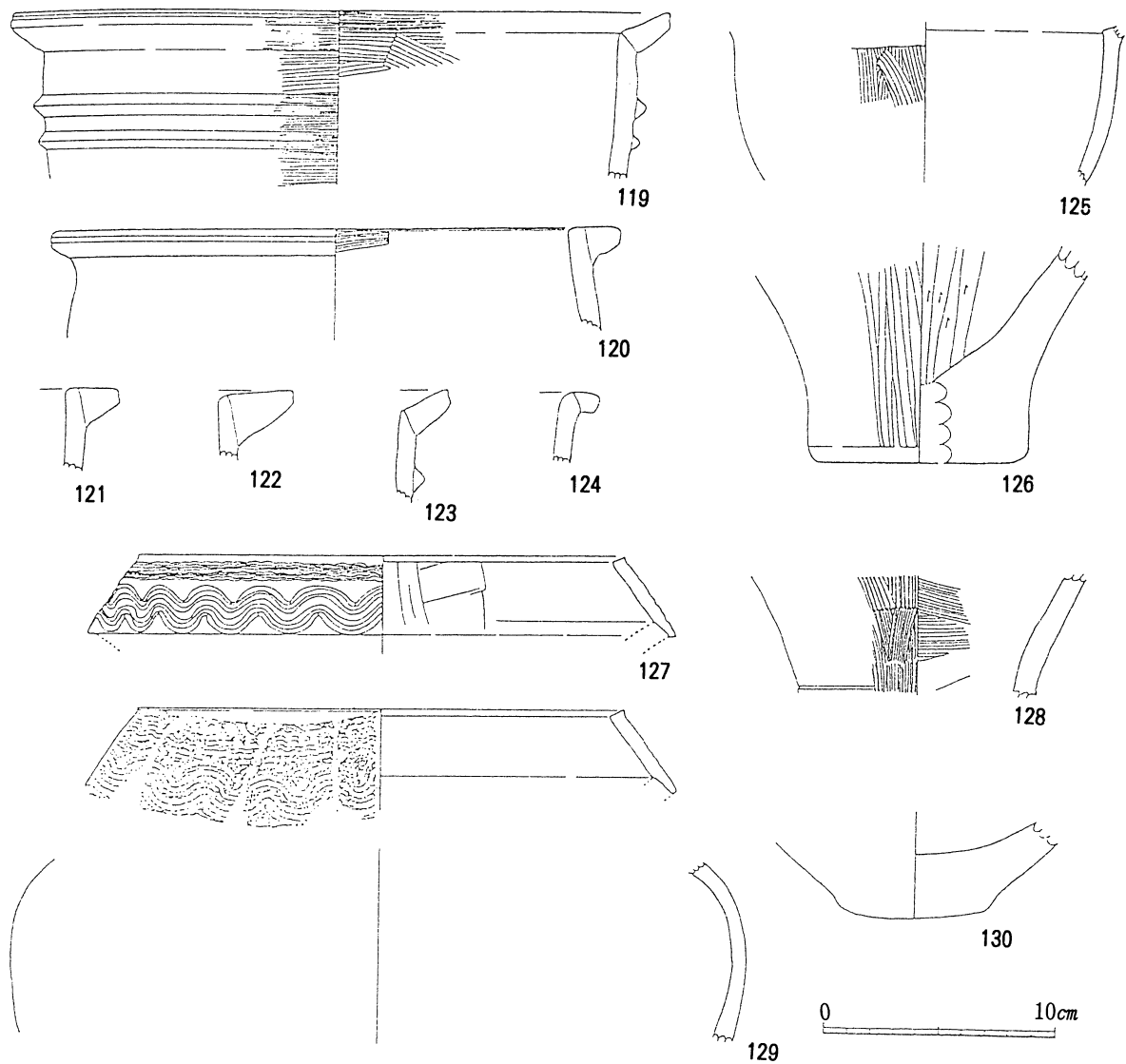
第38図 弥生・古墳時代遺物実測図(4)

古墳時代の遺物

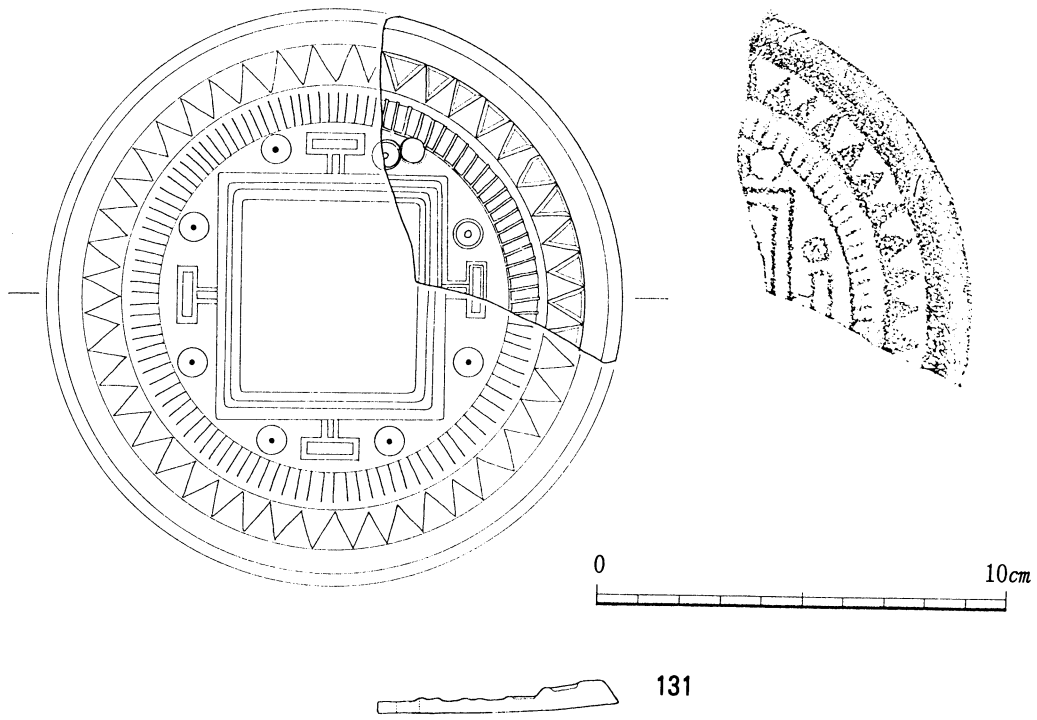
57~64・66~76は中空の脚台を有する甕形土器である。57~61は口縁部がくの字状に外反し内面には稜線が認められるものである。62~64は口縁部の外反がややなだらかなものである。64は胴部が膨らむものである。器面調整はハケ目調整とヘラケズリのものがある。66は口縁部が外反し頸部に刻目突帯を1条めぐらす。67~76は底部であるが、脚部が高いもの・低いものといろいろなタイプがみられる。77~82は底部がわずかに上底になる甕形土器である。65・83~87は鉢形土器と思われるものである。65は胴部から口縁部へ直線的に立ち上るものである。88~102は壺形土器。88~91は口縁部が反り気味に外反するもので、92は鋭角的に外反し内面の稜線が明瞭なものである。93は胴部が長胴であり膨らまないものである。94~102は底部である。103・104は鉢形土器。外面は指頭による調整痕が明瞭である。105は無頸壺。膨らんだ胴部から口縁部は内湾しておさまるも

ので、内外面共にハケ目調整である。106・107は高坏。106はやや深い坏部である。体部と口縁部の間にわずかな段を有している。内外面とも口縁部はナデ、体部はヘラケズリである。107は裾が広がる脚部である。108～117は小型の鉢形土器・壺・甕形土器である。112は手捏様である。114は丁寧な調整を施されたものである。117は湯呑み状の形態である。118は杓型土製品の一部である。
 弥生時代の遺物

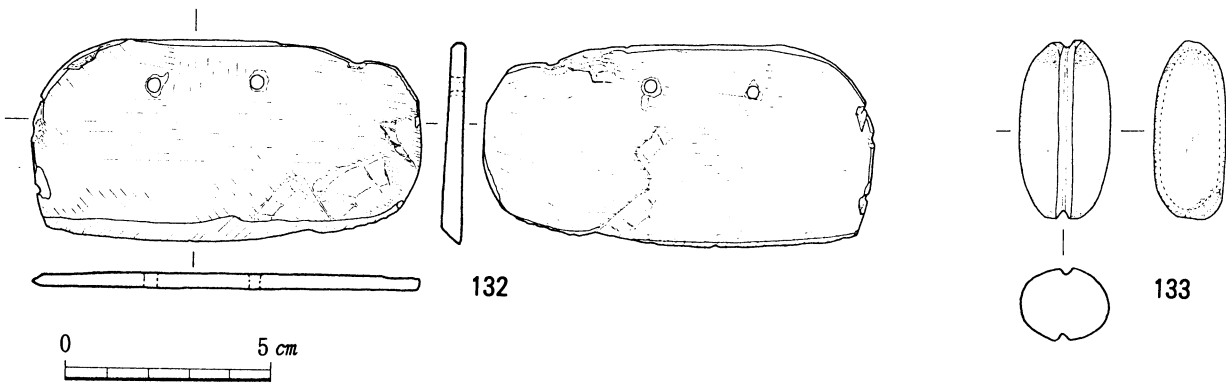
119～126は甕形土器。119は口縁部がくの字状に外反し、胴部上位に2条の三角突帯をめぐらす。120は口縁部が逆L字条に外反するものである。125は胴部。126は平底の底部である。127～130は壺形土器。127は口縁部がいったん外反した後内傾するいわゆる袋状口縁を呈するもので、口縁部には施文具の異なる2種の櫛描波状文が施される。128は頸部。129は胴部。130は底部である。



第39図 弥生・古墳時代遺物実測図 (5)



第40図 破 鏡

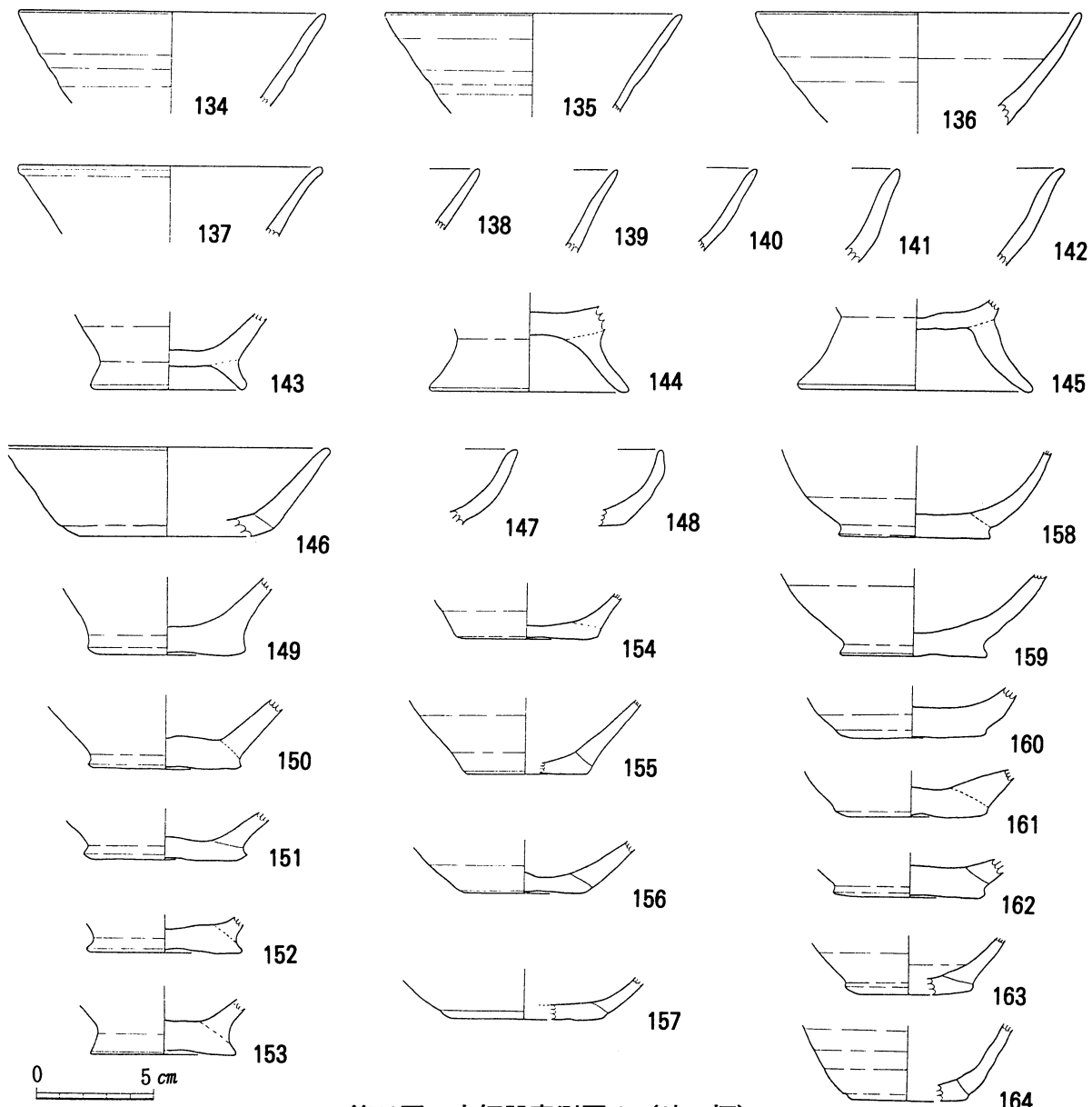


第41図 石包丁と石錘

第6節 近世～弥生時代にかけての遺物

土師器

坏には体部から口縁部にかけてのもので体部が直線的に開くもの（134・135・137・138・139）とやや内湾気味に立ち上るもの（136・140・141・142）がある。このうち口縁端部で外反するものは（137・139・141・142）がみられる。143・158～160は椀と思われるものである。143はハの字状に開く高台部分であるが、高台付椀の底部であろう。158～160は体部が内湾しながら立ち上る平底の椀であろう。144・145は大きくハの字状に開く脚台であるが、椀か皿かは不明である。146～157・161～168は坏と思われる。146は体部が直線的に立ち上るもので、147・148は内湾気味に立ち上るものであるが、いずれもあまり高くない。149～157・161～164は体部が直線的に立ち上がり、やや高さのあるものと思われる。165は直線的に開く口縁部である。168はヘラ切りの底部で、166・167は糸切り底の底部である。169・173・185は小坏である。169・173はヘラ切り底で底部と体部の境界付近をナデて丁寧に仕上げている。



第42図 土師器実測図1（碗・坏）

170～172・174～185は小皿である。177～179・184はへら切り底で、170～172・174～176・180・181・183は糸切り底である。182は切り離し技法が不明である。177の体部外面には朶痕がみられる。186はハの字状に開くやや高さのある高台を有する高台付皿である。

187・188は甕の口縁部である。口縁部で大きく緩やかに外反するものと短く外反するものがある。いずれも体部内面はへら削りを施す。189・191・192は脚台付の大皿と思われる。189は口縁部、191・192は底部で、いずれも精選された良土を使っている。191はやや硬く焼成されている。192は体部外面に規則的に刺突された痕跡が認められる。190は高台付の坏であるが、焼成が悪いものである。

黒色土器

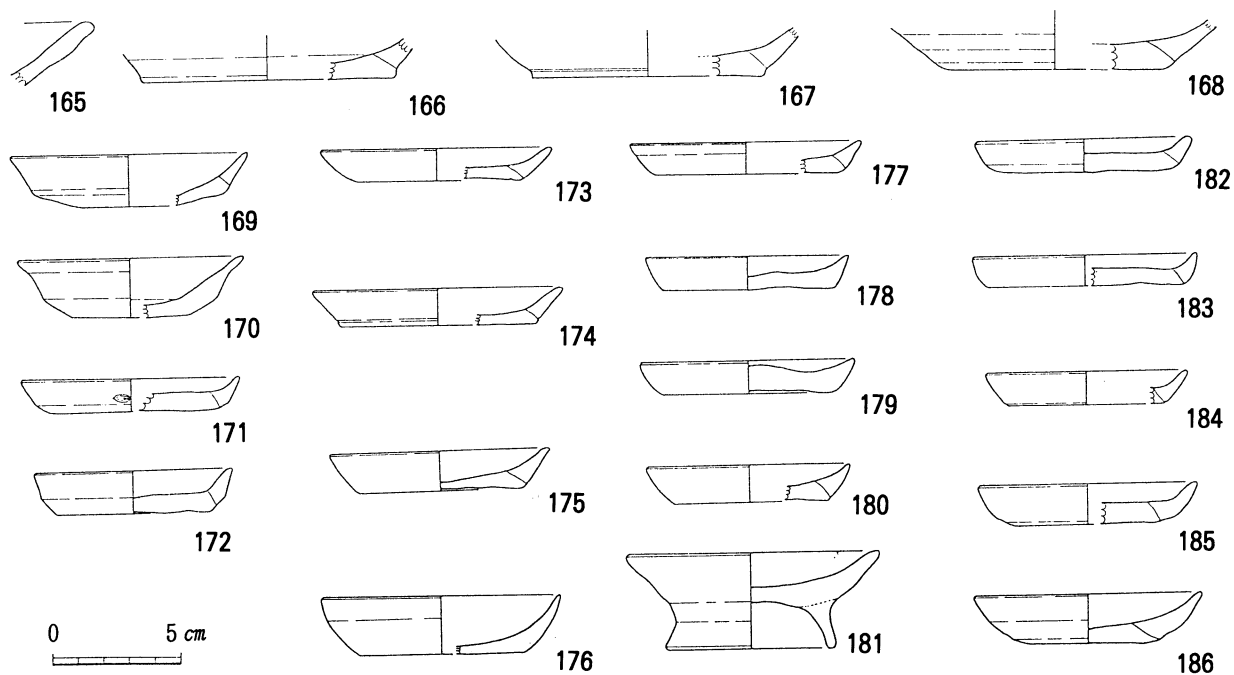
黒色土器は図化されたものが13点あるがA類とB類に分けられる。

(A類)

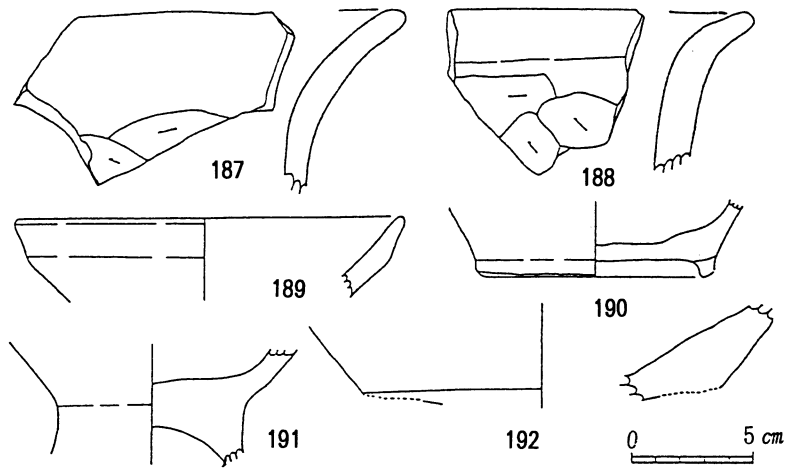
193～202は高台付椀。高台がハの字状に開くもので、その長さに差異がある。内面はへら磨きが施されるが、外面はへら磨きのものと横ナデのものがある。193は口縁径16.1cm、器高6.9cm、高台径8.8cmを図る完形品である。高台見込みに放射状の成形痕がみられる。199・200にも同じような放射状の成形痕がみられる。203は充実高台の椀で、底部はへら切りである。内面のみにへら磨きを施す。205はわずかに開く脚台を有する脚台付皿である。

(B類)

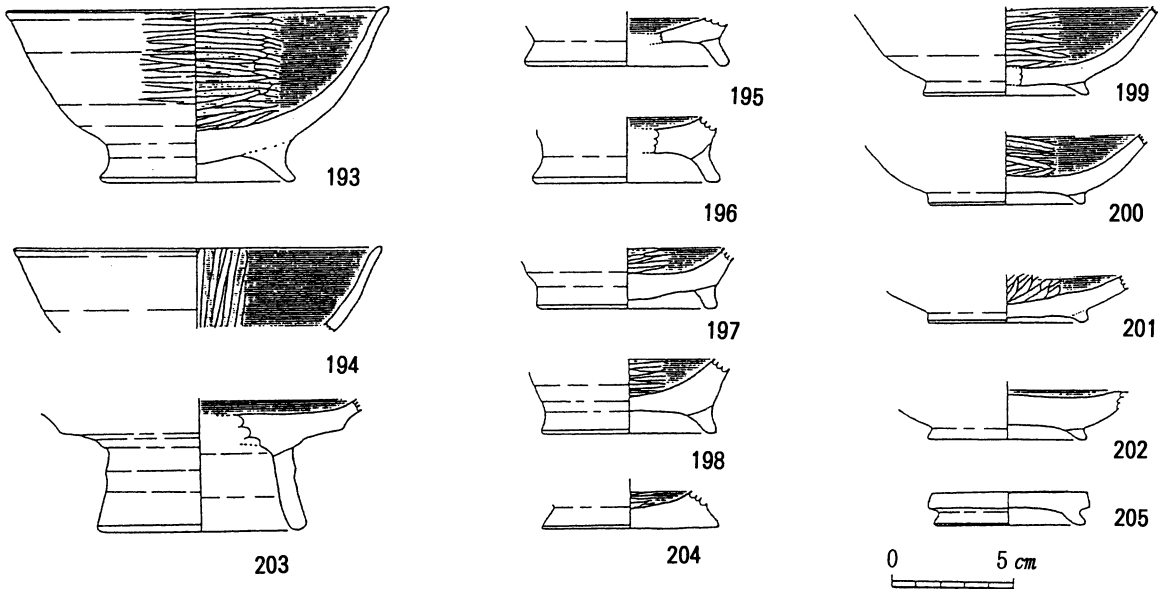
204は椀。短くハの字状に開く高台を持つもので、内面のみにへら磨きを施す。体部の割れ口を磨いて成形した痕跡が認められるもので2次的な使用があったものと想定されるものである。



第43図 土師器実測図2 (小皿)



第44図 土師器実測図 3



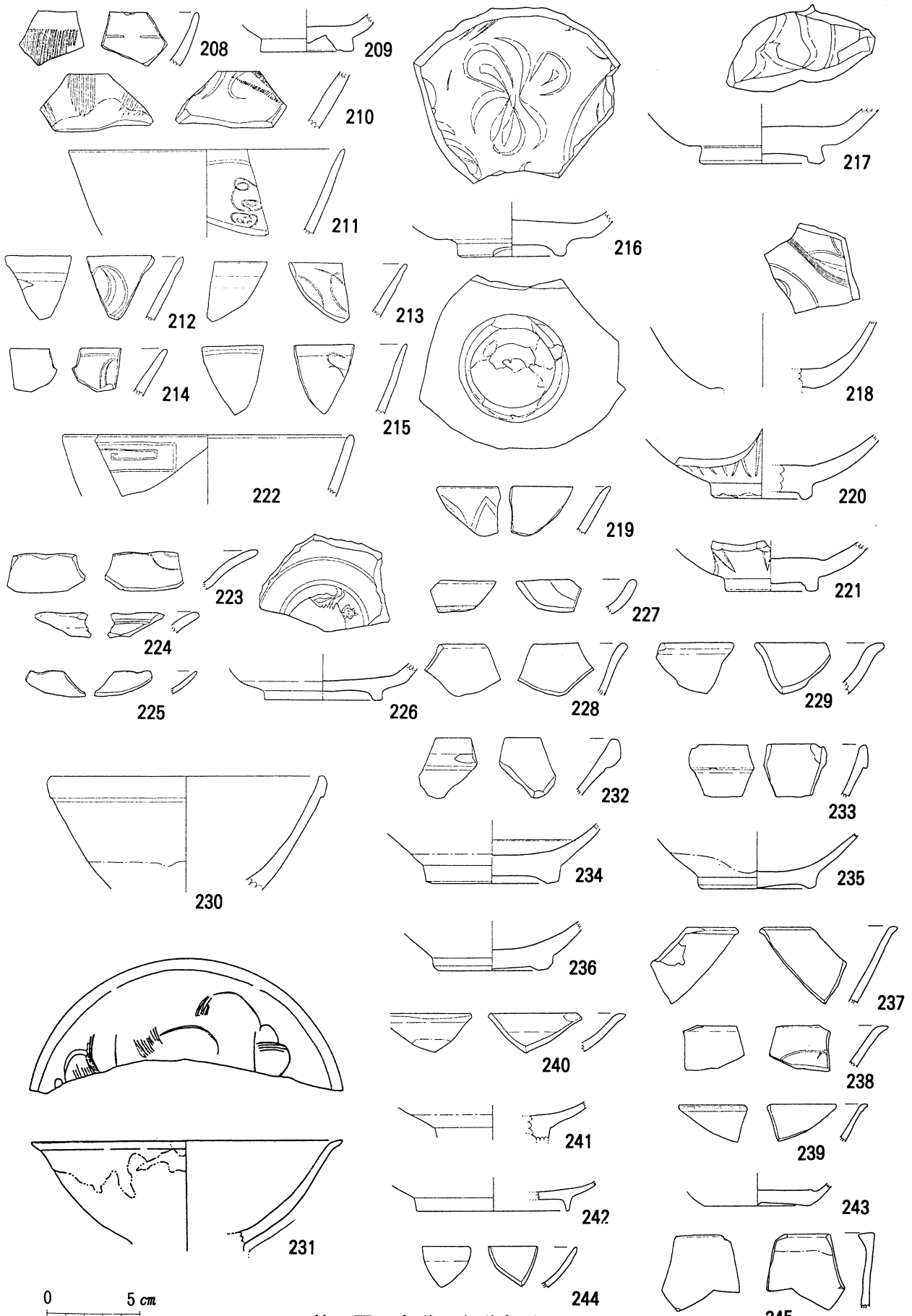
第45図 黒色土器A・B類実測図

緑釉陶器

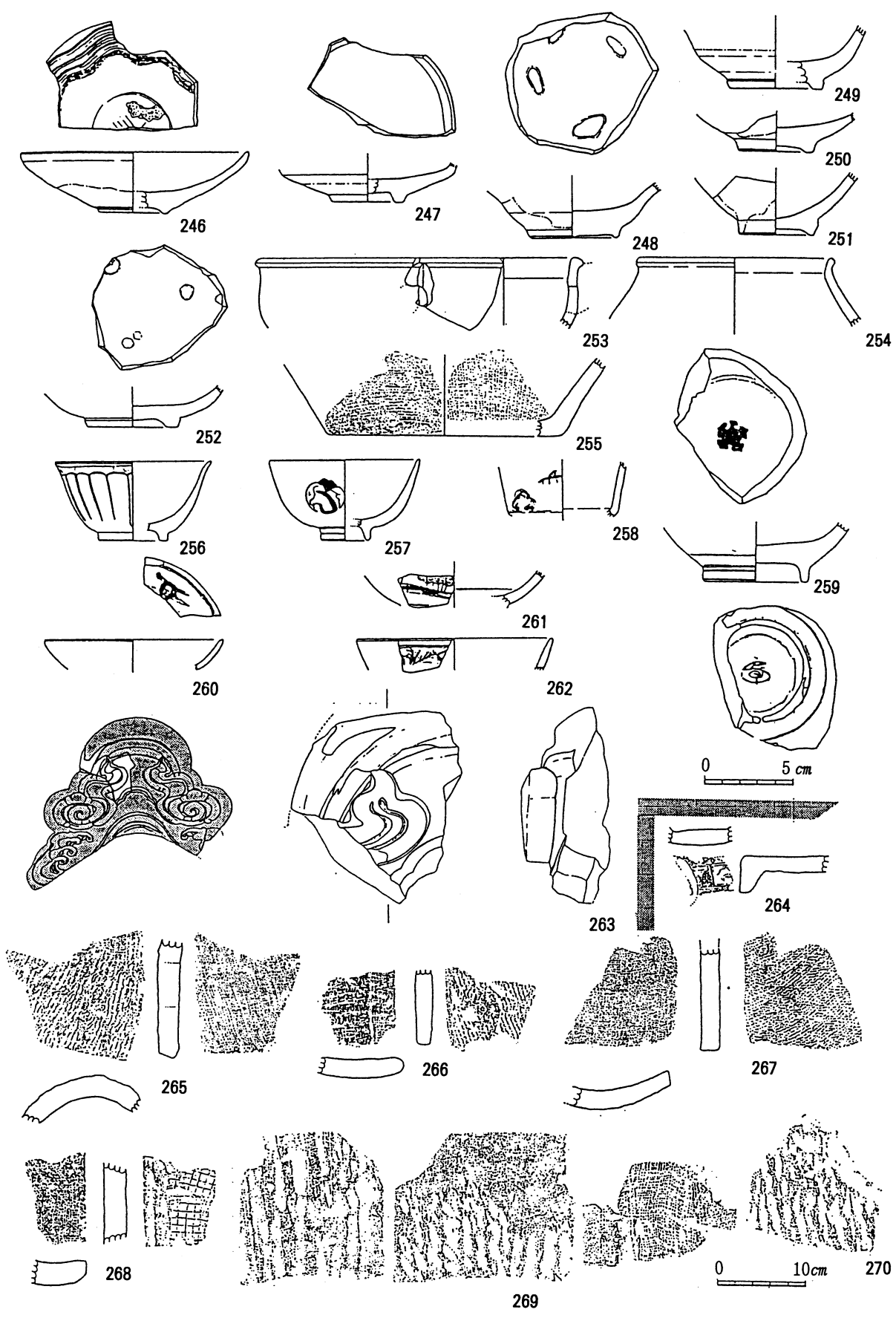
緑釉陶器は2点出土している。206・207はいずれも高台部から底部であるが、207は高台部が欠損している。見込みに沈線文を圈界状に施す。釉は濃緑色で薄く、剥離が著しい。胎土は土師質で乳濁色を呈する。高橋照彦氏の教示によると、10世紀の近江産と思われるものである。



第46図 緑釉陶器実測図



第47图 青磁・白磁実测图



第48图 陶磁器·瓦

青磁・白磁

208は同安窯系青磁碗の口縁部と思われるもので、外面には櫛目文が施される。209は同安窯系青磁碗の底部。210は同安窯系青磁の碗Ⅰ類。211～218は龍泉窯系青磁の碗Ⅰ類。内面には花文等が施される。219～221は龍泉窯系青磁の碗Ⅰ－5類で外面は鎬蓮弁文。222は龍泉窯系の青磁碗で口縁部外面には雷文帯。上田分類の龍泉窯系碗C－2類。223・224は龍泉窯系の青磁稜花皿。225は口縁部輪花の青磁皿。226は龍泉窯系の青磁皿で見込みは印花文を施し、まるく釉剥ぎされる。227は龍泉窯系青磁皿の口縁部で明筈と思われる。228は上田分類の龍泉窯系碗D類と思われる。229は龍泉窯系青磁皿。230は玉縁口縁の白磁碗。231は白磁碗Ⅶ類と思われる。232・233は玉縁口縁の白磁碗。234～236は白磁碗の底部。237～239は白磁碗Ⅴ類・Ⅷ類等の口縁部と思われる。240は白磁皿Ⅲ類と思われる。241は白磁碗の底部。242は白磁皿で、高台内はカンナ削り痕がみられる。16世紀頃と思われる。243は白磁皿Ⅸ類の底部。244は詳細不明。245は白磁の香炉と思われる。

陶磁器

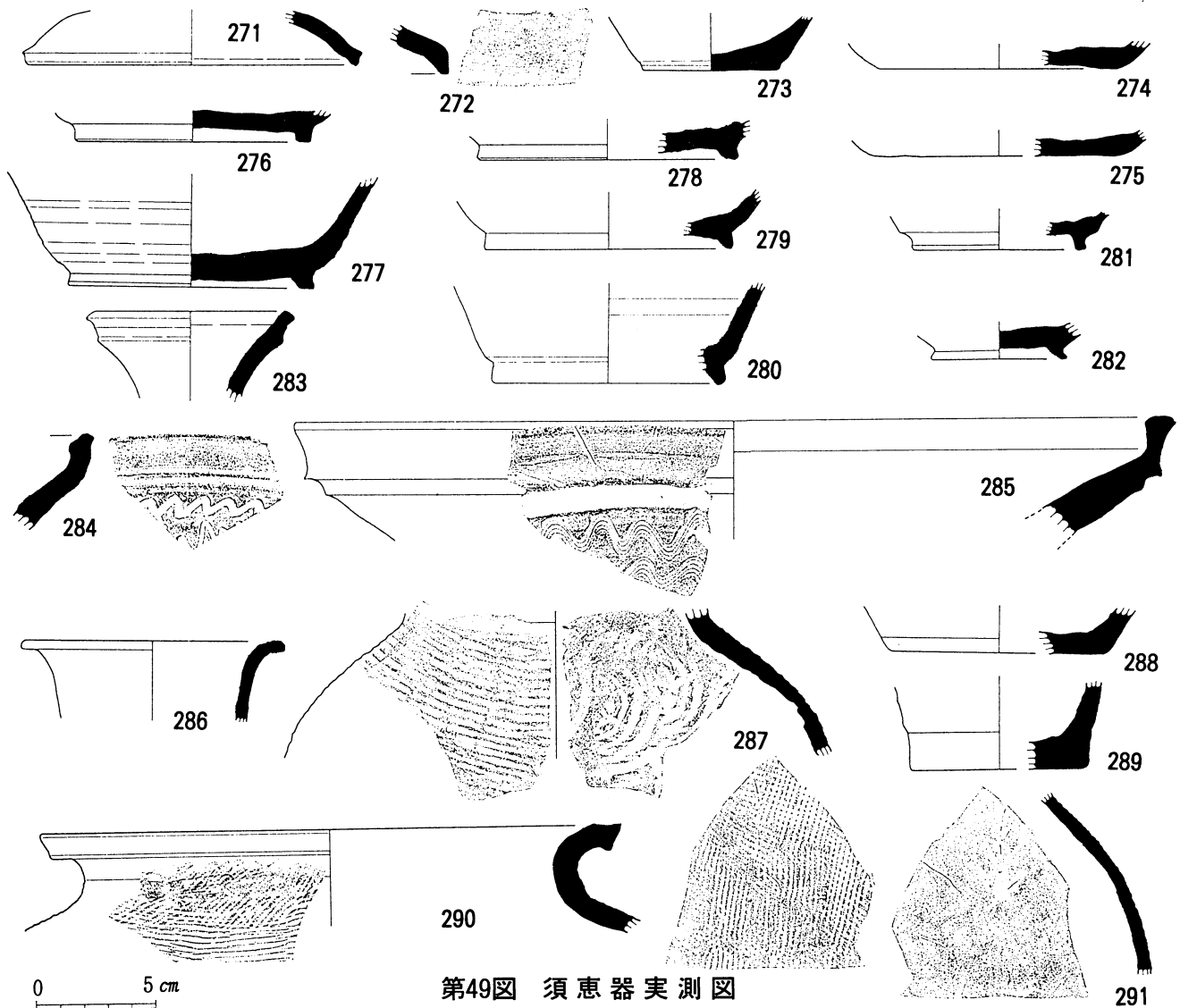
246は肥前の刷毛目陶器皿と思われるもので、高台と見込みには目跡が残る。247は見込みに鉄絵がみられる。248は鉄釉陶器碗で見込みに目跡がみられる。249も肥前の陶器碗と思われる。250は薩摩焼の陶器碗で見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされる。高台部周辺を除く体部内外面には白化粧土が塗られ、その上から透明釉が掛けられる。畳付には糸切痕が残る。251は褐釉陶器碗の底部。252の見込みには目跡が3箇所残る。253は灰釉の口付の製品と思われる。254は詳細不明。255はすり鉢で外面は横方向の調整痕が著しい。256・257は近代以降の染付小碗。256の釉は緑味を帯びる。258は肥前の丸碗で見込みにコンニャク印版による五弁花文、高台には渦福を描くもので、18世紀代のものである。260は肥前系の染付小皿で、19世紀後葉頃と思われる。261は肥前産の染付碗。262は景德鎮窯系の青花碗の口縁部で、16世紀前・中葉頃の所産と思われる。

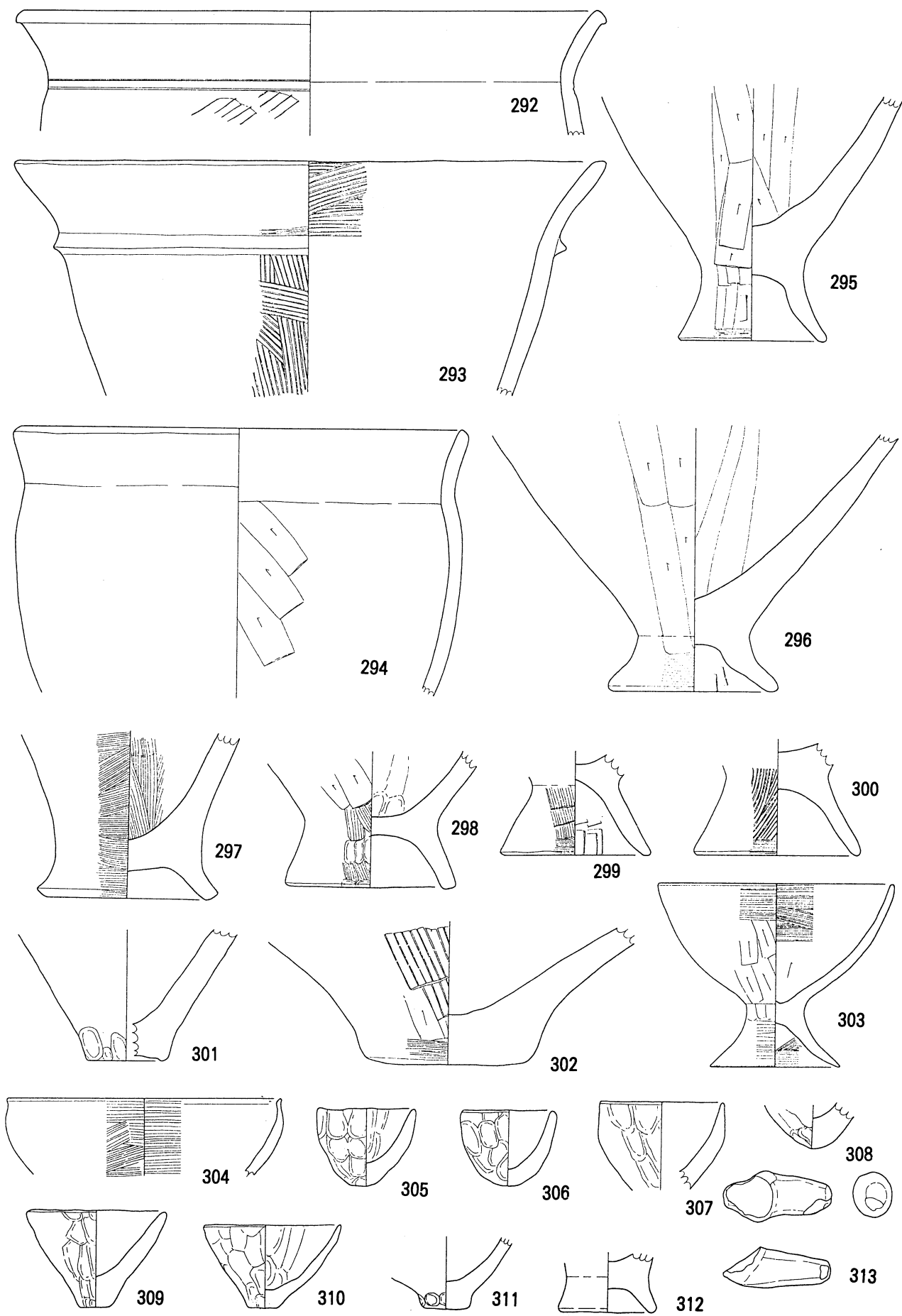
瓦（第48図）

瓦は古代の瓦と近世の瓦が出土している。263は近世の鬼瓦の一部である。島津義久が舞鶴城を築城した時の瓦ではないかと思われる。第48図263の実測図の左側の鬼瓦は鹿児島城跡（鶴丸城）から出土したものであるが、ほぼ同様の瓦と考えて良いものである。鹿児島城と舞鶴城とが密接な関係にあったことを裏付ける資料である。264は軒平瓦であるが、小破片のため瓦頭文様についてははっきりしない。265～270は平瓦である。布目瓦であるが、外面は縄目タタキ・格子目タタキ等がみられる。大隅国分寺で使用されている瓦と同じものと思われる。

須恵器

271・272は蓋である。271は復元口縁径14.1cmを測るもので、器高はやや高く、天井部は丸みを帯びるものと思われる。口縁部には突起をめぐらし、内面にはわずかに段を有する。273～275は平底の坏と思われる。276～282は高台を有する椀と思われる。276以外は高台が外側へふんばるものである。283は復元口縁径9cmを測る壺の口縁部である。しまった頸部より外反した後に屈曲して立ち上るもので、口縁端部は平坦におさめる。体部が欠損しているため全体形状が把握できないが、甕の可能性もある。284・285・287・290・291は甕である。284・285は頸部より外反した後、口縁下位において屈曲して立ち上る口縁部で、端部は平坦におさめる。284は外面に1条の沈線による波状文を施す。285は復元口縁径37.2cmを測るもので、頸部外面に3条の櫛描波状文を2段に施すものである。287は外面に平行タタキ、内面は同心円タタキである。290は復元口縁径24.9cmを測る。頸部がしまり、口縁部は大きく外反するもので口縁下位に突起がめぐるものである。外面は平行タタキである。291は器壁が薄いものである。外面はきめの細かい格子目タタキが残るが、内面はナデのためタタキは残らない。286は頸部から直行気味に立ち上った後、口縁部が折れ曲がるように外反するもので壺と思われる。288・289は壺の底部と思われるものである。

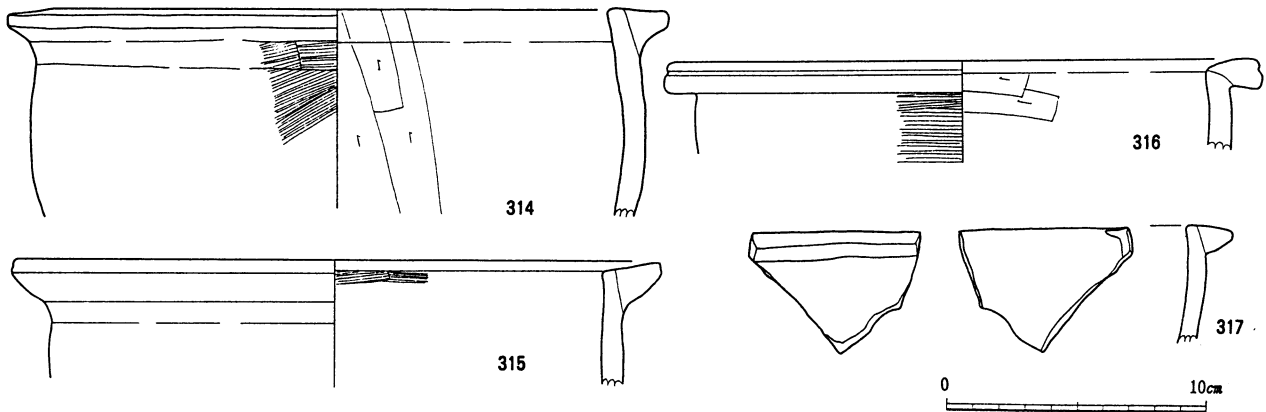




第50図 古墳時代遺物実測図

古墳時代の遺物

292～300は甕形土器。292は口縁部が外反するものである。293は口縁部直下に三角突帯を1条めぐらす。294は口縁部がわずかに外反するものである。295～300は中空の脚台である。301は鉢形土器の底部と思われる。302は壺形土器の底部と思われるものである。303は口縁部径13cm・器高10cmを測る鉢形土器で中空の脚台を有するものである。304は鉢形土器と思われるが底部は欠損のため不明である。305～311は小型の手捏土器である。いずれも指頭による調整痕が明瞭である。312は中空の脚台である。313は杓型土器の柄の部分である。



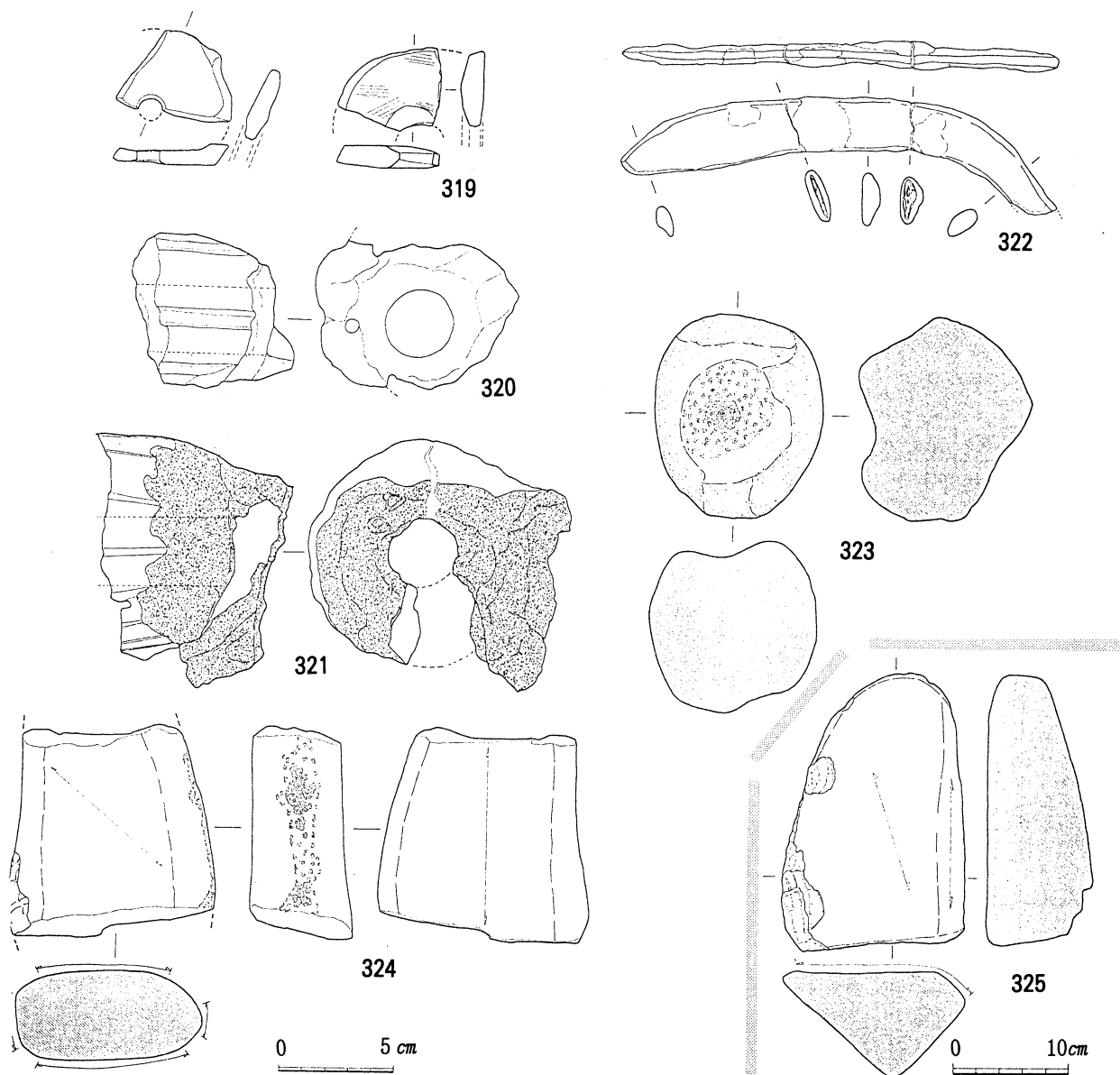
第51図 弥生時代遺物の実測図

弥生時代の土器

314～317は甕形土器。いずれも口縁部が逆L字状に外反するものである。314は復元口縁径25.5cmを測る。口縁部の外反部は短く、張り付けによるものである。外面はハケ目調整、内面は縦方向のヘラ削りである。315は復元口縁径15.2cmを測る。口縁部はやや上方に外反するが、これも張り付けによるものである。316は復元口縁径22.8cmを測る。口唇部はM字状を呈するものであるが、張り付けによるものである。外面はハケ目調整、内面は横方向のヘラ削りである。317も口縁部は張り付けによるものであるが、端部は丸くおさめるものである。

その他の遺物

318・319は中央に穿孔のあるもので紡錘車と思われる。318は土師器の底部を再利用したものである。319は石材は砂岩で擦痕が認められる。320・321は筒状を呈するふいごの羽口である。320は外径6.6cm、孔径3cmを測る。321は外径9.9cm、孔径3cmを測るもので、炉内に挿入されるほうの端は溶解し、スラグが付直している。羽口の装着角度は約60度である。323は凹石である。作業面は良く凹み、敲打痕が顕著である。324はすり石で、作業面は上面・下面の両面である。側面には敲打痕も認められる。325は平坦な作業面に擦った痕跡が認められるものであるが、用途については不明なものである。322は鎌状に湾曲する鉄製品である。断面は錆により明瞭ではないが、内側に刃部を有する感じである。用途については不明であるが、鎌ではないかと思われる鉄器である。



第52図 その他の遺物

第5章 まとめにかえて

国分高校の体育館建て替えに伴う2次に分けて実施した発掘調査の成果として、次のようなことが上げられる。

近世

国分舞鶴城館の大手門につながる幅五間の道とその東側の石垣が確認された。この点では「国分諸古記」と整合する。しかし、その東側は「国分諸古記」によれば「御犬垣跡 当分衆中屋敷」と記録されているけれども、発掘では確認できなかった。おそらく、その後のいろいろな建物の改廃に伴って盛土・削平が繰り返されたためであろうと思われる。

中世

慶長9年の島津義久による舞鶴城築城以前は水田が広がっていた事が分かった。城山は中世の山城であり、そのふもとには平時の屋形があって、舞鶴城はその屋形の敷地を利用したと考えられていたが、中世の屋形跡の片鱗すら見つからなかった。おそらく中世の屋形の規模はずっと小さいものであったのだろう。

遺物としては、多量の青磁・白磁が出土しているが、これと結び付く遺構が見当たらない。今回の発掘区以外で何らかの建物遺構が見つかることを期待したい。

古代

第1次調査のⅢ期の遺構が相当するかもしれない。Ⅲ期の遺構とした溝の性格は不明であるが、多量の国分寺瓦が出土しており、大隅国分寺域がここまで広がるかどうか、今回の調査では確証がつかめなかったが、今後の調査に期待したい。

第2次調査で検出した真南北の水田畦畔が条理遺構であるのかどうか、これもまた確証が得られず、その可能性を指摘するに止まる。

古墳時代

本御内遺跡のすぐ近くには城山山頂遺跡・妻山元遺跡と2つの大きな集落遺跡がある。本御内遺跡内で多量に出土した成川式土器はこれらの遺跡に由来するものなのか、それともこの2遺跡とは別に国分高校や国分小学校の敷地内もしくはその周囲に集落があったのか、新たな疑問が生じた。

また、それとは別に、統計的に処理したのではないが、本御内遺跡ではミニチュア土器が割合的に多かったように思われる。祭祀遺構は確認できなかった。

弥生時代

中期の住居跡が確認された。また、破碎鏡とともに東九州系の安国寺式土器が出土した。弥生時代における九州東回りの人の移動を示唆するものであり、今後の類例の増加に期待したい。破碎鏡は方格T字鏡と呼んだらいいのだろうか、方格にT字と四乳はあるものの、L字V字等を欠く。幸いなことに、地下水位が高く常に水に浸かって還元状態で埋蔵されていたためであろうか、かなり保存状態が良い。

以上、今回の調査で解決された事柄よりも、新たな問題提起ばかりであるが、この問題提起をこの調査の成果としたい。最後に、この夏は鹿児島県では未曾有の災害に襲われた夏であった。発掘は水との戦いであった。共に苦勞して頂いた作業員の皆様に深甚の謝意を呈して結びとしたい。

本御内遺跡（舞鶴城跡）出土の陶磁器について

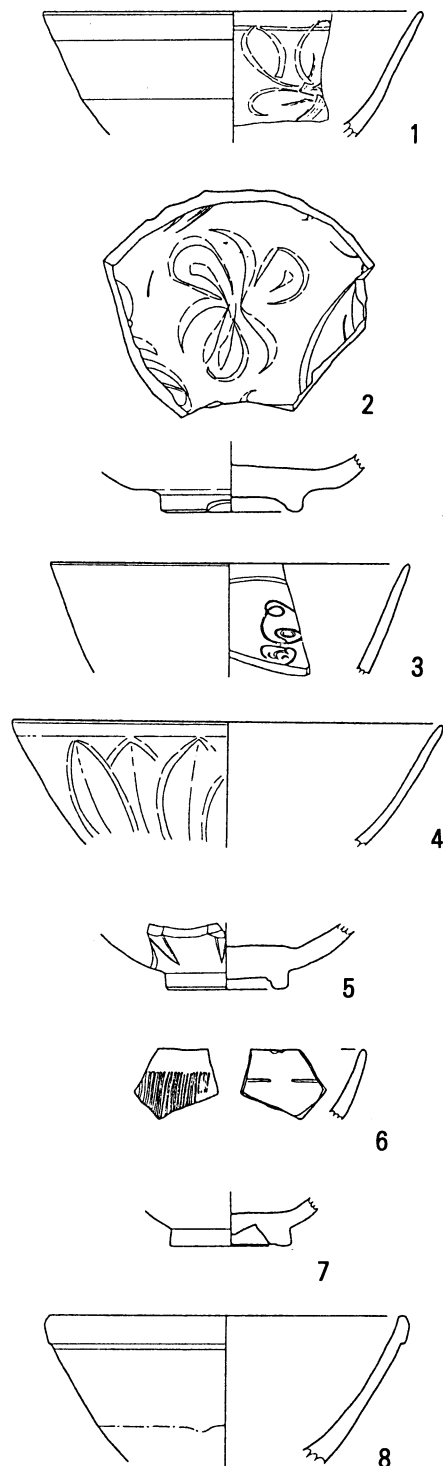
亀井明德（専修大学文学部）

この遺跡の各発掘区から中国陶磁器を検出しているが、1ヶ所からまとまって出土しているのではなく、かなり分散した状態である。そこで、遺構からひとまず切り離して、どういう時期の遺物が検出されているのか、その傾向性を把握してみたい。結論から述べると、出土陶磁器は時期的に下記のように2分でき、12世紀後半から16世紀前半までの間、若干の途切れを挟みながら、この地で需要されたといえる。

A 12世紀後半～13世紀

この時期に生産されていたとみられる中国陶磁器として、竜泉窯青磁碗・皿・壺、福建・広東省産白磁碗、景德鎮窯系青白磁合子あげられる。

青磁では、図※（以下同じ）の1・2の碗は内面に片切り彫りで蓮華文を、内側面と底部に刻み、透明釉を高台脇まで施す。3は同様な釉調で口縁を輪花につくり、縦線で内側面を分割して、各区に細目の片切り彫りで草花文をいれる。これら1～3の外面はいずれも例外なく無文である。いずれも竜泉窯の12世紀中葉から後半にかけて生産されていることは、竜東の山頭窯・大白岸窯の調査結果と¹、わが国の出土状況からみていえる²。しかし、両者ともに13世紀前半まで生産を継続していることは、竜泉安仁口窯跡の調査において4と共伴して出土していることによって証明できる。4・5はわが国の鎌倉時代の遺跡からもっとも出土例の多い青磁碗であり、本遺跡からも多い。蓮弁の形態も鑄のある、肉もりをみせるものから、平板な形状まである。12世紀までさかのぼる確実な例はまだ発見されていない。また、比較的長期にわたって生産されたデザインであり、14世紀初めまで継続してみられる。6・7はいわゆる同安窯系青磁碗であり、体部外面に縦に櫛描文、内面には篋と櫛により花文を刻み、玻璃質の透明釉をかけ、無釉の高台部分は粗く、斜めに削りだしている。これも竜泉窯青磁の影響を強くうけて福建省内で12世紀後半に生産された粗製の青磁であり、



わが国では13世紀前半にも出土例がある。

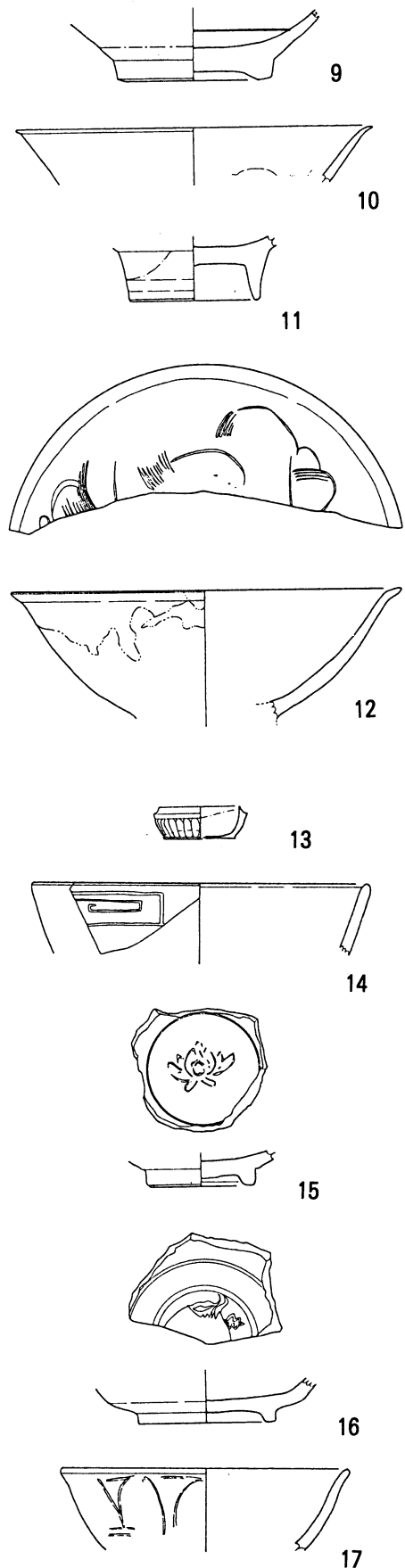
白磁も通有のもので、8・9は玉縁形に口縁を折り返して肥厚させ、高台は肉厚に削り、内底に圈線をいれる。灰白色で気泡のおおい釉薬が体部下半までかけられる。12世紀前半から生産され、13世紀までおよび、形態にほとんど変化をみせない。10・11は高く、細い高台を有し、口縁端部を折りまげる器形であり、11世紀後半から、高台を高くつくる傾向がでてくるようである。このグループには、12のように、内面に主に櫛を用いて施文するものがあり、灰色の胎土に透明釉がかけられ、口縁付近に釉薬がかけられ、口縁付近に釉薬がかなり垂れている。13は青白磁合子の身で、いわゆる菊花文を型造りにしている。

これらの青磁・白磁・青白磁は、いずれも12世紀中葉を生産年代の上限と考えてよく、13世紀前半までが大部分の下限と考える⁴。この間に、本遺跡にもたらされ、食器として使用されたとみられる。

B 14世紀～16世紀前半

元代から明代におよび、竜泉窯系青磁碗、福建省産白磁、景德鎮系青花を検出している。青磁の14は口縁部に回（雷）文帯をめぐらし、下半部には蓮弁文刻むデザインの碗で、元代の後半の竜泉窯製品である。灰色の胎土にやや厚めに透明釉が施され、緑色に発色している。15は内底に蓮華文印花し、釉薬は高台をつつみ、外底に輪状に釉剥ぎするタイプである。16も内底に花文をスタンプするが、高台脇以下は無釉で前者に比較して粗製である。17は、丸味をもつ蓮弁文を体部に刻み、黄緑色釉がやや厚めにかけられている。これらの青磁は、その上限を14世紀中葉におき、15世紀前半ころまで生産されている。それらに比べて、18の稜花皿は小片ではあるが、16世紀前半まで下がる青磁であり、青花との共伴、並行の年代である。

白磁では19は芒口碗、20は小片ではあるが、芒口皿とみられ、これには外底部にも施釉されている。これらは13世紀後半におおくみられ、露胎の高台部分も赤変している。22・23は小型の皿であり、肉厚につくられ、体部下半から釉薬がなく、内底に重ね焼きの砂が



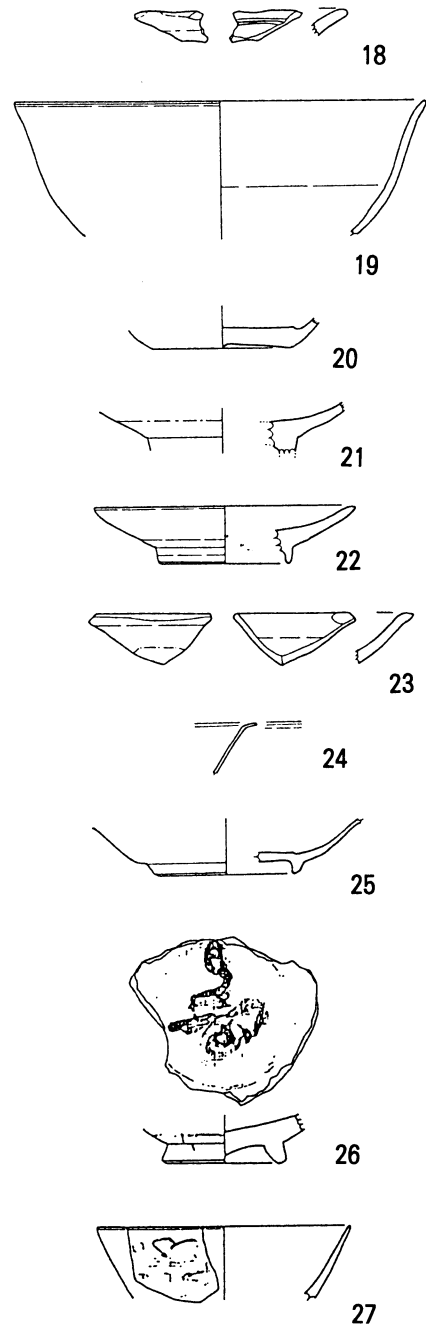
付着している。このタイプの皿は、15世紀代にいれておきたい。これと対称的に24・25は、器肉はうすくつくられ、白濁釉は高台豊付をのぞいてかけられており、このタイプは15世紀末から16世紀前半代に多くみられ、嘉靖期の青花と共伴例がおおい。

26・27は青花碗であり、26は内底に「寿」字を描き、16世紀前半代の嘉靖期を中心とした時期の製品である。

このほかに、粗製の青磁長壺、白磁香炉の小片を検出している。

以上述べたように、本遺跡から検出できた中国陶磁器は、2時期に大別できる。すなわち全国的に中国陶磁器の出土が多くなるのは12世紀後半からであり、ここでもそれに呼応するかのごとく出土しており、しかも、非常に普遍的にある中国陶磁器である。13世紀代も引き続いて、この地では陶磁器が需要されている。さらに14世紀以降も多いとは思えないが、中国陶磁器はここにもたらされており、その下限は16世紀中葉である。上記のA期とB期は、どちらか片方の時期だけの遺跡がおおいようであるが、ここでは連続して需要されている点に特徴がある。しかし、全体として、碗・皿の小型品がほとんどを占め、壺・盤などの大型品は今回の発掘ではみられず、出土量についても、特別に多い状況ではなく、全国的にみるとこれらの点では標準的といえる。

出土陶磁器の概略をのべ、今後の発掘調査の参考になれば幸甚である。



注

- ①任世龍ほか「山頭・大白岸—竜泉東区窯址発掘報告之一」浙江省文物考古所学刊1，1981年
- ②亀井明德「草創期竜泉窯青磁の映像」東洋陶磁19号，東洋陶磁学会，1992年
- ③孫維昌ほか「浙江竜泉安仁口古瓷址発掘報告」上海博物館集刊第3期，1986年
- ④亀井明德「宋代の輸出陶磁—日本」『世界陶磁全集12巻』小学館，1977年
- ⑤亀井明德「日本出土の明代青磁碗の変遷」『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎，1986年

版 圖

図版 1



1 遺跡周辺航空写真



2 土層

図版 2



1 発掘風景



2 第1次調査遺構全景

図版 3

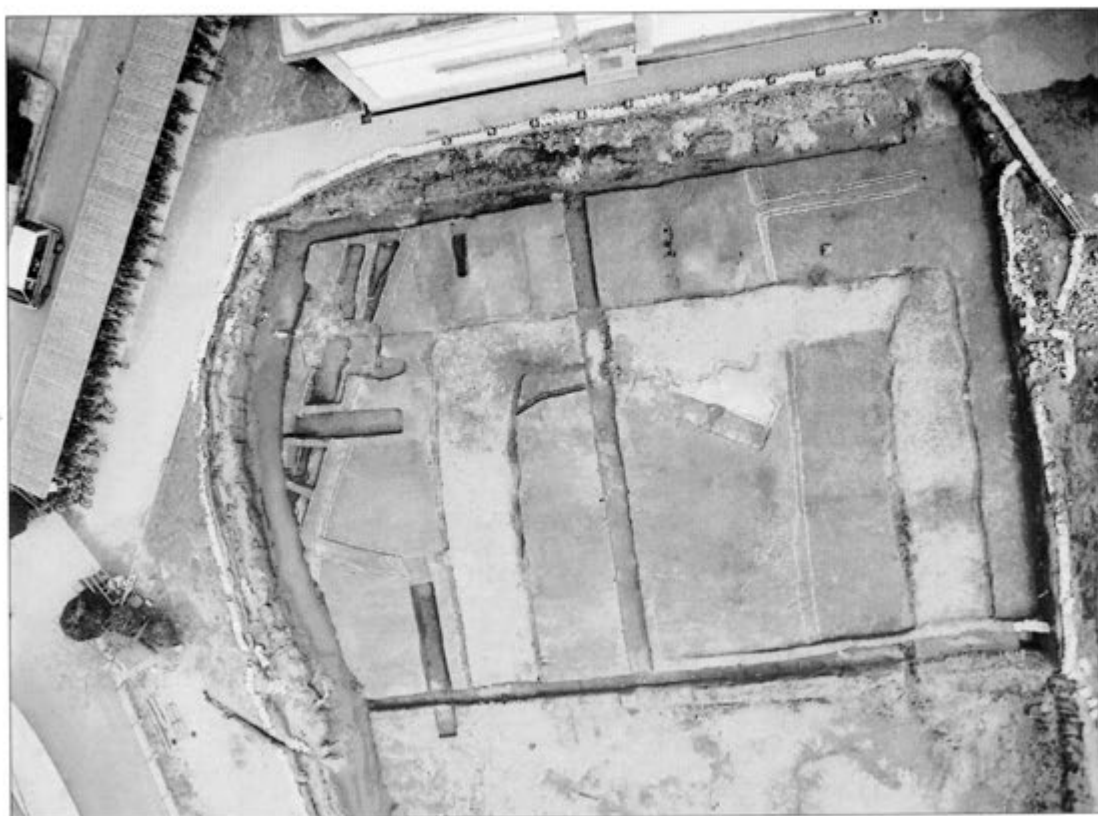


1 大手前道路石垣

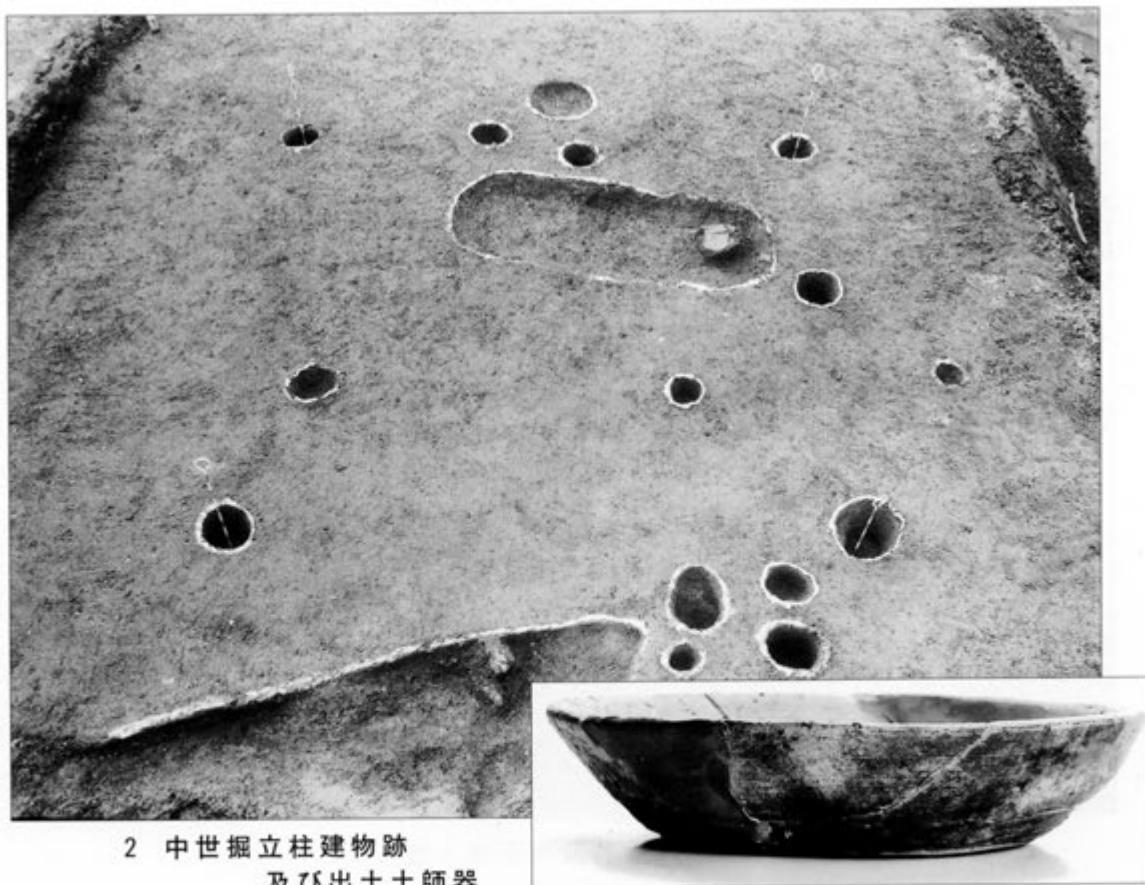


2 大手前道路石垣上面

図版 4

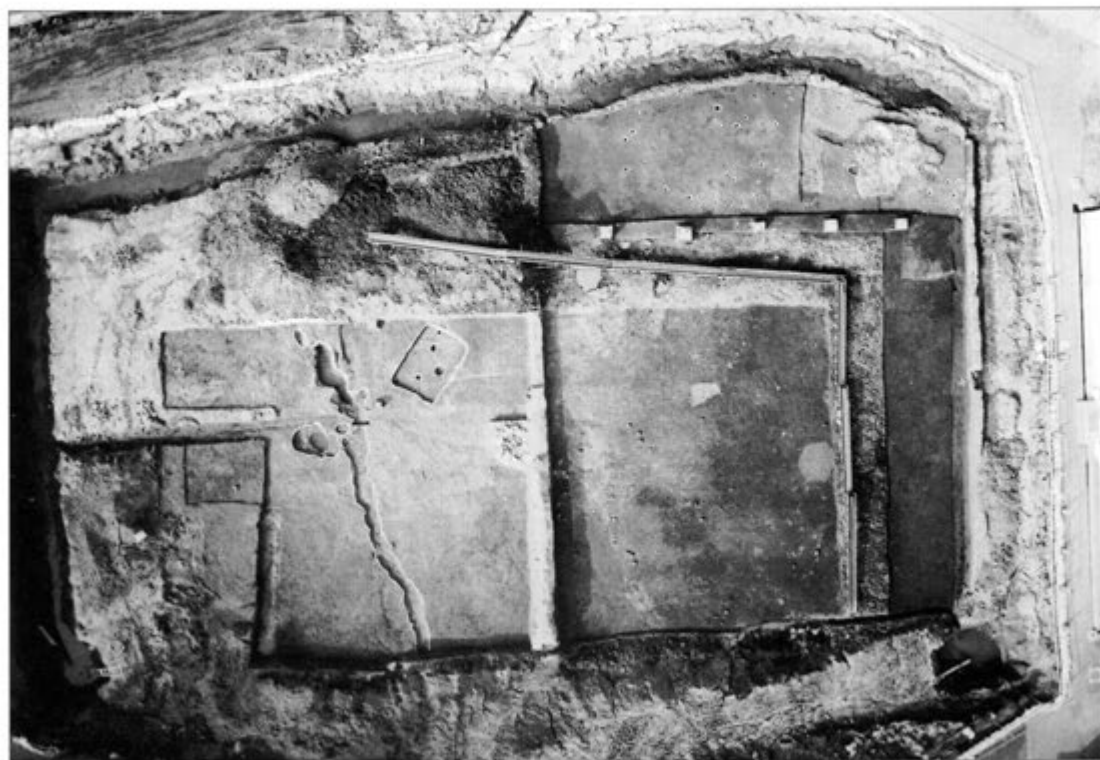


1 中世水田遺構（第2次調査）

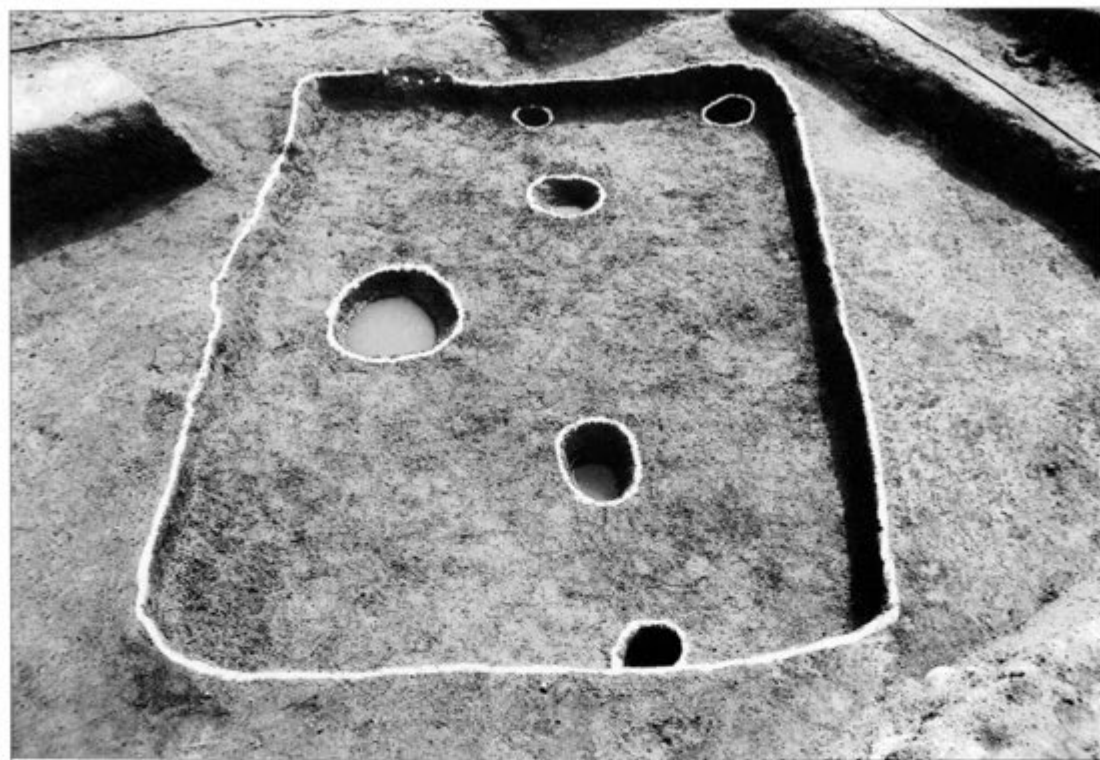


2 中世掘立柱建物跡
及び出土土師器

図版 5



1 古墳時代の溝・弥生時代の竪穴住居跡全景



2 弥生時代の竪穴住居跡全景

図版 6

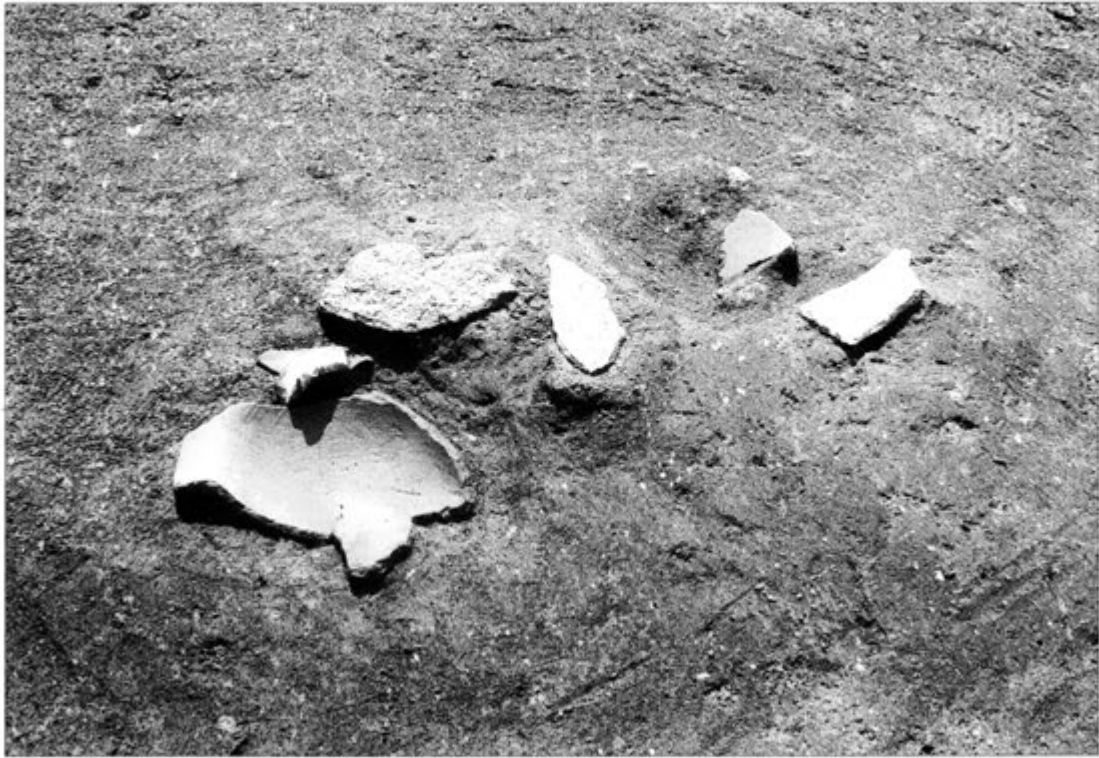


1 弥生時代溝及び遺物出土状況



2 古墳時代溝及び遺物出土状況

図版 7



1 古墳時代の土器出土状況



2 溝内出土土器出土状況

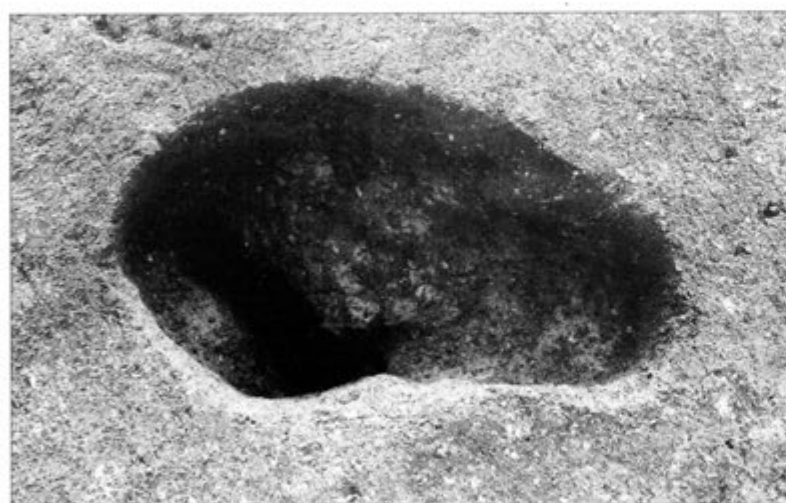
图版 8



1 蓋出土狀況

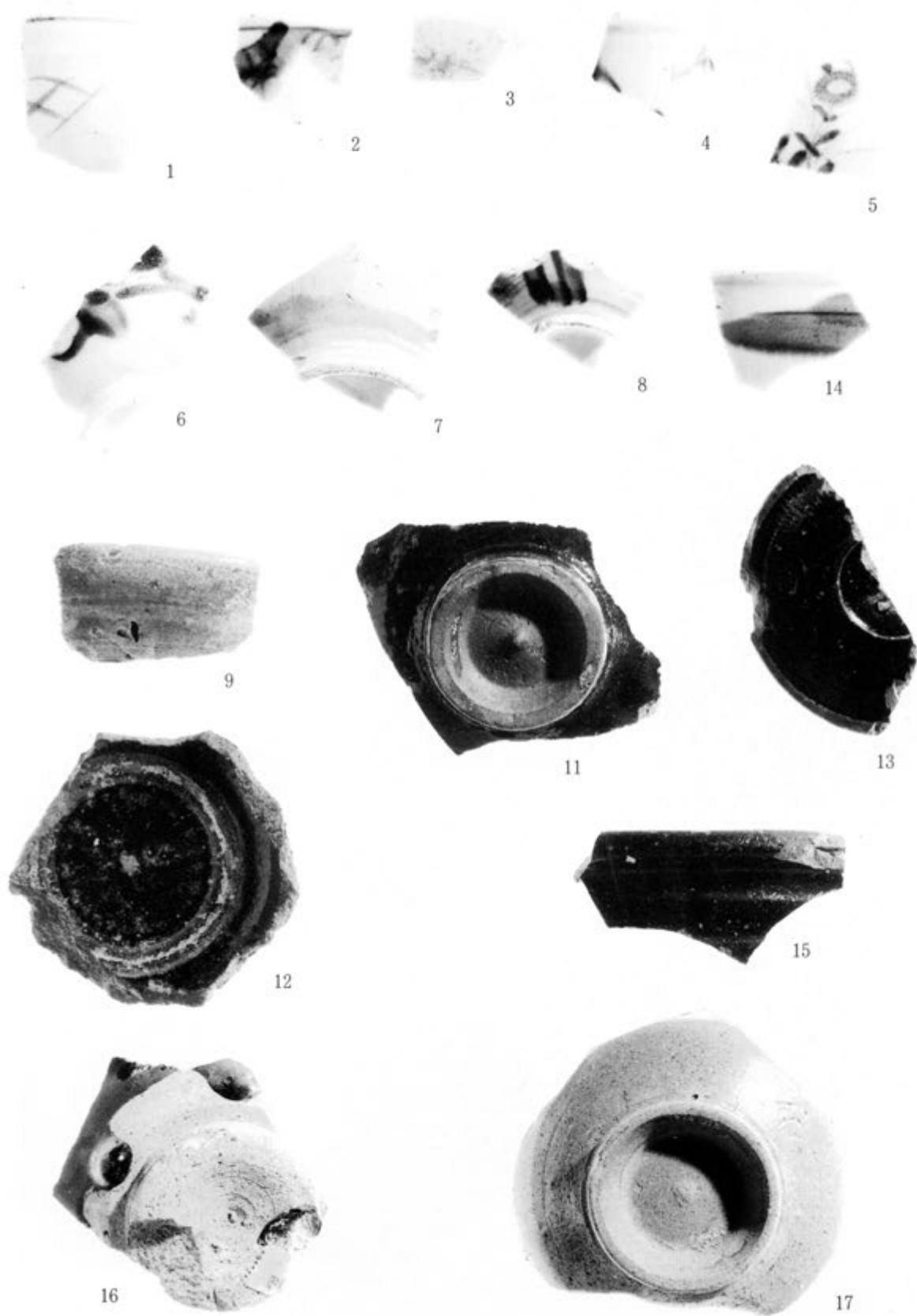


2 壺出土狀況



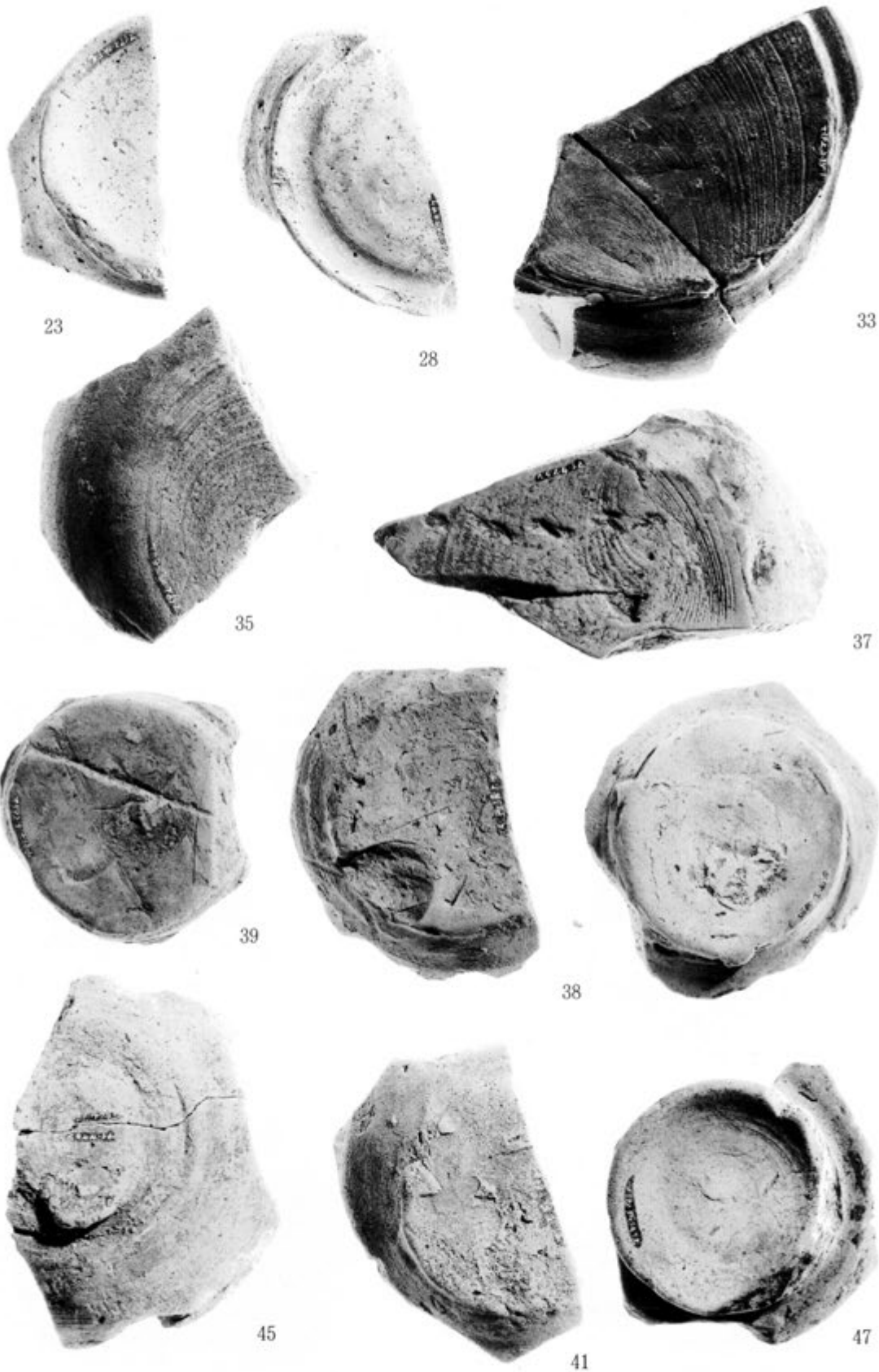
3 土坑 7 出土壺

图版 9



出土遺物(1)

图版 10

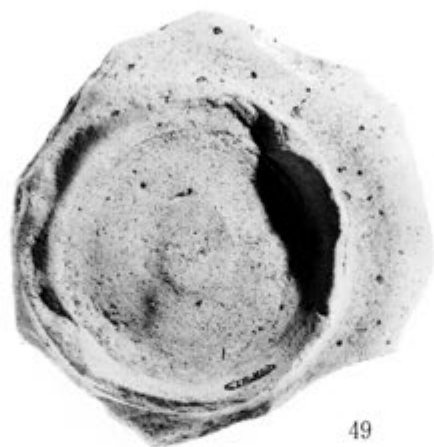


出土遺物(2)

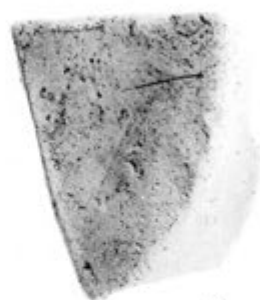
图版 11



48



49



52



58



53



55



57



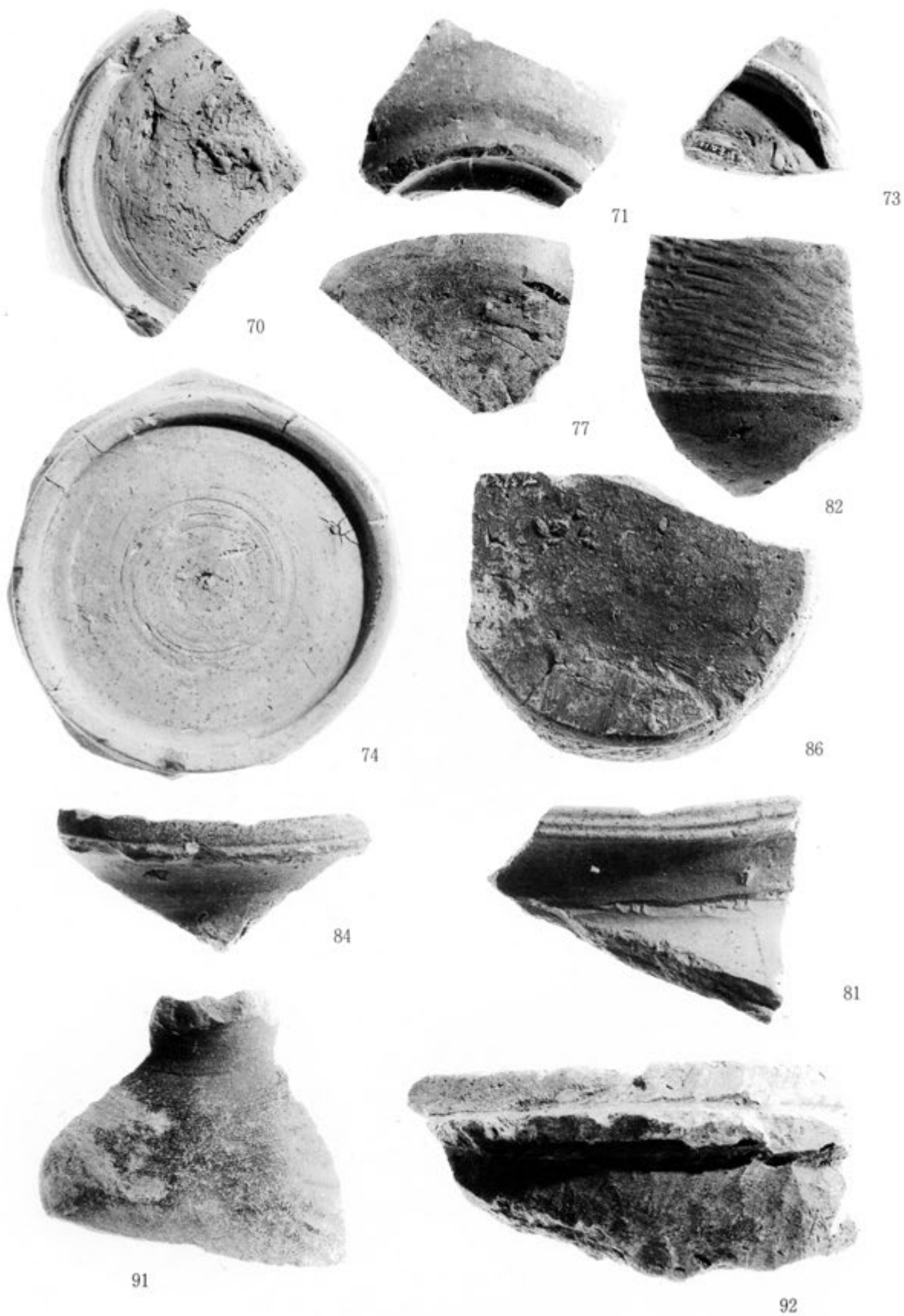
56



59

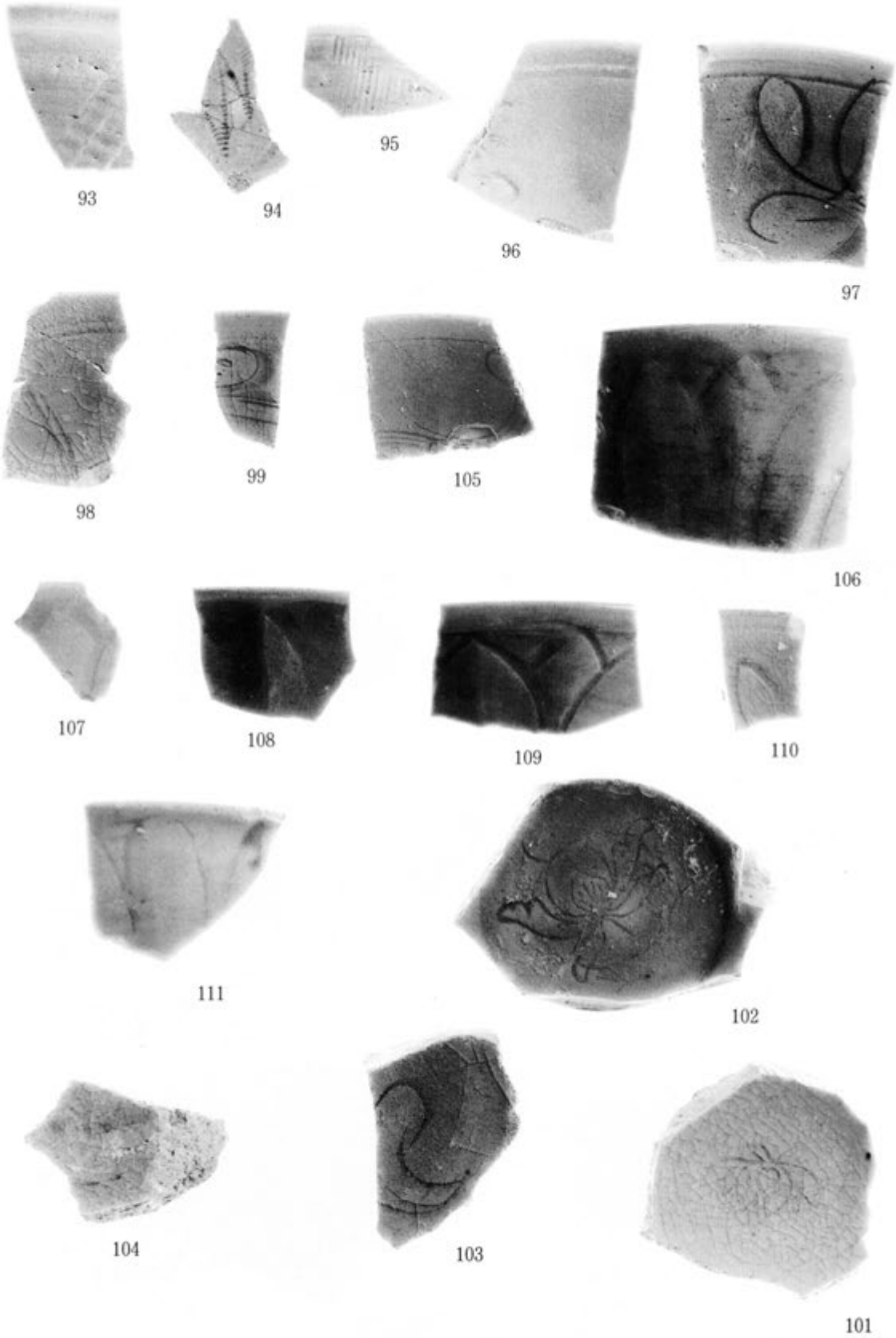
出土遺物(3)

图版 12



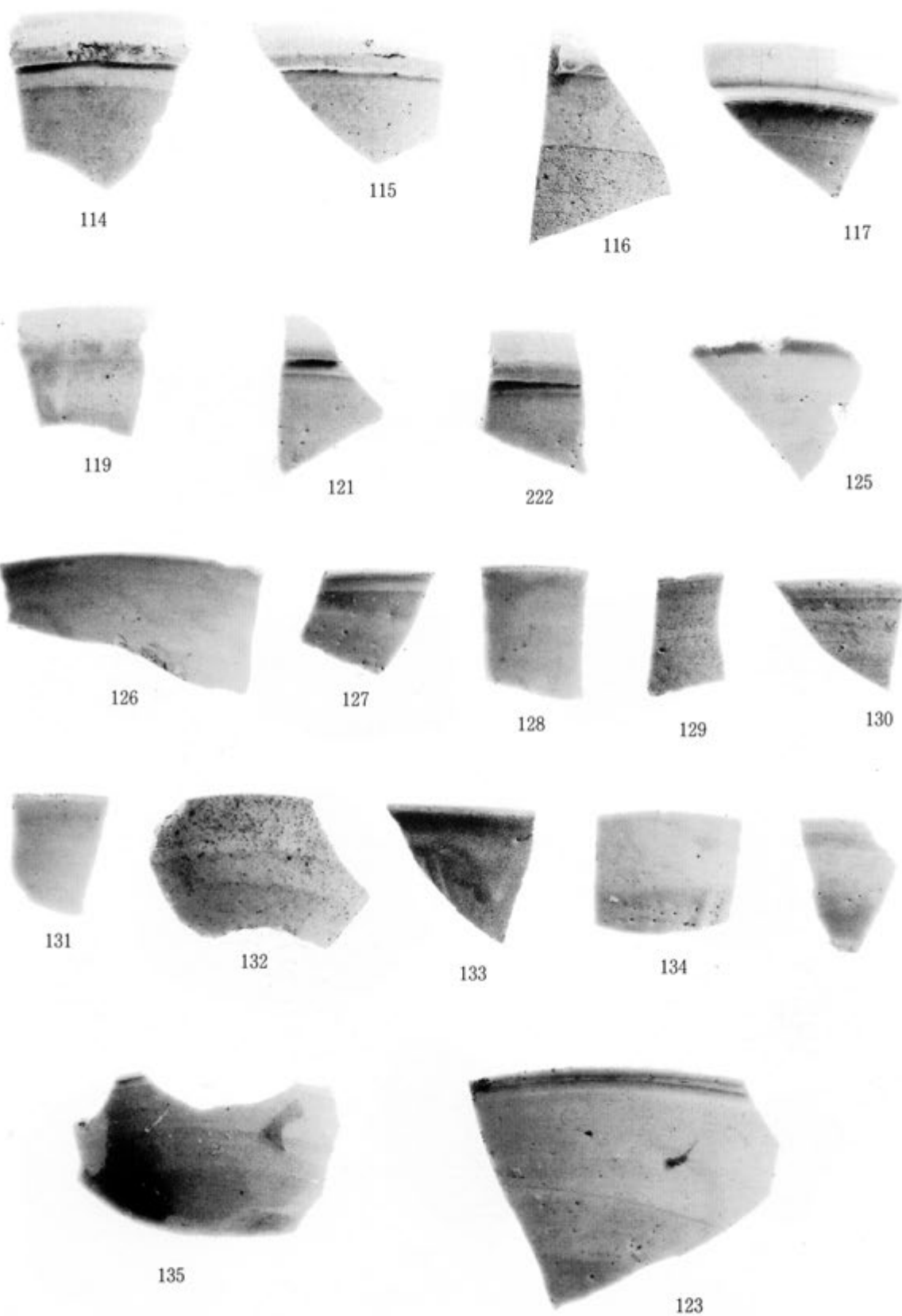
出土遺物(4)

图版 13



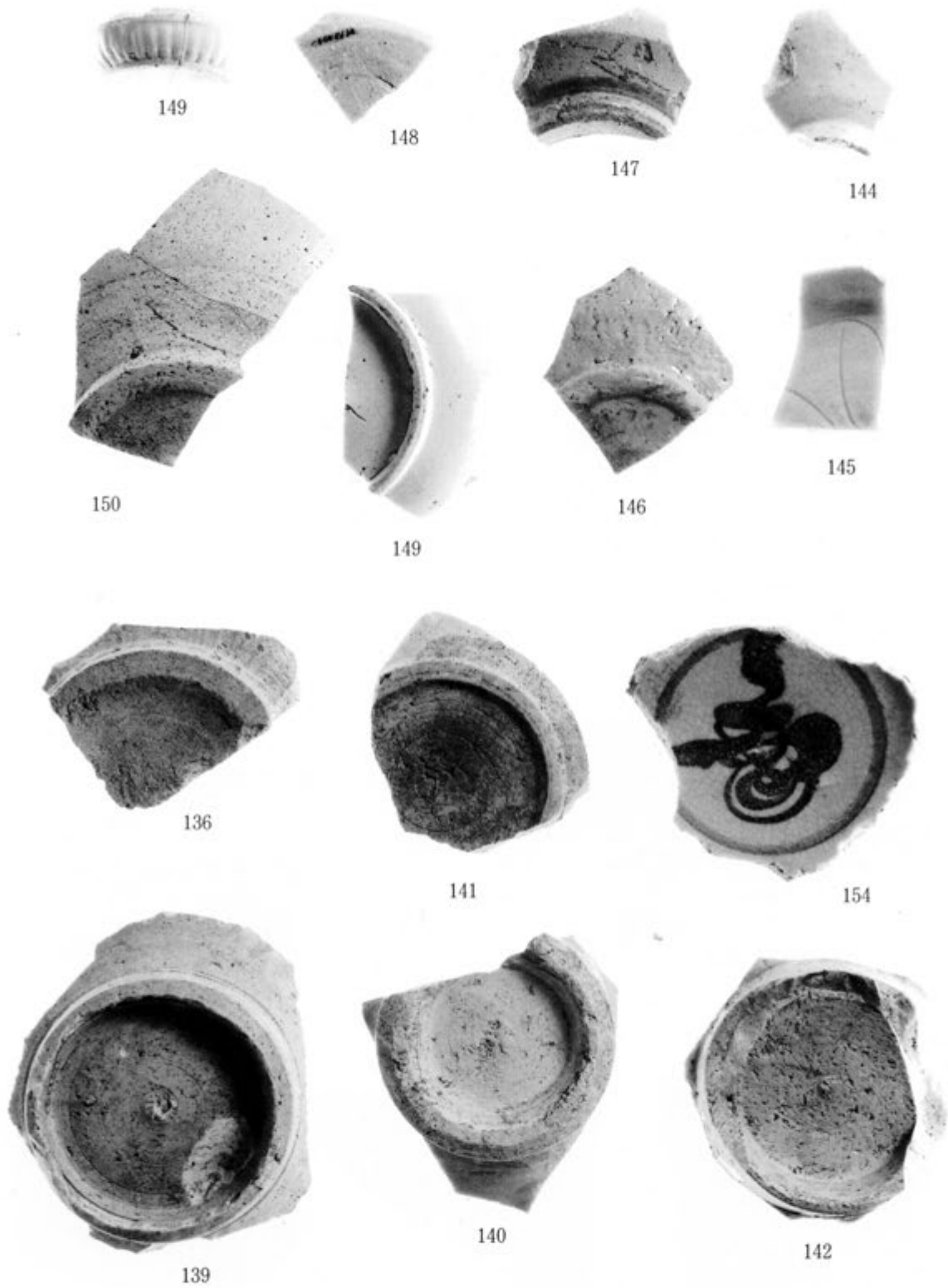
出土遺物(5)

图版 14



出土遺物(6)

图版 15



出土遺物(7)

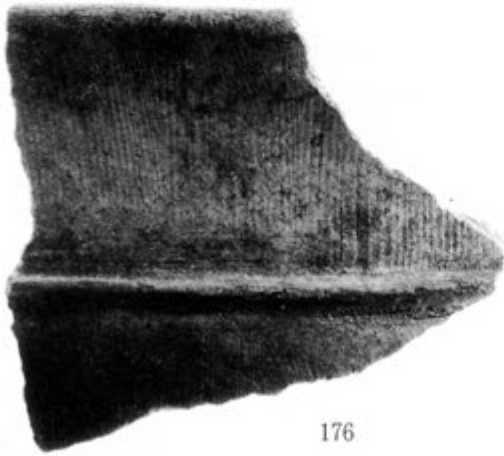
图版 16



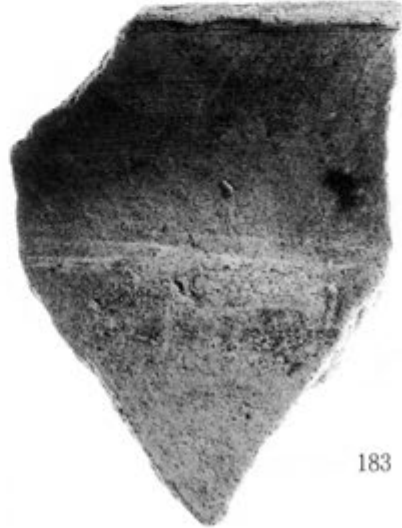
155



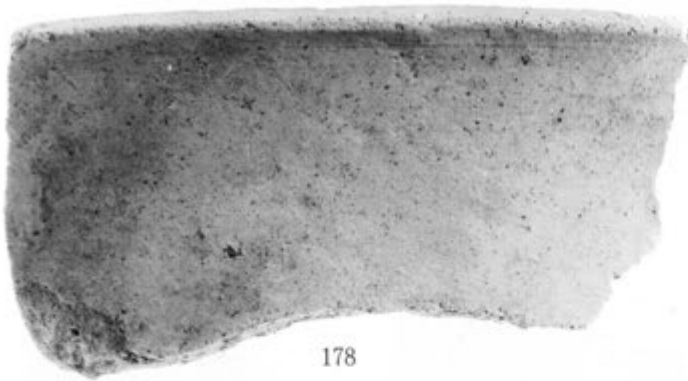
170



176



183



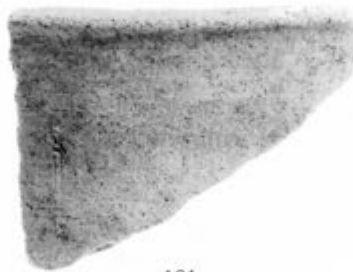
178



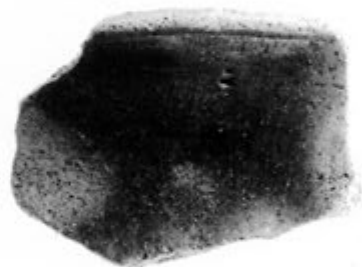
179



180



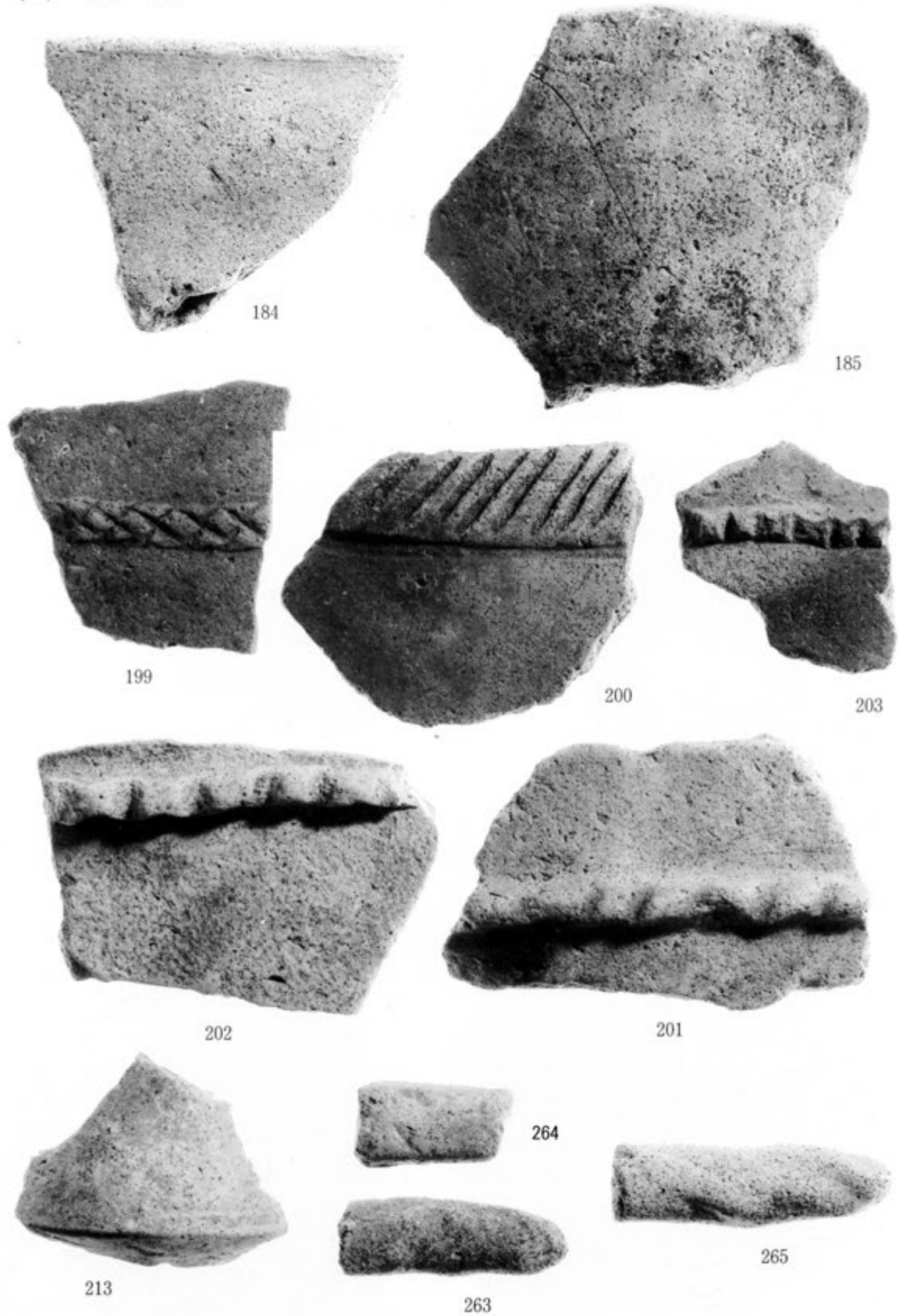
181



177

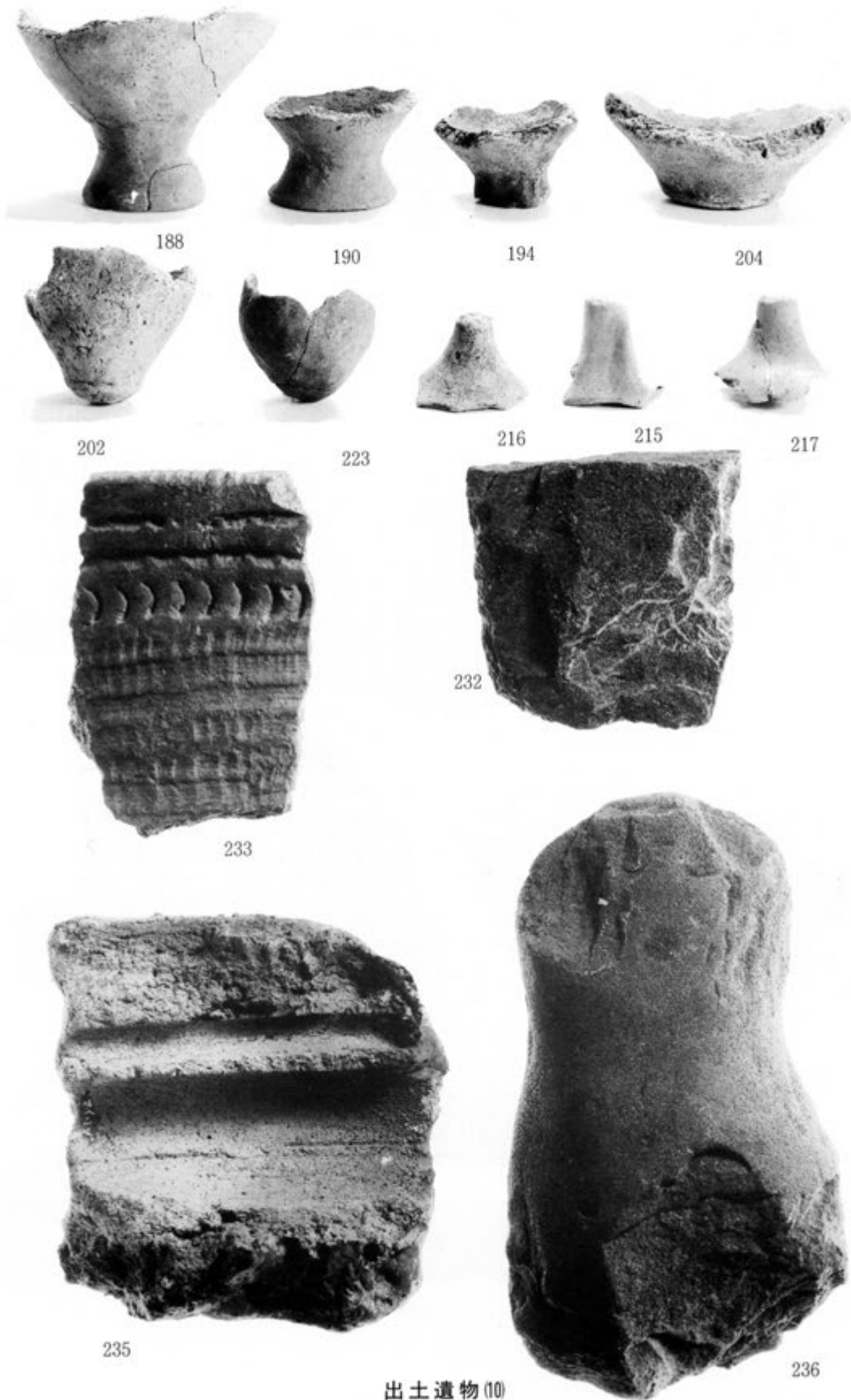
出土遺物(8)

图版 17



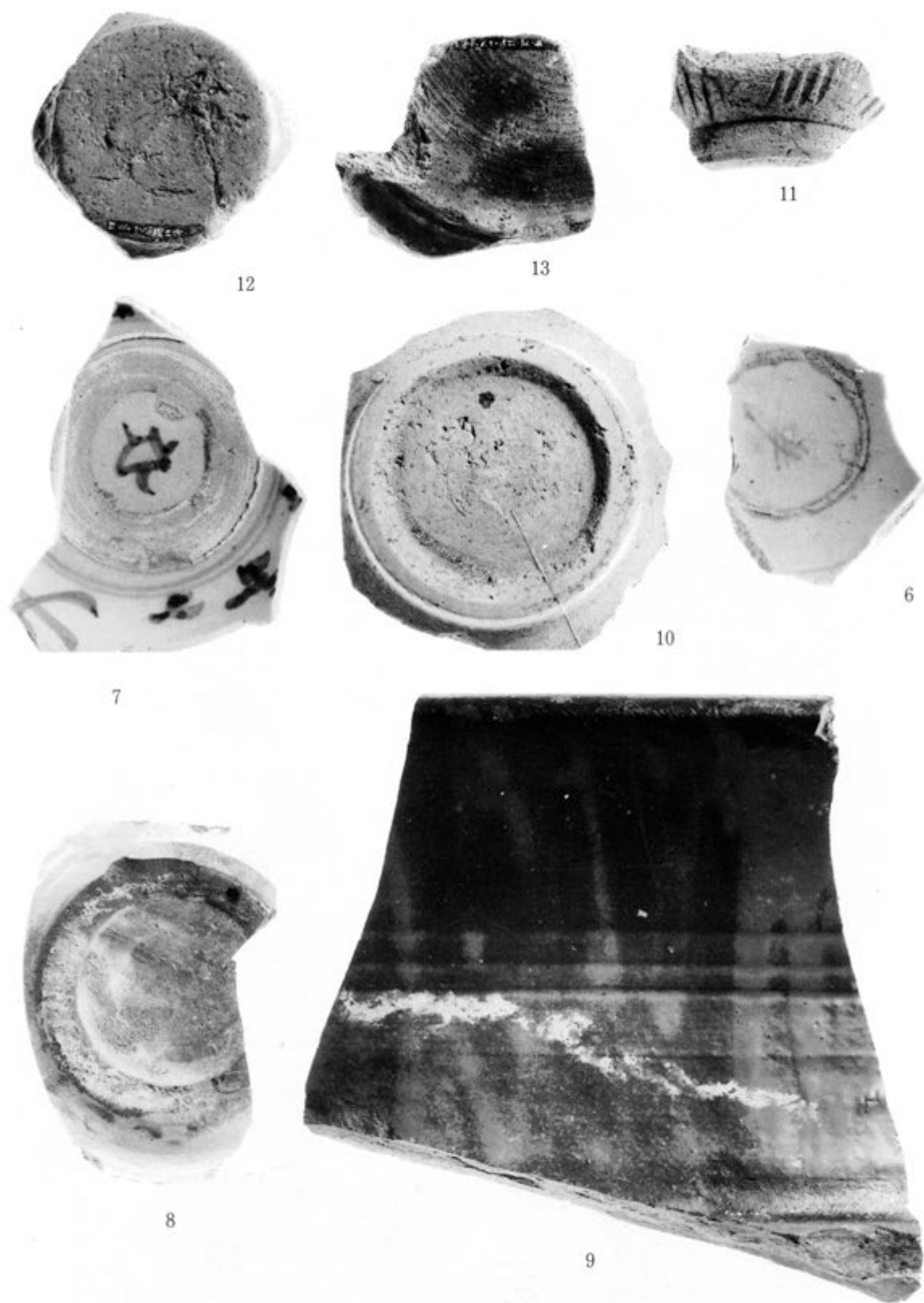
出土遺物(9)

图版 18



出土遺物(10)

图版 19



出土遺物(11)

图版 20



29



38



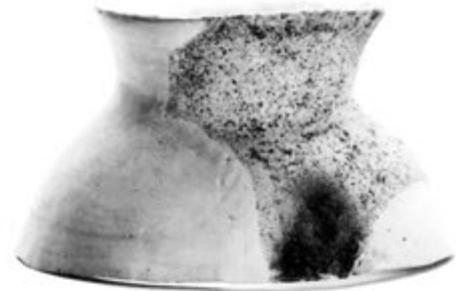
46



40



93



88



113



1017



115



110



108



112



107



114



118

出土遺物(12)

図版 21



48



51



50



49



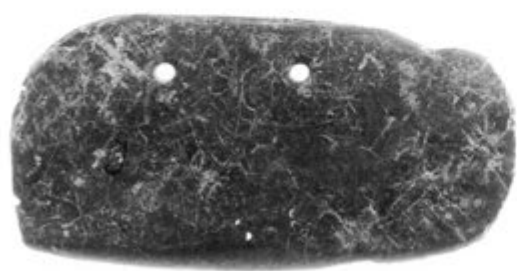
52

出土遺物(13)

图版 22



127



132



133



131



176



180



183



184



184



186



168



170



174



167



169



171

出土遺物(14) (竪穴住居内出土遺物)

图版 23



209



216



217



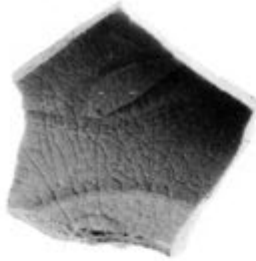
220



221



226



218



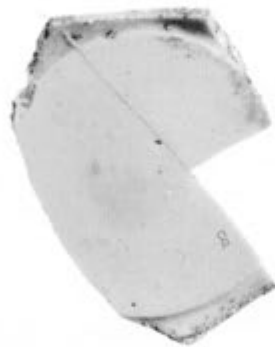
236



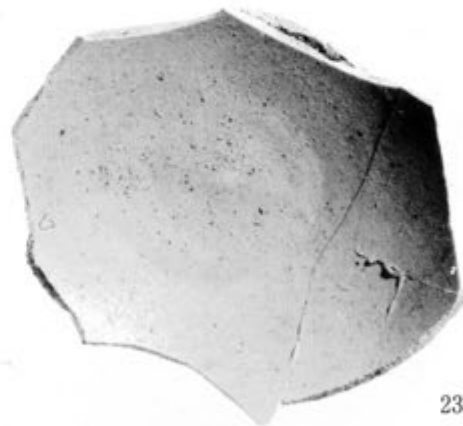
242



241



243



235

出土遺物(15)

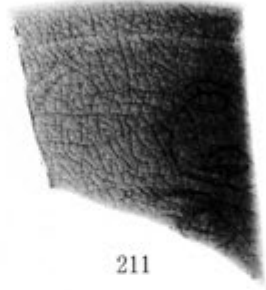
图版 24



208



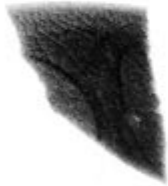
210



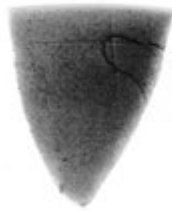
211



212



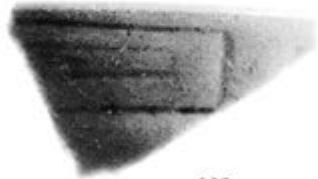
213



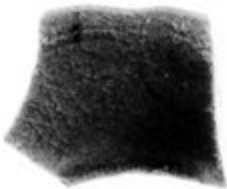
215



219



222



223



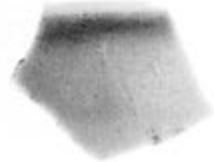
224



225



227



228



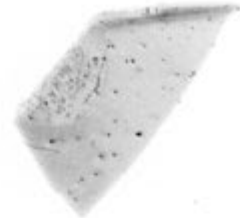
230



232



233



237



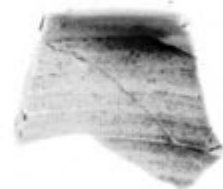
238



239



240



245

出土遺物(16)

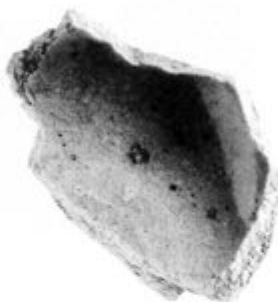
图版 25



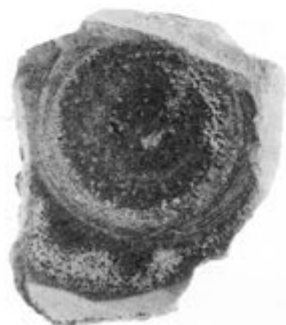
247



248



249



250



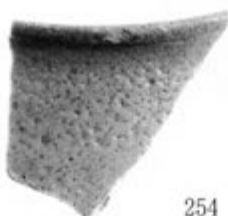
251



252



253



254



255



257



258



259

出土遺物(17)

图版 26



193



203



206



207



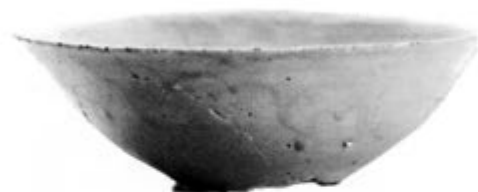
318



319



303



231



256



322

出土遺物(18)

鹿児島県埋蔵文化財センター
埋蔵文化財発掘調査報告書(12)

本 御 内 遺 跡

平成6年3月31日発行

発行 鹿児島県埋蔵文化財センター
〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252
TEL (0995) 65-8787 FAX (0995) 65-8117

印刷 (有)梅木印刷
〒899-54 鹿児島県始良郡始良町三拾町1888
TEL (0995) 67-2256 FAX (0995) 65-7992